

ワイルドハント異伝

椿リンカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ワイルドハントのアンチ・ヘイトファン6人がアカメが斬る！の世界に転生することに。

新生ワイルドハントが、新たな分岐点を作り出す。

合言葉は「こまけえこたあいんだよ！」

【更新状態】メンタル最弱が更に悪化したのがこの有り様だよ!!

【追加事項】：2018/08/25】

ワイルドハント転生者組の転生後の姿のイメージ画像です。別投稿サイトにも載せてますがこちらでは初。【本格始動編】が終了した後のまとめなどに挿絵を収録するま

ではこちらに記載予定

リンネ

コハル・エリオット

アオイ・セシル・オリヴァー

※そろそろ前書きと後書きのネタが尽きてきたので、思い浮かんだ時のみに記載となります

目次

初めの物語

確実に不正を働いた悪魔がまんまとモ

ブ達を騙して転生させる | 1

転生者幼年時代編

「人間とは自己保身をしてしまうもの

だ」 | 8

「人に謝ることは、簡単でいて難しい」

| 15

「100%の悪人なんて」 | 22

「それでも僕らは生き続ける」 | 29

「あの人と私で、生きようと思った」

35

「俺はこの手を離さない」 | 42

ワイルドハント設立編

★転生組キャラ紹介 | 58

「生き残ることに忙しい」 | 65

「俺の妹は色気ゼロ」 | 71

「あの人以上は殺してもいい」 | 81

「俺の弟が悪かったな」 | 88

「あなたはどなんですか？」 | 94

「生きていてほしいと願うのは」

100

タツミ試験雇用編

★現状把握 | 106

「俺の帝具は普通じゃない」 | 115

「それじゃあなんでエリオットさんの
ことを」—— 121

「こんな生活も、悪くはねえな」

127

「いつの間にか、当たり前」—— 133

「アオイのことどう思ってるんだ？」

139

「姉想いの良い人じゃないか」—— 145

「本当に正義を為すなら」—— 152

「仲が良いのか悪いのか、俺にはわから
ない」—— 159

「オリヴァーさんがふわふわしてる」

164

「ドロテアさんは可愛いと思いますよ」

「ウェイブに親近感を覚えたのはなぜ
だろう？」—— 174

「リンネさんはセリユーさんに手厳し
い」—— 180

「サプライズ会食は心臓が飛び出る」

186

「なんで俺のベッドに入ってくるんで
すか?!」—— 192

「これが帝都の現実なのか・・・」

198

第11回 目転生者会議と狩人の叛逆

192

198

198

第11回 目転生者会議と狩人の叛逆

「なんというか、俺、ここにきて良かったです」

212

加害者の事情なんて被害者には関係

ねえ

220

「人の恨みは恐ろしい」

227

「生きているのは、いけないことなのだ

ろうか」

234

転生者たちのそれぞれの今後の話

「俺の、今、答えれること」

250

ワイルドハント本格始動編

「双子の片割れが愉悦しながら私に連

絡してきた」

257

★現状把握2

263

「俺の帝具は」

272

「私はあいつを信用しない」

278

「人には見えないものが見えている」

285

「尊敬する人のかっこ悪い姿なんて、

みたくない」

294

「セシルちゃんには、内緒ですよ？」

302

「・・・セシルちゃんは、死にませんよ

ね？」

308

「僕が守るから、安心してね。姉さん」

324

「僕の姉さんに近寄るな」

330

「セシルちゃん、無事でいてください

い・・・」

336

「好きなんだよ、好きで好きで、愛して

るんだ」

344

「私には、選べません」

350

初めの物語

確実に不正を働いた悪魔がまんまとモブ達を騙して転生させる

【悪魔の勧誘】

始めまして、皆様。私はロッドバルトと申すしがない悪魔でございます。

弊社は普段、顧客の方に異世界へのトリップや転生、憑依を特典付きでご提供させていただいております。おかげさまで弊社も開業から30周年となりました。

その記念事業として、無料で転生できる権利を抽選で与えることになったのです。

株式会社レイクオブスワンの厳選なる抽選の結果、貴方達6人にアカメが斬る！の世界への転生権利を与えることとなりました。

おめでとうございます。

・・・おや？なんですか？

「夢だと思いませんか？では、一睡の夢だと思って参加してみてはいかがでしょう？」

「ほらほら、いいでしょう？ねえ？」

抽選の結果選ばれた貴方達のデータを拝見させていただいておりますが・・・

“偶然ながら6人ともワイルドハントのアンチ・ヘイトファンだそうですね”

“おかしいですねえ、抽選で選んだというのにこんな奇跡があるんですね”

皆様、お互いの顔を見て驚いているそうですね。

ああ、皆様お知り合いでもないのですか・・・なのに、同じ作品が好きで、同じ登場人物が嫌いだというのは”本当に運命的です”

転生には多少の特典を付けることができます。

“帝具の適正”と”ワイルドハント近親者及び関係者となり得るポジションでの転生”です。

・・・貴方達は、会ったこともないワイルドハントの方々を殺したいほど憎んで嫌っているんでしょう？

なるべく殺しやすいポジションにいたほうがお得ではありませんか？

・・・そうでしょうか？幼い頃であれば、いくらでも殺すことは可能です。貴方達の殺しのセンスもあまり関係がありませんしね。

さすがにチート能力やハーレムスキル等などは高額商品となりますので、弊社負担ですと赤字になるのですよ。ご了承くださいませ

その代りに帝具の適正がございます。

・・・残念ながら貴方達の望む”原作に出てくる帝具”ではございません

このあたりは実際に転生いただければ、帝具と巡り会うでしょう。運命的に、ね。さて、ここまで説明しました。

この一炊の夢に、胡蝶の夢に、私からすれば現実として・・・この贈り物を、受け取りますか？

・・・ふふふつ、そうですか。皆さん了承しますか。

それほどまでに殺したい相手なのですね。分かりました。では、こちらの黒い扉をくぐって控室に移動してください。順番に転生するように呼びいたしますので、その間にお互いの自己紹介でもなさっててください。

・・・全員、控室に移動しましたか。

・・・私からすれば、彼らのほうがワールドハントよりも狂っていますよ

出会ったことの無い、聞いたことや見たことしかない相手を殺そうとする貴方達のほうが、よほど狂っています。

そういう人間の業が、悪魔の好物なんですけれどね

・・・そうは思いませんか？

さあ、彼らの物語を見せていただきましょう

現実と同じように、あまりにも呆気なく人が死んでいくような、それでも誰しもが可

能力を持っているあの世界で、彼らがどうやって現実を知り、その現実に向かうのかを

時は過ぎ、帝国歴1024年

特殊警察イエーガーズ、及び秘密警察ワイルドハントの設立のため、両陣営は謁見の間に招かれていた。

イエーガーズはエスデス將軍率いる帝国軍所属組織

ワイルドハントは大臣の息子であるリンネ率いる帝国政治班所属組織

それぞれに独自の機動性を持ち、帝国の敵を殲滅する組織として設立された。

「・・・お前たち、ナイトレイド討伐、及び帝都の治安維持のために頼むぞ」

「必ずやナイトレイドを討ちます」

「・・・陛下と、我が父の名誉のために善処いたします」

エスデスとリンネの二人はそう答え、部下たちを引き連れて謁見の間から出ていく

「・・・っはー、緊張したぜ」

「皇帝陛下と謁見だなんてびっくりしたよ」

「中々に可愛かったわね」

「あれが皇帝陛下……我々の正義を認めてくださるとは、幼いながらに良い皇帝ですわね！」

「……」

「さて、と……おいリンネ」

緊張の糸が解けたイエーガーズの面々を一瞥してから、エスデスはすぐに立ち去ろうとするワイルドハントのリーダー、リンネに声を掛けた。

「……なんだ、エスデス」

「……ナイトレイドを狩るのは我々だ。お前たちには渡さんぞ」

「それを言うのはこちらだ。奴らは我々12人で仕留める。貴様らの出番は無いだろうな」

一触即発の空気だろうか

互いに殺気を出しながら言葉を交わす

「ふっ……貴様はただ単に大臣を殺したいだけだろうか？」

「貴様こそ、鬭争自体が目的の獣だ」

「下剋上しか見えていないお前よりはよっほど充実した生き方をしているぞ、私は」

「獣のような生き方をしている貴様とは違う」

「・・・ふふつ、貴様が年上でなければ、それなりにお前のことを恋愛対象として見ていたのだがな」

「ここにこそ、貴様が御淑やかな女であれば、手籠めにしたがる」

牽制しながらも、リンネは「それではな、戦闘狂」と言い残して、部下たちと共にその場を去った。

「隊長、えーつと・・・仲が悪いんですか?」

ウエイブがおそろおそろエスデスに尋ねる。

エスデスはあつげらんかと「仲が悪いぞ」とさつくりと答えた。

「大臣の息子だが、大臣のことを殺したいほど嫌いだと公言している大馬鹿者だ」

「もう一人、似たような方がいましたが・・・大臣の髪色によく似た人」

「クロメ、それはあの大馬鹿者の双子の弟だ。確か名前はシュラ、だったな。まあ、リンネはシュラと違つて髪を黒く染めているし、シュラのほうは顔に傷があるだろう? 区別はつくはずだ」

イエーガーズ本部へと戻りながら、エスデスは部下たちに説明をする。

「しかし奴と張り合うことになるとはな・・・だが、我々こそがナイトレイドを狩る。お前たち、頑張つてもらおうぞ」

エスデスはそう言いながら、ランの出している微かな殺気に気が付いていた。

それと同時に・・・ランが見つめていたワイルドハントの一人を思い出して笑いが込み上げる。

「どうやら何かがあるらしい・・・」

これから楽しくなりそうだと、戦闘狂たる彼女は笑った。

転生者幼年時代編

「人間とは自己保身をしてしまふものだ」

人の不幸は蜜の味、人の不幸は他人にとつての喜劇

そんな言葉を以前に知っていたけれど、身をもつて味わうとは思つてなかつた。

俺が生まれた先はシリアルキラである小児性愛くそやろうのピエロことチャンプの家だつた。

4，5歳頃から自分の意識がはつきりとしてきたのだが、すぐに嫌悪感に襲われた。あんな子供好きの気持ち悪いデブの弟としてだなんて・・・今はそこまで太つてないけど

だがこの家は心地よかつた。家柄も良くて裕福、両親はチャンプのことは虐待しているが俺には優しくしてくれている。

暖かいベッドで眠ることもできるし、美味しいごはんも食べられる

あいつのようにご飯を抜かれることも、熱湯を浴びせられることもない

奴隷のように働かせられることもないし、骨が折れるまで暴力を受けることもない

このままチャンプが死んでくれるならば僥倖だけれど、機会を見なければ・・・原作と同じことになるのは困る。何の罪のない子供たちが犠牲になるんだから

「貴方は可愛いわね、エリオット」

「お前は可愛いなあ、エリオット」

今の名前を呼んでくれる両親は俺にはとても優しい

だから俺は両親のことが好きだった

チャンプとあまり会話することもなかったけれど、あいつもきつと俺のことは嫌いだろう。

けれどそれは、間違いだった

10歳になった誕生日、両親は新しい服やプレゼントをたくさん買ってくれた。

「ありがとう！」

俺がそう言うのと、両親はにこやかに笑いながら俺の手を引こうとした。

ぐい、と俺の手をチャンプが引いたけど、すぐに母親が鞭で殴りつけた。

「ほら、こっちだよ」

父親は俺とある部屋へと案内した。今まで入ったことの無い部屋で、父親がよく友人を連れて入る部屋だったことは覚えている。中には父親の友人が数人待っていた。

「ああ、エリオット君がきたようだよ」

「今日も可愛らしいね」

にこやかに笑いかけてくるが、なんだろう、違和感がする。

でも、その違和感の正体に気が付く前に父親に蹴り飛ばされ、すぐに父親の友人たちに縛り上げられた。

「なっ、なにをするのっ!？」

「この時をずっと待ってたんだよ」

父親の友人の一人がいやらしい笑みを浮かべてきた。

無理矢理服が引き裂かれる。

そこから先は、思い出したくない

その日からほぼ毎日、入れ替わり立ち代わり色々な人間が屋敷に出入りし始めた。

俺の生活は誕生日から全部変わってしまった。ごはんも貰えるし、暖かいベッドで眠れることもできる、服だって前よりもいろんなものを着るようになった。

けれどそれは全部、俺を愛玩動物として扱ったうえでのことだった。

逆らおうとすると、もつと酷いことをされた。

逃げようとする、焼印を押された。

「可愛いなあ」

「可愛いよ」

「このまま成長しなければいいのに」

そんな言葉を何度も耳元で囁かれ、時には「綺麗に成長しないなら殺してもいいんじゃないか」とまで言われた。

3年が過ぎてなぜか俺の身体は成長しなかった。

体質なのか心因的なものなのか、それは分からないけれどとても嫌だった。早く成長したいのに、早く成長できれば逃げ出せるのに。けれど成長の兆しを見せることもなく、幾度となく弄ばれる。

そんな鬱屈した毎日を送っていたと雨の日のこと、散々に遊び尽くされてベッドの上でぐったりとしていた俺に誰かが声をかけてきた。

薄汚れたコートを被ってるようだが、どうやらチャンプのようだ。

「……大丈夫なのか？」

「……チャンプか、なんだよ」

「俺と逃げないか？」

突然の言葉に、俺は驚いてしまった。

あまり言葉も交わしてこなかったこいつにそんなことを言われると思ってなかった

からだ。

「なんで、いきなりそんな・・・」

「俺だけ逃げるわけにはいかねえだろ」

「・・・ははっ、もしかしてあれか？自分が俺よりマシだっと思っていたいから、すぐ近くに置いておきたいから・・・そんなこと言うんだろ？」

「・・・」

「今まで自分だけ虐められてたのに、一緒のとこまで落ちてきたから本当は楽しくて嬉しくて仕方ないんだろ、なあ？見下して嘲笑って、今度は俺のことを・・・」

俺がそう言っているとひよい、と担がれた。

体格が多少良くなったチャンプに簡単に担がれ、そのままどこかに運ばれる。

「なっ、なにしてんだよ・・・」

「静かにしろ、見つかるぞ」

「・・・なんなんだよ」

「うっせえな。どうせこんなカス共しかいないとこ抜け出すならお前も誘ったほうがいいって思っただけだ。てめえが考えてるようなことまで気は回してねえよ」

めんどくさそうにそう言われ、そのまま屋敷から脱出する。周囲を見渡して、誰もいないかチャンプが確認しているようだ。担がれている俺はふと、あいつの腰にナイフが

ぶら下がっているのが見えた。どうやら武器として持ち出したらしい。

・・・もしかして、今なら殺せるんじゃないだろうか。

そうすれば子供たちも犠牲になることなく、ワイルドハントの一人を原作突入前に潰せることに・・・

「・・・」

今、殺せば、俺はどうなる？

もしここで殺してしまつたら、もしかしたらチャンプにしていたような虐待を俺にもするかもしれない。

逃げ出せるチャンスが無くなるかもしれない

一生俺は、あの気持ち悪い大人たちの玩具として生きていかなくちやいけないのか？
ずっとずっとずっと、このままの生活を送らなくちやいけないのか？

仮にここでこいつを殺して俺だけ逃げれても、俺のこの体は成長できるんだろうか
もしも子供のままでとしたらろくに働けないし、戦うことだつてできない

この世界では子供というのは圧倒的に不利な生き物で、大人がいければ淘汰されてしまふ。野盗も多いし、子供を専門に拷問や凌辱をする貴族も多い。

そんな奴らに狙われる可能性だつて十分ある。何より危険種がうろついているから無事に街まで辿りつけるか分からないし、もしも屋敷の住人や関係者が追手を差し向け

ることをすれば・・・それからも逃げ切らなければいけない。

俺は一人で、生きていけるのだろうか

俺が嫌な思いや痛い思いをしてまで、チャンプが引き起こした事件の犠牲者を守る意味はあるのだろうか

だって、どうせ死ぬのが決まっているのに

なんでわざわざ俺が不幸になってまで助けないといけないんだろう

「よし、いねえようだな・・・おい、どうした？」

「・・・な、なんでも、ない」

「急に大人しくなったな」

「・・・なんでもないよ、兄さん」

「!」

出来る限りの作り笑いを浮かべて、媚びるような言葉でチャンプにそう言った。

「人に謝ることは、簡単でいて難しい」

貧乏は人の心を豊かにする

・・・んなわけねえだろばああか!!

実際に貧乏つつーか貧困に追い込まれてない幸せ者の勝手な理屈じゃねえか！つてことを私は転生してから嫌というほど思い知り、そしてかつての自分の認識の甘さに自分自身が呆れた。

私の半生を振り返ろうじゃないか

私が転生した先はあの元海賊の絶倫レイプ野郎のエンシンのところだった。正確に言えば私はエンシンの実の妹としてこの世に生を受けた。

おかつぱレイパーの妹とか本当吐きそうになったけど子供ならばいつだって殺せるそう思っていた時期が私にもありました。

現実には生きるので精一杯で殺すも何も、自分が死なないことが第一に考えないと自分が死ぬような環境だった。

右を見たら餓死した子供の死体、左を見たら盗みがばれてリンチで殺された子供の死

体

日々の食料を得るにはエンシンと協力して盗んだりしないと生きていけないぎりぎりの状況が続いた。

たまに恵んでくれそうな人がいたり優しくしてくれる人がいるので、当時の私はほしいとついていたりしたこともあった。しかし大体が人身売買の商人や子供専門の性的嗜好者などろくなもんじゃなかった。

そのたびに自分で逃げ出したり、時にはエンシンが減らず口を叩きながら助けに来たこともあった。

真面目に生きようと靴磨きをした時だって、お金をくれないことも多いし、時には売春しようと持ちかける客もいた。売り上げをチンピラや他の大きな子供に盗られたことも少なくは無い。

真面目に、普通に生きようとするといつも馬鹿を見る
人の優しさを信じようとするといつも騙される

そのたびにエンシンは私の頭を叩いてこう叱るのだ。

「だから言っただろうコハル、自分が好きなように生きなきや食い潰されて死ぬぞ」

そんなエンシンにももちろん最初は反抗した。そもそも嫌いだから反発しまくったが、それでも危なくなったら助けてくれたし、2人で協力しないと食料を得られないことも

多かった。

少し成長してからは私はとある小さな飲食店の手伝いができることになった。

「まだ真面目に生きようってのかよ、馬鹿らしい」

「うるさい！エンシンのばか！悪いことしたくないだけだもん！」

「貧乏人に優しくするやつなんざ、優越感持つてるか利用しようとする奴ぐらいだぜ」

「そんなことないもん！ばか！ばか！」

お店の賄い料理をもらえるようになって、エンシンや近くの同年代の子供にあげるようになった

・・・これで油断させて、エンシンを毒殺すればいい

あとは店の人に正式に雇ってもらって普通に暮らせばいいのだ・・・なんて思っていた。

「店主さん、私、真面目に生きたいんです。人の役に立ちたいんですよ」

「君は優しい子だね、人の役に立ちたいなんて・・・孤児なんだろう？」

「貧しくて、心まで貧しくなっただけじゃないから」

「そうだねえ、本当に君は優しい子だ」

お店ではなるべく人に気に入られるように接客をした。幼い子供である私が懸命に生きる姿を御客は憐れんだのか、それとも気に入ったのか、よくおこずかいをもらえる

ようになった

ああ、やつぱりちゃんと他人のことを考えて生きるのは良いことだ

・・・その生活から1年が経過した。

そろそろ持ち帰った賄いに毒を混ぜてエンジンに食べさせようと思っていた矢先に事件が起きた。

ある日、いつものように小さな体でお店にやってくると、店主が怪しい男と話をしていた。

「店主さん、こんにちは」

「ああ、こんにちはコハルちゃん」

「この子かい？いやあ、ちよつと目つきが悪いがまああの顔立ちだね」

怪しい男がじろじろと私を見てきて、嫌な感じがした。人身売買の商人やペドフェリアな大人たちと似たような感じと言えいいのか・・・そう、人間をモノとして見てるやつの目だ。

じりじりと後ずさるけれどすぐに腕を掴まれてしまう

「離して！やだ！」

「コハルちゃんは、人の役に立ちたいんだよね？じゃあ私のためにちよつと売られてくれないかな」

「うちの娼館でばつちり仕込んであげるよ」

頭の中で警報が鳴り響く。やばい、やばい、やばい、これはやばい
早く逃げないといけない。

必死に振りほどこうとするが、男の力が強い。すぐに俵抱きされてしまい、店の外に出してしまう。

「やだあああ！離して！嫌！」

「孤児のクソガキがまともに生きようっていうのが馬鹿らしいぜ」

「っ！うるさい！」

「うっせえガキだなあ。どうせ替えが効くんだから殺してもいいんだが……まあ、娼館に入れないといけないからな」

そんなことを言っていた男の動きがとまり、地面に倒れた。

もちろん私もそのまま地面にたたきつけられてしまう。

「何してんだ！逃げるぞ！」

見上げると、そこにはエンジンがいた。片手には血にまみれた錆びついたナイフがある。どうやら男をあれで刺したらしい。そのままエンジンに手を引かれながら必死に逃げた。

追手がこないことを確認しながら、誰もいない裏路地を歩いていった。

「・・・どんだけお前が他人様のために生きようとしたところで、利用されるに決まってるだろ」

「・・・」

「俺達みたいな貧乏人はな、金持つてる奴らからしたらただの道具なんだよ」

「・・・」

「一度しかない人生を、そんな金持つてる馬鹿共に使われるだけのものにするなんて：俺は絶対に嫌だ」

「・・・」

分かっている

転生してからの生活で、貧困の中で生きるのがどれだけ大変か思い知った。だから、
“そんな当たり前のことなんて分かっているのだ”。

けれども転生前の、普通の・・・普通だけど、恵まれた生活を、真面目に生きていく人生を歩んでいた私はそれを認めたくないのだ。

認めてしまえば、エンシンの生き方を認めてしまう

認めてしまえば、エンシンが生きてきた人生（あくじ）を認めてしまう

為るべくして為った人生だとしても、それでも自分だけのために、利己的に生きるのは悪いことだ。どんな理由があつたとしても、悪いことは悪いことだ。許しちゃいけない

い

・ ・ ・ そんなエンシンが何度も妹（わたし）を助けてくれているのも事実だ
でもエンシンは絶対に「私の為」なんて使わない

いつも自分のために助けていると豪語している。

でも、本当に自分のためにしているならば、私みたいな足手まといなんて放置するんじゃないだろうか、とか。ちよつとだけ思い上がってしまうのだ

随分このおかつぱクソ野郎に甘くなつてしまつたなあ

でもまあ、一緒に生活していたら仕方ないだろう

「・・・あのっ」

「んだよ」

謝ろうと思ったが、次の言葉が出てこない

いや、なんというか素直に謝るのが嫌なのだ。気恥ずかしいとかもどかしいというか、もやもやする。

「・・・なんでもない」

「変な奴だな・・・さつさと行くぞ」

それから十数年経過したが、幼い頃の悪口や反抗の数々について私は謝つてない。

・・・いい加減、謝つたほうがいいとは、思うけれどね。

「100%の悪人なんて」

自分の意識がはつきりしたのが何歳かよく覚えてない。

というよりも、しばらくの間は自分の前世の記憶が本当のものだと思えなかった。

そう、自分の夢だと思っていたのだ。現実から逃げたいためのただの空想や妄想の類だと、そう思っていた。

今でも少し、あれが夢だったんじゃないだろうかと思ってしまうほどだ。

生まれ変わる前、俺はそこそこ良い家庭で育ってきた

マンガ好きなどころについては家族は否定気味ではあったけど、社会人になってからは一人暮らしを始めたから自由にやれていたし、小さな会社の正規社員で働いてきた。

そこそこ充実していたけど、やっぱり何かが足りなく感じていて……そんな時に、あの悪魔と出会った。

ワイルドハントについてはやっぱり嫌いだし、アニメに登場しなくて良かったなつて、知り合ったばかりの奴らとも意気投合できた。

あんなに酷い奴らはいないほうが、みんなから感謝されるだろうし、なんだか……そう、チェルシーが感じていた満足感と似たものなんだと思う。

生きている実感とか、世直しをした実感というか・・・とにかく、そういうやりがい
が欲しかったんだと思う。

結果的には殺すことは無かったし、全然違う方向に行ってしまったけれど

それじゃあ、俺の半生を語ろうか

・・・俺は、奴隷として生まれ育った。

俺の母親を飼っていた男が暇つぶしがてらに「奴隷の子をイチから調教すればコスト
は低い」とかなんとか言って、俺を生ませたらしい。父親がその母を飼っていた男なの
か、それとも別の誰かなのかよく知らない。

そこから奴隷として多くの人々に虐げられた

ただただ、俺は周囲から虐げられて調教されるだけの存在として無駄に生かされた
この国の技術なのか、違法な実験の道具としても使われた。

体も丈夫にされて、実験されて、中も見た目もぐちゃぐちゃになった。それでもまだ
俺は「生かされている」。生きているわけじゃない、何度も何度も痛みで死にそうになっ
て、それでも死ねなくて

「大体遊び終わったなあ」

「こいつもそろそろ替えるか」

「死にかけだからなあ、新しい奴隷でも買うか作ろうぜ」

「そうだな。こんな奴、売る価値も無いし」

「それじゃあ適当にゴミ捨て場に捨てておくか」

「そのうち野良犬が処理でもするだろ」

「もしくは死体愛好好きの奴らが拾うかもな」

「あつはつは、確かにそりやありそうだ」

そんな複数人の言葉がうつすらと聞こえる。もう目が見えないままなので、姿までは分からない

誰かに適当に持ち上げられ、そのまま何かの上に投げ捨てられた。鼻孔を刺激する臭いからして、ゴミ捨て場……まあ、もう息をするのも辛いぐらいだからすぐに死ぬだろう。

なんでこうなったのだろうか？何を間違えたのだろうか？

この世界に生まれてきたのが間違いだっただろうか？

「ほお、奴隷か。まだ生きてるようじゃな」

可愛らしい少女の声が聞こえた

ああ、きつと夢なのだろう

死ぬ間に聞こえている幻聴とか、そういう類のものに違いない。

「ふむ、内臓やら手足もぐちゃぐちゃなのはまだ生きておるとはしぶといのお……よし、

拾うか」

ぼんやりとした意識で相手の言葉を聞くが、考えることすらできないというか、ほとんど声というよりも音として感じていた気がする。

痛みも辛さも慣れきってしまった自分にとつて、これからまた痛いことをされるのかもしれない恐怖心は無かった。

出来ればそのまま、死んでしまったほうがいいと願っていた。

ふつり、と意識が戻った。

なんだか長い間眠っていたような気がする。体を動かそうと思ってもだるくて動くことができない・・・いや、その前に感覚がちやんと伝わっていることや、視覚や聴覚が戻っていることに驚いた。

少し簡素な部屋なんだろうか。首を動かすことができたから動かしてみるが、特に気になるものはない。

がちやつ、と扉が開いて誰かが入ってきた。

ぴよこん、と兎の耳のようにリボンを結んでいる金髪の少女だ

どこかで見たことのある様な・・・そう、夢（前世）で見たことのある、ワイルドハントの一人だ。

当時の俺はまだ前世の記憶を夢だと思っていたから、とても驚いた。
「起きたか？」

「……！」

声を出そうとしたが、喉から声が出ない

「無理をするな。改造したばかりじゃから、体がまだ機能しておらん」

「……」

「怪訝そうな顔をするな。妾はドロテア、錬金術師じゃ」

「……！」

夢で見た、あのドロテアと同じ……じゃああれは夢じゃなかったのだろうか。そんなことを俺は考えていた。

そこまで考えられるほど、少し心に余裕ができたらしい

ドロテアはゆっくりと俺の上半身を起こしてくれて自信ありげに微笑んでいた。

「お主があのような酷い状態で生きていたからな。ちよつと素体として治してみたが……中々に生命力がある奴だったな。なあに、変な改造はしておらん。むしろ人間よりは丈夫になっておるぞ」

「……」

「奴隷か何かだったのだろう。安心しろ、もうその奴隷の印も消しておいた」

「……」

「そんな顔で見るでない。実は妾は助手を探しておつてな。おぬしのような生命力が強い者を探しておつたんじゃ。男手は必要じゃつたしな。安心しろ。人並み程度には扱うからな」

「……」

「そうそう、おかゆを作ったからこれでも食べると良い」

今もまだ夢を見ているようだったけれど、差し出されたおかゆを一口食べる

生まれてきてから、初めて温かいものを食べた。生ごみや虫じゃなくて、ちゃんとした食べ物だ。

「……泣くほど美味かったか？」

「……」

「そうかそうか、妾もそこそこ料理はできるからのお。まだあるから食べると良い」

「……」

それから後のこと

ゆつくりとリハビリをしていく過程で、前世の記憶を全部思い出すことができた。

もちろん、ワイルドハントを殺すこともだ。

けれど俺はその約束を破ることにした

・ ・ ・ 実際に触れ合って、話し合って、悪い部分以外もたくさんいろんなところを見てきたからだ。

100%の悪人なんていない

ドロテアと一緒に過ごしてきて、俺が学んだことだ

少なくとも俺は、自分の命を助けてくれた相手に恩を仇で返すような外道にはなりたくなかった

「それでも僕らは生き続ける」

西の王国の片田舎に僕は生まれた。正確に言えば、転生したと言えればいいだろう。

前世の記憶が戻ったのは4歳ごろだったはずだが、なんだか嘘のように思えて仕方ない。最初の頃は何か妄想とか病気なんじゃないかと思っただけだが、そこまでの思考ができる時点で妄想ではないと判断した。

僕は、魔女と呼ばれたコスミナの弟として転生したらしい。

魔女とは言うが、それもコスミナの歌姫としての才能を妬んだ人々が言い始めた言葉であって実際は普通の少女だった。それに彼女の家族もごくごく普通で、僕も普通の子供として育てられた。

「セシルちゃん、かわいい！」

「んー・・・あついよ、お姉ちゃん」

「コスミナずるいー！私もセシルとあそぶー！」

姉たちから抱き着かれたり、一緒に遊んだり、とても楽しかった。

家族仲はとても良好だから嫌に感じることもない。

元より、前世では自分の家族はとても険悪な仲で、僕も引きこもりのニートだったせ

いだろう。今のこの家族がとても心地よくてたまらなかつた。

普通の家族といったものがよく分からなかつたけれど、今の家族はそんな当たり前の“普通”を与えてくれた。

一緒にご飯を食べて楽しいとか、喧嘩したり仲直りしたり、遊びに行ったり、お手伝いをしたり

たかだかそれぐらいでつて、なるかもしれないけれど……僕にとってはそういう、ちよつとしたことがとても嬉しく感じた。

コスミナについては……狂ってしまったという事実があるから、助けでもないんじゃないかと思つてゐる。

でもそのあと犠牲になる人々や革命軍の人々のことを考えると……

僕にとっては大事な姉だが、その姉の命と多くの人々の命のどちらをとればいいのか。

転生する前に6人でワイルドハントが集まる前に始末すると約束したから、果たさなくはないけない。

他のみんなは上手くやつてるのだろうか……僕はたまたまコスミナだったからよかつたけれど、ワイルドハントは男性陣営がとても危ない。

子供だとしても油断はできないだろう

自宅の庭先にある木の下で読んでいた本を膝上に置いたまま、ぼんやりと景色を眺めてそんなことを考えていた。

これからどうしようかと、自らの指針を考えていると、可愛らしいフリルの服を着たコスミナがこちらに駆け寄ってきた。

「セシルちゃん、どうしたんですか？」

「えっ、あ、ううん。なんでもないよ」

コスミナの人の良い笑顔を見ると、罪悪感が湧いてしまう。

今後の憂いを絶つために、ここで殺してもいいのだろうか。

実際に殺すとすると、やっぱり良心の呵責というものが発生するのだなあ・・・特に

コスミナはワイルドハントの中では比較的まともなほうではある・・・と、思う。

悪人というか狂人になってしまったのは周りのせいだしさ

「セシルちゃん、いつも何か考え事してますよね？」

「えっ、あ・・・」

「お姉ちゃんだからそれぐらい分かります。何か悩み事でもあるんですか？」

「・・・ううん、楽しいことがいっぱいあるから、悩みなんて無いよ」

ただ、貴女のことを殺せるかどうかなんだ

「そうなんですか・・・あっ！でも何かあったらちゃんとお姉ちゃんに言ってくださいね

「？」

「……うん。分かったよ。ありがとう」

にこやかに笑いかけてくる貴女のことを、殺そうとしている僕のほうが狂っているんだろうか

それからしばらくして、コスミナが地元の町の人々から魔女ではないかと噂し始めた。コスミナの歌唱力……いや、人を魅了するほどの素晴らしい歌声に嫉妬した女性たちが噂を流したからだ。

歌が上手いだけの美少女……とはいえ、やっぱり目立ってしまうと釘を打ちたくないのが民衆心理なのかもしれない。僕や他の家族、数少ない友人たちも必死に否定した。

けれども更に多くの人々がコスミナを魔女だと罵り差別した。

僕の前世は実際に差別されるようなことはなく、ニユースやネットでなんとなく知っていた程度だった。だから正直、自分にはあまり関わりのない話だと思ってた。

……まさかそれを、身を持って知るとは思わなかった。

コスミナ以外の、僕たち他の家族も差別されるようになったのだ。

何もしていない、何も隠すこともないのに、誰も彼もが石を投げて、侮蔑の言葉を吐

く

僕たちが弁明しても聞いてもくれない。ただただ「魔女だから」の一点張りだ
そして、あの日が、来てしまった

僕たちの住む家を焼き打ちされたのだ。

「お前たちだけでも逃げろ！」

木の柱に挟まった僕を庇うように助けた父が叫んだ。

燃え盛る木の柱に下敷きになった父の断末魔の叫びが逃げる僕らの後ろから聞こえ
て、今でも夢に出る。

「いたいよお、あついでよお」

「なんで、なんで」

他の兄弟たちの苦痛に塗れた声が今でも耳にこびりついている。

「セシル、コスミナ、貴方達だけでも」

僕とコスミナの代わりに家具に押し倒されて血を流して苦しみながら送り出してく
れた母の声

「いっ……やつ、いやです！」

「コスミナ！ここで……死んじやだめだ！父さんたちが助けてくれたんだから！」

「でもっ、みんな、みんな、焼かれて」

「ツ！だから！僕たちだけでも！」

泣き叫ぶコスミナを引つ張って、急いで外に出る

途中で炎にまかれて、片目と左腕に酷い火傷を負ってしまったけれど、必死に外まで出た。

あまりにも痛くてつらくて、それでも自分が助かったことに……酷く安堵してしまつた。

隣ではコスミナは座り込んで、泣きながら笑っていた。

結局、コスミナはそれがきっかけで壊れてしまった。

壊れても仕方がない、焼きながら苦しむ家族の姿と、燃え盛る生家を目の当たりにしたのだから

……僕にはコスミナを殺そうと決心することができなかつた。

コスミナが壊れてしまったのは、コスミナが悪いわけじゃない
だつたらせめて、最期の瞬間までは一緒に生きようと、そう思つたのだ。

「あの人と私で、生きようと思った」

私の半生はおよそ侮蔑と冷笑に塗れている。

私はとある刀鍛冶職人と妾の娘として生まれ、その為から本家の人間から疎んじられ続けていた。両親はすでに鬼籍に入っており、本家は父の弟が仕切っていた。

私は半分は父の血が入っているということで引き取ってもらえたが、ろくにご飯も貰えず、屋敷の下働きをさせられていた。

「まったく、○○様もなんであのような妾との間に……」

「しかも女子なんて、ただの穀潰しじゃ」

「なんていらんものを残してくれたのか……」

「しかし捨ててしまえば家名に傷が……」

そんな言葉を幼い頃から言われ続けていた。

嫌だと思う気持ちもいつしか薄れ、自分が人間だと思ふ気持ちも次第に薄れていった。

そうだ、私はこの家にある家具とか道具とか、そういうものだと思えば楽だと……だつて、人間だと思っていたら辛いままだ。

割り切つてしまえばいい、諦めてしまえばいい、ああそうだ、ワイルドハントの誰かを殺すだけの、ただそれだけの道具としてこの人生を生きよう。誰か一人を殺しただけで、何百何千の人間が救われる。

それだけで、かまわない

「お前の刀は気持ち悪い」

「なんだこの刀は、怖気が奔る」

「こんなのなまくらと一緒だ」

私の刀は、込められているものが歪だ

そう言われていた。

まるで妖刀みたいだと言われ、刀はなまくら刀と一緒に安く売られることになった。認めてくれなくてもいい

どうせ私は、お前たちに認められるために生まれ変わったわけじゃないもつと大勢の人間を救うために生まれたんだ

感謝してほしいぐらいなのに、どうせこいつらは知らないままなんだろう

いい気なものだ

そんなことを思いながら、ただひたすらに鍛冶に打ち込んだ

何本何十本何百本と刀を作り出した。でもそれは家業に必要だったから作っていた

し、それが出来なければ私は本当に捨てられてしまう。

来る日も来る日も刀を作っていた

日雇いぐらいのお金しかなかったけれども、それでもかまわない、どうせ私は人としては生きてないのだから。

そんな生活をずっと続けていた。

敷地の中にある小さな襤褸小屋でずっと鍛冶に励んでいる私に尋ね人が来た。

「失礼、この刀を打ったのは貴殿だと聞いた」

黒い髪で浪人風の男が襤褸小屋の戸口に立っていた。

どこかで見えたことがあるような気がするが、その頃の私は精神も体も疲弊していたせいか思い出すことができなかった。それが、ワイルドハントのイゾウだなんてことを、私は忘れていたのだ。

「この刀はとても良い。ぜひ貴殿に拙者のための刀を作って頂きたい」

「・・・私に、か。それなら本家の人間に頼めばいい」

「いや、貴殿が打ったこの刀は素晴らしい。貴殿の思いが込められている・・・そう、強い念だ。そんなものを感じた。だから貴殿に頼みたいのだ。この通り頼む。金なら支払う」

そう答えて男は麻でできた少し小ぶりの袋を出してきた。中には少しくすんだお金

が山ほど入っていた。

「貴殿は素晴らしい鍛冶屋だ。拙者が求めていた刀を作れるのは貴殿しかいない」

賞賛の言葉や自分の存在を肯定される感情なんて、私には縁遠いものであり、きつと永遠に手に入ることはないと思っていた。けれど目の前の男は自信を持って私のことを肯定してくれている。

生まれてきてから、そんなの初めてだった。

「・・・作る」

「本当か!？」

「金はいらない」

「いや、それはダメだ。貴殿が受け取るべき報酬だろう。いや、これは前金だな。刀が出来たらもつと支払う」

「・・・いい。私が、作りたくなった。初めてなんだ、私の刀が求められたのは」

「受け取ってくれ。頼む」

「・・・仕方ねえな。あと、畏まった言い方はやめてくれ。性に合わない。アオイでいい」

「・・・アオイ殿、どうかよろしく頼む」

それから1か月半かけてずっと刀を作り続けた。

今までの人生の中で最高の刀を作ろうと必死になって、それこそ命を削るぐらいに作

り上げようとした。

男は私に付き合おうと言って自らも襤褸小屋で寝泊まりしていた。

昼夜問わず必死に刀を作り続ける私に付き合った。

そうしてできたのが、二振の刀だった。

銘は打っていないかったが、自分ができる最高の刀ができたはずだ。

「これは素晴らしい……！この色艶、妖しいまでの刀の輝き……ああ、本当に素晴らしい」

「……そりゃあ良かった。二本とも持つていくか？」

「いや、こちらの刀が良い……ああ、美しい……銘は？」

「そーいや付けてねえな。好きに付けてくれ」

「……そうだな……刃の煌めきがまるで雪のようだ……ああ、そうだ、江雪、江雪はどうだろうか」

江雪

その銘を聞いた瞬間、目の前の男がやっとイゾウだと思い出した。

……もう一振りの刀は私が持っている。今ここで刺し殺せば……

そうだ、私はそのために

今まで……

今までの苦勞が……

「感謝する、アオイ殿」

本当に嬉しそうに私に声をかけてくるイゾウを見て、躊躇した。

「え、あ……」

「貴殿のような刀工に巡り会えてよかった」

笑った顔を、初めて見た

……本当に、殺しても、いいのだろうか

本当にそれでいいのか？

自分をやつと認めてくれた相手を殺して、それで今後殺される人々を救ったと満足できのだろうか？ 殺される人々は、自分たちが殺されることを知らずに、私がやったことすら知らずにのうのうと生きていくのだ。

……本家の人間のように、私のことなんて何も認めずに、ただただ道具のようにそう考えると、途端に嫌な気持ちかわいてきた

……馬鹿なことだな。確かに知りもしない大勢の人間を救うのは良いことだ。けれど、それが自分にとって何のためになるんだ？

人助けをしまったっていう自己満足じゃないか

……そんな自己満足に浸るなら、もつと、もつと人間らしく生きたい

「・・・なあ、あんた」

「なんでごぎるか？」

「：：刀の手入れもあるだろう。刃こぼれしても困る。責任持って、私も一緒に付き合ってもいいか？」

「それはいいでござるが・・・」

「・・・その刀で人を斬るんだろう？」

「！」

「かまわねえさ。刀なんて人を斬るものだ・・・私は、ここにおいても無駄な人生を送るだけなんだ」

一緒に落ちてもかまわない、だから私と一緒に生きてくれないか

「俺はこの手を離さない」

昔から双子というものに憧れていた。自分とほとんど一緒の人間が傍で共に生きていくというのが、運命的に感じていたのだろう。よくありがちな自分を特別視してしまいう思春期の病気みたいなものだ。

それでも同じ血肉を分けた、もしかしたら魂すら分けた存在だと思つくと、なんだかとても特別なものに思えた。

しかし、転生してからはそんな幻想は捨て去つた。いや、幻想を捨てなければいけなくなつた。

俺が生まれた先は……オネスト大臣の息子、しかもシユラの双子の兄としてだつた。母親の記憶なんて覚えてない。というか、俺が前世のことを思い出したのは母親がいなくなつてからだつたはずだ。確か……そう、4歳ぐらいだろうか。

あのシユラと同じ顔で同じ髪色で同じ肌の色、それがとても気持ち悪く感じた。何度も何度も肌をこすって炎症を起こしてしまつたり、顔を隠そうとマスクや布を使ったり……5歳の頃ぐらいから髪の色を無理やり真っ黒に染めるようになった。

少しでもシユラの外見から離れたかつたし、オネスト大臣と同じ髪色というのもしこ

い嫌だった。

オネスト大臣はもちろん嫌いだだったが、あいつはあまり俺やシユラに関わってこない。だから俺も関わってこない分にはどうでもよかった。

・・・ただ、問題はシユラにあった

「なあなあ、何してるんだ？」

「・・・」

「兄ちゃん、何してんだよ」

「・・・」

「一緒に遊ぼうぜ」

「嫌だ」

「いいだろ、なんでいつつも一人でいるんだよ。楽しくないだろ」

「うるさい、こつちに近づくな」

「たまにはいいだろー」

「黙れかませ犬」

「かま・・・？」

俺はなんとか今の身体でオネスト大臣とシユラを殺そうと計画を練っているというのに、シユラがいつも俺に付きまとう。何度も何度も一緒に遊ぼうと誘ってきて・・・う

ざったい。

大体俺と遊ばなくても、悪戯したりとか給仕たちにわがまま言ってるくせに。

「他の奴と遊べ」

「・・・」

俺がこう言うど決まって、どこかに行つてしまふ。

まあ、俺は処刑方法や殺しに関する書籍を読みながら適当に相手をしているので、シユラの顔はろくに見ていない。と、言つても、どうせいつもみたいにむかつく顔だ。

・・・まあ、俺も同じ顔だけど。

だからどうせ同じ顔なんだから見飽きてるし、シユラのことなんてどうでもいい。

そうやって勉強に励んでいると、たまにオネスト大臣が話しかけてきた。

「おやおや、リンネ・・・また勉強ですか？偉いですね」

「・・・別に」

「シユラもあなたのように大人らしく振舞つたらいいのですがねえ」

「・・・別に。どうでもいい」

適当に流しながら、どうやって殺せるかを考える。

この年齢でもできるものは毒殺だろうが、寝ている部屋に潜り込めたら刺殺もいけるだろう。

確実に息の根を止めることができる計画を立てなければならぬ

そのうち、宮殿にある帝具保管室の場所を知った。

大臣の息子という立場なら見学ぐらいできるかもしれないが、怪しまれてはいけない。今はどんな帝具があるのだろうか。原作よりもかなり前にあるのだから、それなりに数はあるはずだ。

ブラックマリナーあたりがあれば暗殺もぐつとしやすいだろう。

人気がない時間帯も確認し、帝具保管室の鍵も複製した。石膏ではあるが1度か2度なら使えるだろう。

その間もシユラがかまえかまえとうるさかったが適当に追い払った。

まったく、本当にしつこい奴だ。どうせ殺すわけだからかまわないが。

そして俺は準備を整えて帝具保管室へと向かった。

石膏の複製鍵を使って部屋の中に入り込んだ。ゆっくりとドアを閉めて、部屋の中を見渡す。

少し背が低いのが難点だが、なんとか部屋にあるものを確認した。

デモンズエクス、スクリーム、ブラックマリナー、ベルヴァーク、バルザック、ヘカトンケイル、パーフェクター、シャンバラ、八房、村雨、パンプキン・・・見たことの無

い帝具までこの帝具保管室に置かれていた。

「俺でも使えるのはブラックマリリンぐらいか？パーフェクターでもいいかもしれないな。シユラを殺した後ならシャンバラをメインに使ってもいいかもしれないけど……」

「……何してるんだ？」

不意に背後から聞こえた声に驚いて体勢を崩してしまう。掌などがじんじんと痛み始めるが、血は出ていないようだ。

声の主は……分かり切っていた。

いつも聞いている嫌な奴の声だから

「なんだよ、こんな面白そうなことになんで誘ってくれなかったんだよ」

「……シユラ」

「兄ちゃん、すつごいよなー。ここの部屋つてずっと鍵掛かってたのに開けちまうんだもん」

笑いかけてくるこいつが、ほんとうにうざったくて

お前みたいない悪人なんて、早く死ねばいいのに

そんなことを思いながらすぐに立ち上がって他の帝具を吟味する。シユラが邪魔で

仕方ない。いくらかませ犬で馬鹿な奴とはいえ、オネスト大臣に情報を漏らされては困る。

「帰れ」

「いいじゃん、俺も一緒に見てもいいだろ？」

「遊びたいなら他の奴と遊べ」

いつものようにその言葉を俺はシユラに言った。

だがシユラはその場から立ち去る気配が無い。背後にはまだシユラがいる気配がしているのだ。

・・・聞き分けのねエクソガキだな

「他の奴と遊べよ」

「・・・」

「出ていけ、俺に話しかけるな」

「・・・」

「出て行けって言ってるだろ」

「・・・な、なんだよ・・・」

声色が震えていることに気が付いて、振り向くとシユラの奴が目に涙を溜めていた。

「ッ!?!」

「い、いつつも……そんな……他に遊べる奴なんて、ここに、いるわけねーだろ……」
「な、なんだよ……泣いたら遊ぶとか思ってたんのか……」

「つ……なんだよ！兄ちゃんのはか！なんで一緒に遊んでくれないんだよ！」

泣きながら怒って後ずさるシユラ、シユラの後ろには……ヘカトンケイルが保管されている容器が小さなテーブルに置かれてあった。

俺が言葉を掛ける前にシユラが後ろのテーブルにあたり、ぐらり、とテーブルが揺れる。

「えっ？」

そのまま容器が、床に落ちる

勢いよく容器のガラスが割れて、なんだかよく分からない液体が床を濡らした

「わっ……」

「……ッ！おい！何したんだこの馬鹿！」

「な、お、おれは……だ、だって」

シユラのせいで容器が割れて、部屋に忍び込んだ証拠が残ってしまったと焦っている俺の耳に「きゅう」という鳴き声が聞こえた。

「えっ」

「あ……」

容器の中にいたヘカトンケイルが、動き出していった。

そして俺は原作でのセリユウが言っていた台詞とシーンを思い出した。

“上層部ではだれも使えなくてヒラの私たちも調べられて”

そのシーンの時に確か、死体が入っているであろう袋があった

あれは・・・ヘカトンケイルの適正者になりそこねた人間の死体なんじゃないか、そんな一説を思い出した。

いや、どうやらそれは、正解だったようだ

襲われてからのことを、俺は良く覚えていない

いや、思い出すのを頭が拒否しているんだろう。化け物に襲われることなんて初めてだったのだ。

ヘカトンケイルが帝具保管室で暴れまわり、兵士も何人か死んだと後から聞いた。

俺は軽傷で済んだみたいが、シユラは顔に傷を負い、頭も打つたらしい

隣のベッドで未だに意識が戻っていないシユラの姿が見えた。

・・・そして俺のベッドの傍にはブドー將軍がいた。どうやらブドー將軍がヘカトンケイルを止めたらしい。さすがは次期大將軍と名高い武人だ。（実際に大將軍になるけ

れども)

「……どうしてこうなったのかは今は聞かない。シユラが起きてから事情は聞こう」

「……」

ブドー將軍にそう言われても、俺はただどうやってシユラにこの責任をなすりつけるか考えていた。

大体あいつがこなければこんなことにはならなかった。このまま死んでくれたらそれが一番良いのに

そうすれば殺す手間も省けるし、証拠隠滅もできる。あいつが悪戯したってことにすればいい

「しかしお前たちが一緒にいたとはな」

「……」

「あまり、一緒に遊んでないのだろう？」

「………勉強してますから」

気まずい空気の中、なんとかブドー將軍にそう返した。

「たまには一緒に遊んだらどうだ。そうすればシユラの悪戯も減る」

「つ、な、なんで俺がつ！……あ……す、すみません……」

「……最初はあいつも悪戯なんてしていなかったんだぞ」

「は？」

神妙な顔をしたブドーがじっと俺を見てくる。なんだろう、とても居心地が悪いというか、モヤモヤしてくる。

「最初は給仕や兵士たちに遊んでほしいと言っていた。私にもな。兄が遊んでくれないから、と。ただ、我々も仕事がある。そのうち悪戯をするようになったのだが、その時もあいつ一人だ。決まっていたも『遊ぶ相手がいなくてつまらない、退屈だ』とな」

「……」

「その年齢で勉強に励むのは良いことだが、共に遊ぶことも子供の仕事だろう」

「……俺のせいじゃ、ないです」

「……お前のせいだとは言っていない」

「俺は、俺は悪くない！だって俺は大事なことを……」

この帝国をオネスト大臣やワイルドハンドの魔の手から救うために頑張っているに

「おやおや、どうしましたか？」

医務室の扉から、オネスト大臣がやってきた。いつものように肉を食べている。

「オネスト……遅かったな」

「ああ、食事に忙しかったのですよ。それで？シユラが怪我をしたと聞きましたが……ああ、これはこれは。死にそうですね」

あつけらかんというオネスト大臣にブドー將軍から威圧を感じた。

怒っているのだろうか。いや、普通は怒るのだろうか……子供をないがしろにしているのだから

「……顔の傷は残るそうだ。頭を強く打ったらしいからまだ意識が戻ってない」

「へえ、そうですか」

ブドーの言葉に適当に返事をして、肉を一齧りして咀嚼するオネスト。

俺のほうへと視線を向けて「ああ、無事でよかったですよ」とにこりと笑っていた。

「大事な息子が軽いけがで済んでよかったです」

その言葉に、何か違和感を覚えた。

「……シユラは、大怪我してるけど」

俺がそう言うのと、オネスト大臣は俺に向かって口角をあげて笑みを浮かべてこう答えた。

「はて、誰のことですか？」

その言葉に、俺は絶句する。ブドー將軍も珍しく眉をあげて驚いていた。

「こんなことぐらいで大怪我を負うような人間は、私の息子ではありませんね」

「……オネスト」

怒気を孕んだ声でブドー将軍がオネストの名前を呼んだ。

「おやおや？なんですかねえ。そんなに怒って」

「……親としては最低だな」

「なんですかいきなり。失礼な方ですね。私はただこの程度で死にける子は息子として認めないだけです」

俺も大概、前の世界で「毒親」と呼ばれるような親がいることは知識として知っていたし、何よりオネスト大臣がこういう「最低な人間」だと分かっていたはずだ。

分かっていたけれど、目の前でされると何故か頭がぐるぐるとし始める。

シユラはどうせ、オネスト大臣の捨て駒なんだから、いいじゃないか。好きに言わせておけばいい

そう考えても、俺の中で葉に表せない何かがおネスト大臣への怒りへと変わっていき

怒ることはないのに、どうせシユラは……捨て駒で、このまま捨てられて死んだほうがいい……

「おれ、は、だいじょうぶ、だから」

ふと、弱弱しい声が聞こえた。

包帯が巻かれているため目が開いているかどうか分からないが、シユラが起きたらしい。

震えながら手が何かを探しているようだ。

「これぐらい、だいじょうぶ」

オネスト大臣のコートの袖を弱弱しくシユラが掴む。

「だから、すてないで」

「・・・シユラ」

オネスト大臣がシユラへと視線を向ける。

「そんなことぐらいで甘えようとするとは、つくづく情けないですね」

コートの袖を掴んでいたシユラの手を手荒く払って、蔑んだ言葉をオネストがシユラに吐いた。

俺の中で何かがふつりと切れる

「ふざけんじゃねええ！てめえの血を分けた息子だろうが!!父親が息子捨てようとしてんじゃねえよ!!何が情けないだ!!ガキが親に甘えるのは当たり前だ!!!」

腹の底から声を出して、息があがってしまった。

オネスト大臣とブドー將軍の視線が俺に集まっているのが分かる。けれどそれにかまわず俺はベッドの上で立ち上がってオネストの胸倉を小さな手でひつつかんでやった。

「俺は、お前のことが、殺したいほど嫌いなんだよ。いつか絶対殺してやる」
それだけ言つて、ベッドの上にへたり込んだ。

弱っている体で大声を出したせい、息が上がってかなり辛い

オネスト大臣はそのまま何も言わずに医務室から出て行ってしまった。

ブドー將軍は何も言わずにそのままベッドの傍にいるようだ。

「……宮殿で殺しはするなよ」

ただ、それだけ言つて医務室から出て行ってしまった。

残された俺は息を整えながらシユラのほうを見る。

あいつが今も意識があるか分からないが、特に何も言つてこない

「……………ごめん」

何に対して謝っているか、自分ですら分からなかった。

一緒に遊ばなかったことなのか、それとも殺そうとしたことなのか

ただ単にうるさくしてしまったからなのか

そのままシユラは返事もせずに反対側を向いてしまった。

「……………親父は、あの男は、ああいう人間だ」

「……………」

「俺はあいつを尊敬してない、殺したいぐらい、嫌いなんだ」

「……………」

「……………だから、俺は強くなる。あいつを見返して、俺が殺す」

「……………」

その日はそのまま眠ってしまったのだが、後日、2人でブドー将軍にこっぴどく叱られて拳骨をくらった。

「あのカミナリオヤジ……………」

「……………」

「……………兄ちゃん、遊びに行かねえ?」

性懲りもなくそんなことを聞いて、俺の服の袖をシユラが掴んできた。

真新しく残る傷跡を見ると、あの医務室でのことを思い出した。

「……………つまんねー遊びなら、勉強に戻るからな」

その手を振り払うことなく、掴み直してやる

目の前の馬鹿は嬉しそうにながら俺に何で遊ぶか話しかけてくる。
まったく、本当に単純だな・・・俺の弟は。

ワイルドハント設立編

★転生組キャラ紹介

名前：リンネ

前世名：???

ポジション：シユラの双子の兄

推しキャラ：マイン

指針：オネスト大臣の抹殺（確定）、シユラも状況などを見て暗殺（予定）

帝具：帝具「時間逆行メフィストフェレス」

懐中時計型帝具。所有者及び所有者の指定した物質や生物の時間を巻き戻す能力。

奥の手は???

備考欄：ワイルドハントを死ぬほど嫌っている。シユラへの対応は緩和したものの、やはりまだ嫌いなまま。外見はシユラそっくりなので髪を黒く染めている。公平性が自分にはあると思っているものの、結構自分勝手な性格で負けず嫌い。シユラに似てるのだが本人に指摘しても絶対に認めない。

「どいつもこいつも殺してないみたいだな」

「あいつもオネストも嫌いに決まってるだろ。俺は今でも、オネストだけじゃなくてシユラも殺す気だ。」

「本当に馬鹿だよな、俺のことを信用しきってさあ……俺は殺そうと、今でも思っているのに」

名前：コハル

前世名：遠藤小春

ポジション：エンシンの妹

推しキャラ：ウェイブ、ラン

指針：できるならば生かしたい。原作キャラに不利益がある前にどうかして止めた
い

帝具：帝具「狂戦乙女ヴァルキリア」

槍型の帝具。精神エネルギーを槍に纏わせることが可能（※攻撃力や耐久力をアップする効果がある）。

奥の手は???

備考欄：自称毒舌キャラ。好き嫌いがはっきりとしており、人の好きなものも目の前で普通に「えく私それ嫌い。なんでそんなの好きなの?」とか言っちゃうタイプ。転

生してから紆余曲折あってその性格は緩和されている。なお、食べ物の好き嫌いも多かったが、貧しい生活でそんなことも言っただけで克服したという裏設定有り。実はツンデレ。

「はあ？まじ意味わかんない。あんたたちだつて殺してないじゃんか！」

「あんな馬鹿兄貴、普通の暮らししてたら殺してたもん。私は悪くないし、勝手なこと言わないですよ」

「・・・まあ、何も悪さしてないなら殺さなくてもいいんじゃないの？」

名前：セシル

前世名：藤岡隆之介

ポジション：コスミナ弟

推しキャラ：チエルシー

指針：コスミナと共に生死を共にしたい。出来るならば和睦の方向性

帝具：帝具「天空響鳴スカイハイ」

エレキギター型帝具。催眠効果のある音を出せ、音の聞こえる生物なら支配下におくことが可能。ただし距離が離れている分催眠効果が薄いため注意が必要。音が聞こえない状態の相手などには効果が無い。

奥の手は???

備考欄：大人しい性格で協調性はメンバーの中で一番高い。ワイルドハントに対しては嫌いというよりも苦手・怖いという認識が強い。「なんでこんなひどいことをするんだろうか・・・」という意味合い。左目と左腕に酷い火傷を負っているので普段は包帯などで処置している。コスミナ専用ストッパーでもあり、セシルが止めればむやみやたらに男性に性交渉を持ちかけるのは（多少ではあるが）控えてくれる。

「あのさ・・・なるべくなら、みんなで仲良くできたらいいなって」

「僕はその・・・今の姉さんが、コスミナが幸せになつてくれればって思うから」
「最初に約束したのにごめんね。でも、すぐに行動に移すのは反対だな」

名前：オリヴァー

前世名：松村瞬

ポジション：ドロテアの研究助手

推しキャラ：ナジエンダ

指針：ワイルドハントのメンバーのことをもつと知って、和睦したい

帝具：帝具「喰狼変化フェンリル」

狼の姿になることができる首輪型帝具。奥の手は???

備考欄：生前はいわゆる正義厨で現実でもネットでも自分が正しいと思うことをどんな発言して過激な行動をしていた。無論、実生活では疎まれてしまい酷い虐めにあつたものの、やはり自分が正しくて周りが間違っていると開き直っていた。転生後、あまりに酷い奴隷生活により別人のように性格が変わってしまった。今ではドロテアの良き助手として生活しており、「相手のことを良く知って、ちゃんと話して分かりあう」とを知る。

「あー・・・そのことだけど、その、俺はやっぱり、殺したくない」

「俺達、ちゃんとあいつらと話せてないだろ。転生前はたださ、キャラクターと読者だったけど、今はちゃんと正面で話せる存在だからさ」

「・・・昔のことは覚えてるけど、今でもあんまり実感無くてさ。今の自分とは別人なんだって、最近は思ってる」

名前：アオイ

前世名：原蒼衣

ポジション：イゾウの同行者、刀工

推しキャラ：ラバツク

指針：始末するかは保留の方向。できるならイゾウは殺したくない

武器：「焔春（えんしゅん）」

江雪の姉妹刀。帝具ではないものの、江雪と同等の切れ味を誇る刀

備考欄：物静かであり喜怒哀楽を顔に出さない。だが周囲に機械的な人間だと見られたくないか思っているし、もともと自分を理解してほしいと思っっている・・・要するに承認欲求が人より強い。だからすぐにでも自分のことを認めてほしいと思っっているが、人のことを認めるのに彼女はとも時間を掛けるタイプ。ただし自分のことをすぐに認めてくれてちやほやしてくれる相手にはコロつと騙される。ちよろい女の子。

「・・・まだ保留でいいんじゃないか、殺すのは。少なくともイゾウについては」「状況を見て、革命軍やナイトレイドに流れることもできるだろう？」

「・・・私は、イゾウについては信用できると思うぞ」

名前：エリオット

前世名：荒井悠矢

ポジション：チャンプの弟

推しキャラ：アカメ、クロメ

指針：自分の保身のためにチャンプは出来るだけ生かしたい、保護先が見つければ始末したい

帝具：帝具「百風千嵐 芭蕉扇」

風を操ることができる扇型帝具。

奥の手は???

備考欄：虚勢を張りがちで内心人を馬鹿にしている（そうして自尊心をなんとか保っている）。意外と小心者でびびりなどところがある。虐待のせいかわいから外見が成長していないものの、実年齢はチャンプより少し下。つまりは合法シヨタ。チャンプの悪事を一応止めてはいるが、一人で生きていく自信も無いので強くは止められない。所詮は他人の命よりも自分のことが大事だと思つて自己嫌悪しつつも、早く依存できる先を探している。ワイルドハントに合流したので、タイミングを見てイエーガーズなどと交流を持つて依存先を作る予定

「お、俺はなんか、10歳の頃から成長してないし、だからチャンプがいなかったらやばかったから生かしてて」

「・・・当たり前だろ。チャンプの奴は、チャンスを見て殺すつもりだ」

「なんだよお前ら、ひよりやがつてさあ。ま、そのうち俺が一番先にあいつを殺すかもな」

「生き残ることに忙しい」

帝国にも奴隷や人身売買が普通に行われている。普通に、というのはもちろん裏社会の間で行われているということだけでも。

それ以外にも帝都では悪事が横行している。

ワイルドハントはまずそれを摘発する・・・と、リンネが宣言した。

もちろんシユラやエンシンたちが反論したものの、リンネはそれに対して失笑した。

「悪人であれば好きに扱え。まずは市民の信頼をイーガーズよりも得るのが優先だ」

リンネの考えてることはよく分からない。まずは好き勝手させて油断したら殺せばいいのに・・・

俺もそう思っているし、他の転生組の奴らもリンネのほうを見ていた。

本当はもつと相談できたなら良かったが、いかんせんワイルドハントの連中が悪事を働かないか監視もしなければならぬ。

・・・もう少し信用を得れば、転生組だけで今後の方針についてもつと作戦を練れると思うけれど・・・

「でもよ兄貴、ナイトレイドを誘き出すなら帝都で……」

「シユラ、お前は詰めが甘い」

「なっ、なんだよ！」

「帝都の市民を玩具代わりに遊びたいだけだろう」

「……でも、ナイトレイドは市民から依頼されて暗殺しようとするんだろ？じゃあ、そうやって誘き出したほうが確実じゃねえか！」

シユラの言う通りにはあまりしたくないが、その分隙が生まれる。

殺すには絶好の機会だしな

はやくチャンプを殺して、安全に暮らしたいんだよ俺は！

「ナイトレイドはどういう集団か、わかってるのか」

「だから暗殺……」

「そう、暗殺集団。つまりは奇襲が得意ということだ。お前が自分の実力や仲間の実力にとりだけ自信をもってようが、その隙を突いて殺すことに長けている相手だぞ。相手の得意分野に持ち込んでどうするんだ」

「つ……でも、イゾウの奴だつて一人で巻き返せるぐらいに強いんだぜ！他の奴らだつて……」

「そうやって慢心してるからいつまでも二流なんだよクソが。模擬戦で一度でも俺に

勝ったか？」

「・・・それは」

「実力はお前のほうが上なのは俺も認めてる。だが、すぐに慢心して油断する悪癖で俺がいつも逆転勝ちしてるだろう。実力があっても油断をしないのが一流だ。いい加減それぐらいやってみる」かませ犬」

「・・・」

意外な事実を聞いたというか・・・戦闘面もリンネが鍛えていたとは

俺は帝具しかないし、子供の体力や筋力しかないからな・・・チャンプがいなければ死んでたかもしれない。でも、もう帝都にいる。イエーガーズあたりの誰かに助けてもらえれば・・・

「チツ・・・でもよお、摘発した奴なら何してもいいんだよな？」

「エンシン、お前も気を付けておけ」

「ああん？なんだよ」

「どうせイイ女を強姦したいかと思ってるんだろう？その隙を狙ってナイトレイドに暗殺されるかもしれないな」

「ハッ！そんなときや俺がナイトレイドを始末してやるよ」

「もう！この馬鹿兄貴！リンネの言う通りなんだからちゃんと聞いておきなさいよ馬鹿

「！」

「馬鹿扱いすんじゃねえよ貧乳！」

「なによお!!このくそオカツパ頭！」

「なんだかんだでほだされたバカ女・・・コハルはエンシンと痴話げんかを始めた。

ほんとに甘いよな・・・チツ、これだから女は信用ならないんだよ。あの感じだとエンシンともやってそうだよな

「・・・適当に会議も終わったのを見計らって、俺はイエーガーズの本部へと足を運んだ。エスデスが嫌がらないようにお菓子や食べ物にしておいた。

あの人は賄賂の類に反応するだろうから、できれば自然体で・・・

「あの、こんにちは、ワイルドハントのエリオットです。その・・・お互いにナイトレイド討伐や帝都の警備を担う存在として仲良くして・・・欲しくて・・・だから、その、よろしく願っています」

「ありがとうございます！お互いに警察として帝都の悪を殲滅しましょう！」

「嬉しいなあ。挨拶にきてくれるなんて・・・」

「お菓子・・・美味しそう」

「おお、じゃあ今日のお茶菓子にするか？」

「あらあら、まあ、シユラとは仲良くしているから……ワイルドハントとも協力できるならそれに越したことはないわね」

「……」

「ワイルドハントか……まあ、いいだろう」

俺がそういうと、セリユーとボルスの二人は簡単に信じてくれた。ウェイブやクロメの反応も上々である。

エスデスは疑念の目があるものの、いまのところは大丈夫だろう

スタイリツシュについてはシユラと親交があるおかげか俺にも不審な目は向けていない。

……ランについては、よく分からない

「あ、あの……ランさん、でしたよね。よろしくお願いします」

「……ええ、よろしくお願いします」

「……」

「……」

ああ、そういうえばランはチャンプに恨みがあるんだった。

どうせならランの手助けをして、俺のことは見てもらおう。ああ、そうだ！それがいい！きつとそれならランだって俺がいかに苦勞してきたかわかってくれるはずだ！

「エリオットさん」

「はい？なんですか？」

「私もワイルドハントの方々とは仲良くしたいんですよ。手伝ってくれますか？」

「ええ、僕もその、ランさんとは仲良くしたいので・・・よろしく願います」

「これから幸先がよさそうだ」

「俺の妹は色気ゼロ」

帝都、宮殿内鍛練場にて

俺とシユラは息を荒くして、倒れ込んだ。

俺たちの目の前には涼しい顔でリンネが服を整えている。

……ワイルドハント内で鍛練をやるつつつてんで、ただの体を動かす程度だと思つてたら、騙されたぜ……

リンネの野郎、全力で俺とシユラを倒しにきやがった。

最初は二人掛かりで優勢だったが、猫だましに足掛けに……ようは搦め手ばつか使ってきたのだ。

シユラは実力で強いが、こいつは策謀……違うな、勝つための拘りが強い。

なんでもしてくるあたり、もしも実践なら卑怯な手もいくらでも使いそうだ。

「対ナイトレイドを想定したら、搦め手ぐらい当たり前だ」

「くそがつ……！本気でやるんじゃねえよ！」

「エンシン、お前もシユラと似て慢心しがちな。隙もあるから奇襲されたら死ぬぞ」

「……また兄貴に勝てなかった。」

「負けてたまるか、かませ犬」

リンネの奴はそんな風にシユラへ言い捨ててから、ドロテアたちに俺たちの手当てを任せてその場から立ち去った。

手当された後、すぐにコハルとイゾウ、アオイの4人で帝都の見回りに行くことになった。見回りなんざ面倒だが、悪事を働いてる人間なら誰でも〝好きなようにしてもいい〟らしいからな。

「ほんと、兄貴ったら馬鹿じゃないの？リンネに勝てるわけなのにシユラと二人がかりで挑んで負けるとかかっこわるーい」

にやにやと笑いながらコハルが俺の顔を覗いてくる。

ここぞとばかりにマウントとってくるあたり、本当に可愛いげのない妹だ。

「うるせえな貧乳。」

「貧乳言うな！べつ、別に貧乳じゃないし！これから成長するのよ！」

「じゃあまな板か洗濯板だな。良くて壁だ、壁。壁胸だ壁胸。」

「なによこのオカツパヘア！女好き！ファツションセンス最悪のくせに！」

「うるせえな、動きやすさ重視なんだよ。お前こそなんだよ、スカート短すぎだろ。色気

のねえパンツ見せられる側にもなれよ。はつきり言つて萎えるわ」

「サイテー!!まじ最低なんですけど!!」

「何が最低なんだよ、お前の下着色気なさすぎ・・・あ、違うな。お前のほうが色気ないわ。お前の下着のほうがまだマシだな」

「おい!人のこと下着以下下着以下言いたいのか!!このクソ兄貴!表出る!」

「バーカ!もう表だろ!」

「・・・エンシン殿とコハル殿は仲が良いのだな」

「そうだな。だが少し静かにしないと、周りの人間が引いている」

そんなやりとりをしていると、ふと視界にとある店に目が留まった。ガラス越しに見えた店内の様子がおかしい。

「・・・おいクソ妹、あの店おかしくないか?」

「はあ?・・・なんか男がいっぱいいるわね」

「何かにおうな・・・イゾウ」

「承知した」

イゾウは前に進み出て、店の扉を江雪で叩き斬る。斬られた扉が音を立てて落ち、中の様子が分かるようになった。

複数の護衛に貴族風の男が数人、見目の良い男が一人

そして、羽交い絞めにされた少女が、3人

そのうち一人は片足が変な方向に折られており、もう一人は片目が潰れていた。

そして最後の一人はほとんど裸の状態で今まさに猛犬に襲われかかっていた。

・・・大方、貴族の男たちが女捕まえて好き勝手してたつてことか。そういうのは俺もやつてるからかまわねえな。

とはいえ、殺しができる絶好のチャンスだ。

「な、なんだ貴様らー！」

貴族風の男の一人が声を荒げる。護衛の男たちもこちらに対して敵意をむき出しにしているようだ。

「我々は秘密警察ワイルドハント、この現場を取り押さえる。・・・イゾウ、その出入り口は任せた。私は裏に回る」

「任せた。さあ、江雪・・・食事の時間だ」

「それじゃあ暴れてやるか。おいコハル、そっちの女ども確保しとけよ」

「はいはい」

コハルがそのまま女たちのところに向かうと、さつそく護衛の男たちが襲ってきた。

つつつても、コハルの奴も帝具使いだ。

狂戦乙女ヴァルキリア、それがあいつの持っている帝具だ。

ヴァルキリアでコハルが男たちを薙ぎ払うと同時に俺もシヤムシールを構えて斬撃を放った。

あくまでもヴァルキリアは槍型の帝具、精神エネルギーを纏わせて薙ぎ払いのできるが本来は突くための帝具・・・狭い屋内では向いていない。

だからこそ俺の帝具でとどめを刺すつてのが、大体のスタイルだ。

さすがにやばい空気に気が付いたのか、貴族風の奴らや護衛の何人かは出入り口や入口へと逃げていく。

・・・あーあ、ほら、イゾウの奴に斬られちゃった。くそつまんねえな。

ほとんど倒れて虫の息か、死んだか・・・店内が静かになったところにアオイが裏口から中に入ってきた。どうやら斬り終わった死体や、まだ生きてるやつらを店内に入れ直したらしい。

「おー、お疲れ」

「主犯格は生かしてますので好きにどうぞ」

「そりやどうも」

適当に返事をして貴族風の男たちを蹴り上げた。きつたねえうめき声が聞こえたが、遊ぶのにはちょうど良い。

「江雪も喜んでいるようだ．．．食事を終えて益々輝いているな」

イズウはイズウで刀を愛でている。

とうのコハルは女どもの手当をしてるようだが、足折れてるやつと片目潰されたやつだけ怪我をしているようだ。

ひんむかれてた女のほうは、コハルが着ていた上着を着ているらしい。まあ、ほとんど裸だから仕方ないか

「兄貴、この二人は手当が必要だからアオイと二人で詰所に連れていくね」

「シユラ様たちも呼んでまいります」

「おー、そうか」

「．．．こつちの子、まだ怖がつてるみたいだし、あたしの服を持ってくる」

「．．．」

「なによ」

ひんむかれてる女とコハルを見比べる。

主に胸を。

「サイズ合わないだろ、お前の貧乳スタイルに合わせたら服ぱっつぱっつじゃねえか」

「ほんとサイテーー!!!まじ死ねよクソセクハラ兄貴!!」

「どう見てもお前より胸あるじゃねえか。お前みたいな揉みがない壁胸と違って

な」

「あんたほんと殺されたいわけ?! っていうかこの子さつき襲われそうになってたのによくも目の前でそんな台詞言えるのね!!」

「ああん? 知らねえよ。つつーか行くならさつきと行けよ」

適当にそう答えて俺はひんむかれてた女のほうに近づいた。

さつき切り伏せた犬の上に座るか・・・隣に座るぐらいならいいだろう。あわよくばこのままやりたいところだ。

「・・・兄貴、私たちが手を出していいのは、悪人だけよ」

「ああ?」

「その子に手えだしちやだめだからね」

「・・・」

「・・・だめだから」

「・・・はいよ」

そう答えると、コハルは何度かこつちを振り向きながらアオイと共に残りの女連れて外へと向かった。

イズウはイズウで入口前にいるから生き残ってるやつらも逃げられないだろう

・・・もつとも、足や腕を斬られて失血死しそうな奴らばかりだけどな

「・・・あ、あの」

女がこちらに声をかけてくる。

「なんだよ」

「・・・ありがとう、ごさいました」

「・・・」

未だに震えた声で、感謝された。

・・・感謝されるようなことしたか？ああ、でもこいつらから助けたか。

「礼なら体で払ってもらってもいいぜ？」

「・・・」

女は何も答えなかったが、俺の腕にしがみついた。

お、これはワンチャンあるか？

「・・・すみま、せん・・・まだ、こわくて・・・少し、このままでいいですか」

チツ・・・

あー、このままヤリてえよな。つってもコハルが戻ってきたらうるせえし、とりあえずこのままにしないで、適当に持ち帰れるか・・・？

・・・どうにかしてコハルを撒かないと無理だな。あいつは口うるせえ。

そう考えてると、気が付いたときには隣の女が泣き始めていた。

自分が助かった安心感で緊張も解けたらしい。

あー、畜生ほんとやりたくないな。だがコハルが……いやまてよ。速攻終わらせればいけるんじゃないか？よし、いけるな。やるか。

「そんなに怖かったか？」

「だ、だって……」

「じゃあ俺が安心させてやるよ」

腕にしがみついている女を離して、改めて両肩を掴んで押し倒した。

「えっ、あ……」

よっしやいける。

「……何してるの」

コハルの声が聞こえた。

入口にシユラたちを連れてコハルが仁王立ちで立っていた。

「女の子泣かせて抱くのが、そんなに好きなのかしら？」

「……泣かせたのは違う」

「それ以外は？」

「・・・」

俺が答えないと、そのままコハルがヴアルキリアを構えた。

「兄貴、殺す」

これだから俺の妹は可愛げもないし胸も無いんだ、畜生!!

(そのまま病室送りにされたのは言うまでもない)

「あの人以上は殺してもいい」

「機会があれば殺せばいいだろ。お前らが絆されたんだよ」

「乱闘になった際に殺すのが一番楽だな。できれば暗殺も好ましいが、いかんせん宮殿の化学班や医療班が目を光らせている」

「絆されるも何も、ちゃんと関わったら良いところもあるんだから仕方ないだろ。悪い部分だけしかないってわけじゃないんだ。」

「僕もできれば和解したいな・・・今だってイエーガーズの人たちともそれなりに協力できてるし。犯罪者には取り調べしてるけど、イエーガーズだってセリユーさんみたいな人はいて・・・」

「あたしは保留。エンシンたちは悪人だけど・・・やたらめったら殺すのはやつぱ駄目よ！べ、別にエンシンに気があるとかじゃなくて、あいつらもそれなりに矯正したらいいってことで・・・」

週に一度行われている【転生者会議】もすでに3回目を迎えていた。

転生前は一致団結していたはずだ。少なくともワイルドハントを原作前に殺そうと殺意を持って、楽しくアカメの世界を生きて、感謝されて認められたかったはずだった。

しかし、いざ転生するところとして意見が割れてしまったのだ・・・
特にオリヴァーとエリオットの対立が酷い。

オリヴァーはドロテアの助手らしいのだが、彼女にとっても恩義があるらしい。確か転生前は一番殺しを楽しみにしていたはずなのだが、まるで別人のような発言をしている。

対してエリオットは多くは語らないが、チャンプを始末できるように準備を整えているらしい。そのうえ、暗殺を保留するコハルとセシルを含めてオリヴァーのことを見下しているようだ。

「お前らサア、何言ってるの？あいつらは犯罪者で悪人で汚いんだ。この分じゃ俺がラ
ンと協力してあいつを殺すのが一番になりそうだな！」

エリオットはそう言つて傲慢げに宣言する。

コハルとオリヴァーは不満げな表情を浮かべ、セシルはそんな彼らを宥めているよう
だ。

・・・リンネは分からない。

暗殺の指針は変わらないけれど、オネスト大臣に堂々と殺すと宣言しているあた
り・・・殺す気は本当にあるのだろうか。

「あんたね・・・そりゃあ悪い奴らよ？畜生共よ。でもあんたさ、チャンプに世話になっ

てたんでしょ？あんだだつて殺せてないじゃない」

「そつ、それは俺はガキのままで……いいじゃねえか！今からランと協力すんだよ！お前とは違って俺はハンデがあつたんだ！ガキの姿であんなデブを殺せるわけないだろ！」

「はあ？なによそれ。ハンデがあつたから自分は良くて、あたしたちは駄目なわけ？意味分かんない。自分のこと棚にあげてよく言えるわねチビガキ」

イラついた調子のコハルとエリオットが剣呑な空気を纏わせて言い合いを始めた。まったくうるさい奴らだ……

「ッ、ハッ……どうせお前、エンシンとデキてんだろ？女つてどうせ強引にヤラれるのが好きとかつて言うしな。あのエンシンなら実の妹でも抱きそうだ。」

エリオットの言葉で、一気に部屋の空気が氷点下になった。

仲裁しようとしたセシルも、様子を見ていたリンネとオリヴァーもさすがにこの言葉には驚いたようだ。

「……あんだ、サイッター。マジで言ってるわけ？」

コハルの声がやけに冷たく感じる。

だが、エリオットはにやけて笑いながら彼女に返答する。

「当たり前だろ？お前、あいつと喧嘩してても庇うしなあ。もうあれじゃん？どうせ初めの相手とかそういうのなんだろ？あいつに何度かやられて情でも湧いたクチだともたな。今更レイプの被害者だからとか抜かすなよ。」

「……」

「ほーらな！当たったぜ。これだから女つてやつは信用できないんだ。すぐに女の人権がどうか抜かすしな！それに”中古”のビッチなんてまともな奴はいないしな」

エリオットの言葉にコハルは何も答えない。顔を真っ赤にして瞳を潤ませている。

「エリオット、さすがにそれは言い過ぎだ」

「そうだよ。その……勘繰りすぎだよ」

オリヴァーとセシルがコハルの近くに駆け寄ってハンカチなどを彼女に貸している。

エリオットはそんな様子を見ながら不機嫌そうな表情になった。

「これだから女は……泣いたら許されると思ってやがるな」

「エリオット、少し黙れ」

リンネの殺気のもつた一言でエリオットもさすがに黙る。

「……意見が違うなら討論をしろ。人格攻撃は反論ですらない。」

「……う、うつせえな！あんたは俺の味方じゃないのかよ！」

「個々人の味方じゃないぞ、俺は」

「!」

「それぞれでワイルドハントを殺すと決めただろう殺すならそれでいい。保留や様子見も結構だが、悪事を重ねるなら俺が殺す」

・・・保留や様子見を容認している、と見ていいのだろうか。

リンネがストッパーになっているとはいえ、ワイルドハントの全員が悪事を働いてないわけではない。

転生前からだが、この殺意はどこからくるのだろうか。

静かに私が様子を見てみると、エリオットが「おい」と声を掛けてきた。

全員の視線が私に集まる。

「お前はどうかんだよ」

「イズウ以外は殺していいぞ?」

一言で私は意見を述べた。

しかし全員黙ったままである。

説明が足りなかったんだろうか・・・よし、しっかりと説明しよう。

「イズウはな、人を斬るのが好きだがとてもいい人間なんだ。私の刀をすごい褒めてくれて私のことを褒めてくれるんだ。私の刀が綺麗だといつも言ってくれらるんだ。だか

らイゾウは良いところもあるんだ。だからイゾウだけは殺さない。あとは死んでも生きてもどうでもいい。」

説明が終わってみんなを見回すが、やはり全員私を見たまま沈黙していた。

もつと細かく殺してはいけないというべきなのだろうか・・・

私が説明を考えていると、セシルが小さな声で「あの」と話しかけてきた。

「どうしたセシル」

「あの、イゾウさんが人を斬るのは駄目なんじゃないですか？だって帝国の人たちや、ナイトレイドのラバックさんだって犠牲になるし・・・」

「だってイゾウを殺しても誰かが感謝するのか？」

「えっ、か、感謝ですか？」

「私たちがワイルドハントを殺しても、他の民衆や原作キャラが感謝するか？私たちがせっかく「良い殺し」をしてもそれが良いと分からない馬鹿ばっかじゃないか。そんな馬鹿を助ける必要ってあるのか？」

「・・・ッ！」

「だからな、イゾウだけは殺さないでくれ。他の奴はどうでもいいから生かしても殺しても私は文句はない」

なんでだろう。私は変なことを言っただけでもないのだが、なぜかみんな不思議な表

情になっている。

ああ、そろそろイゾウたちがドロテアの工房の視察を終えて帰ってくる時間帯だ。
江雪の手入れをしてあげないといけないな

ふふっ、楽しみだ。

「俺の弟が悪かったな」

エンシンがイゾウと共に巡回を終えて詰所に帰ってきた。

詰所ではコスミナとドロテアがイエーガーズからの差し入れであるお菓子を食べ
おり、イエーガーズのランとスタイリツシュの二人が彼女たちと会話をしている。

「チツ、スタイリツシュの奴はともかく・・・あのランって奴は怪しいだろ」
そんなことを思いながらカウンターへと向かう。

巡回から帰ってきて疲れたからか、無性に酒が欲しくなっていたのだ。

カウンターにはチャンプが先に飲んでいるらしい。

「よお、お前も飲んでるのかピエロ野郎」

「・・・」

「んだよ、どうした？」

「・・・エンシン、すまねえな」

カウンターでウイスキーを飲んでいたチャンプが巡回帰りのエンシンに謝罪した。

唐突に謝罪されたエンシンは、自分がチャンプに謝罪されるようなことがあったかを

思い出してゐるらしい。

「・・・おい、お前なんかやったのか？」

「いや、俺のところの弟がお前の妹に悪口言ったらしいからな」

「はあ？」

「・・・数日前のやつだよ。お前の妹、泣いてたつぽいだよ。だから俺がエリオットから聞いたんだよ」

「あー・・・」

「思い出したか？」

「ここでエンシンは数日前のことを思い出す。

エンシンがコスミナたちと共に巡回や訓練から帰った時のことである。

コハルが泣き腫らした目になっていて、留守を任せていたメンバーの間に気まずい空気が流れていた。

後々事情を聞くと、今後の対ナイトレイドへの作戦方針などでエリオットが言い過ぎってしまったとかなんとか・・・

「あんまり気にするなよ。俺の妹も口が悪イからな・・・多分、腹立つことでも言ったんだろ。お互い様だ」

「それでも、あれだ・・・その、女泣かせてるのに謝らないしよ、あいつ」

「ああん？お前そういうの気にするのかよ。いつもは大人はカスだつて言ってるくせによ。」

「俺がやったならともかく・・・その、なんだ・・・俺の弟がやったことだしな。あいつが謝らないなら、俺が頭下げるべきだろ」

「そういうとこ真面目かよ。・・・あんまり気にするなよな」

「つつてもよお・・・あいつはあいつで態度悪いんだよ」

そんな会話をしつつ、エンシンはチャンプの隣の席に座る。

イズウもエンシンの隣に座つて清酒の瓶を取り出した。どうやら彼も酒を嗜むつもりらしい。

「まあまあ、チャンプ殿もエンシン殿もそこまでしておけばよい。兄同士で和解しても、残りは本人たちの問題だろう？」

「そりやそうだけだよ・・・エリオットの奴つて言つていい事と悪い事の区別がついてないんだ。格下の奴らや敵に言うならまだしも・・・まあ、なんだ、味方にまで変なこと言いやがるからな」

「ああん？コハルの奴も相当口悪いし、暴力降るし、貧乳で色気がねえし、すぐに騙されるし、やさしさの欠片すらねえからな。俺の妹のほうが厄介だぜ」

「・・・ふふっ」

「なんだよイゾウ、ちよつと笑つてよお」

「そんなにおかしいか？」

「チャンプ殿もエンシン殿も、ご兄弟と中々に仲が良いみたいだな。拙者は独り身ゆえ、少し羨ましい」

「・・・仲良し、ねえ。俺もエリオットから・・・多分、つつーか、確実に好かれてはねえからな」

「仲なんて良くないぜ？俺なんて結構疎まれてるぞ」

「いやいや、拙者から見ればほほえましい限りだ。まあ、エリオット殿とコハル殿からは何かの葛藤は見えているがな・・・なに、それも本人たちが解決すべき問題。拙者が何か言うことではござらん」

「・・・」

「・・・」

イゾウの言葉にエンシンとチャンプは黙る。

少しの沈黙の後、イゾウは彼らが黙つたままなのを疑問に思つた。何かしら彼らが思ふところがあるのだろうか、と

「どうしたでござるか？」

「いや、つーかお前・・・アオイとはどうなんだよ」

「そうだけ。あいつつてその・・・お前の女とかじゃねえのか？」

「は？」

「だつてよお、刀工がずっと付いてきてるつて中々無いだろ。兄弟姉妹つて感じにはあんまり見えないしよ」

「お前の女つてあたりで俺らは見てたけど・・・違うのか？」

エンシンとチャンプの言葉にイゾウは少し沈黙して、こう返した。

「拙者が愛しているのは江雪だ。アオイ殿は恩人であり天才だと思つてゐるが、そういった対象として見たことは無い」

「・・・おー、そうかそうか。お前そうなのか」

「・・・へえ、そうかいそうかい」

ここでエンシンとチャンプ、そしてこつそりと会話を盗み聞きしていたドロテアやコスミナ、スタイリツシユとランは苦笑いを浮かべた。

彼らから見れば、アオイはイゾウに対して依存的なまでに尽くしてゐて・・・時折、愛情すら感じるほどにイゾウを好いている。

イゾウはイゾウでアオイに対してはある程度の尊敬や好意があるにしても、おそらくそれはあくまで“江雪の生みの親”としてのものだろう・・・

「（こりゃあ、アオイのやつも大変そうだな・・・エリオットよりも拗らせた性格してや

がるのに)」

「(アオイも苦勞すんな、これじゃあよ)」

「(アオイちゃん、かわいそうです・・・)」

「(イズウはさすがじゃのう。江雪への愛は本物、といったところか)」

「(あらあら、イズウったら案外酷い男ね。でも面白そうだからシユラにも教えてあげましょうか)」

「(・・・やれやれ、こういつた会話を聞いてしまうと、少し情が移ってしまいうです。ワイルドハントは潰さないといけないというのに)」

「あなたはどうなんですか？」

ここのところあまり熟睡できていない気がする。

気怠く感じながらもベッドから起き上がる。机の上にはエリオットから得た情報をまとめた書類が乱雑に置いてある。

その中には子供たちを殺した猟奇殺人鬼・・・チャンプの絵姿とデータが記載されたものもある。

自分の教え子たちを殺した犯人がこんなに近くにいるのに、手が出せないのはとても苦しい。ここところは体調も少し悪い。

・・・情報を提供してくれたエリオットはチャンプの実の弟である。

体質なのか病気なのか、彼は成長することなく子供の姿のまま大人になったらしい。だからこそ、チャンプを止めたかったのに無理であったと弁明していた。

もしも殺したとして、そのあと自分が生きていくには厳しい状況であった、と・・・
・・・本当に、本当に愚かで浅ましい人間もいたものだ。

そんな弁明をしたところで殺人を止めずに一緒にいた貴方も同罪なのに
まるで自分は罪のない被害者といった態度ですり寄られて、真意がわからないわけな

いだろう。

・・・ウェイブならきつと、信じてくれるだろうけれども。私は違う。

チャンプを殺したあとにイエーガーズの、いえ、私の庇護下にいたいことぐらい、お見通しだ。

あれだけわかりやすい態度なのに、本人はきつと気づいてないか、わかっているやっ
ているのだろう。本当に嘗められたものだ。

・・・チャンプよりも、腹立たしい存在であることには違いない。

考え込んでいると、部屋の扉がノックされる。どうやらイエーガーズの誰かが起こし
に来てくれたらしい。

「ラン、起きてる？朝ごはんできてるよ」

「ああ、クロメさん。すぐに行きますよ」

・・・さて、今日はエスデス将軍とセリユーさんの二人と帝都を見回るはずだった。す
ぐに準備して朝食にしよう。

「今日も快晴ですね！いい天気です！絶好のパトロール日和ですよ隊長！」

「ああ、そうだな。早速メインストリートから巡回して、歓楽街もみていこう。貴族の屋

敷付近もだな」

「はいっ！……もちろん、悪がいれば処分しても……」

「ああ、かまわん」

彼女たちの会話を聞きながら見回りについていく。メインストリートはまだ活気があるものの、やはり行きかう人々の表情はやや暗い。

……そうしていると、貴族の屋敷近くまで来た。しかし人だかりができていし、幾人かの兵士が正門に立っていた。

「何かあったのか」

「これはエスデス將軍！いえ、実はワイルドハントの方々が……」

兵士は言いにくそうに正門から先を指さした。

そこにあつたのは警護していた傭兵や使用人の死体の山があつた。いや、山というよりは……串刺しにされていたり、上半身と下半身が分けられているものもある。

面白半分に人間を殺しているようで怒りがこみあげてくる。

「なんですかこれは！」

「早く教えろ」

「ええその……この貴族がどうやら田舎から出てきた人間を拷問していたとかなんとかで……」

「ワイルドハントはリンネが指揮していて、悪事を働いていた奴には犯罪者を拷問させることで欲望を発散させている」

エリオットの情報や他の侍女や兵士たちから聞いた通りだ。

人を斬ることで刀に食事をさせているイゾウや、海賊をしていたエンシン、そしてシリアルキラーのチャンプ・・・ああ、そうだ。錬金術師のドロテアもその中には入るだろう。

基本的に他人を害することを厭わない人間たちが集まっている。

・・・集めたのは大臣の息子であるシユラらしいが、よほどの人材を集めたらしい。悪い意味で、だが。

今はまだリンネの影響が強いが、いつ帝都の住民に手を出すかわかったものではない。

そうこうしていると、セリユーさんが一目散に屋敷へとかけていってしまった。エスデス將軍も呆れながら追いかけている。

私も追いかけて、屋敷の中に入るとさらに凄惨な光景が広がっていた。

ドロテアが屋敷の主人の血を飲み干し、エンシンが奥方を犯していた。

エリオットさんは・・・部屋の隅にいるようだ。自分は止められなかったといわんばかりにわざとらしく怯えている。振り”をしていた。

「・・・あの、イエーガーズの方ですか。どうしましたか？」

ドロテアの付き人であるオリヴァーが何か調書らしきものを書きながらこちらへとやってきた。

「なんなんですかこれは!!こんな見せしめみたいなことやめなさい!!」

セリューさんの怒号が響いたが、オリヴァーは引く様子がない。

エスデス將軍は静観しているようだ。將軍の軍ならこういったことは慣れている可能性がある。

「これは悪人に対してだけ行ってますし、この貴族の方々がやったことと比べたら遙かに生易しいですよ」

「そういうことじゃないです!」

「・・・あなたはどうなんですか?」

セリューさんがオリヴァーさんの言葉を聞いて、言い返すことなく沈黙した。

「・・・イエーガーズにも犯罪者を独自に処罰していいという権限がありましたね。セリューさんも見つけた犯罪者をヘカトンケイルに食べさせてますよね。それと一体、何が違うんですか?」

「それは、だってあれは悪を滅ぼすために、見せしめだなんて・・・」

「・・・民衆からみれば、俺たちもあなたも、そこまで変わらないんですよ」

オリヴァーはそう返して、寂しそうに笑った。

「オリヴァー、そろそろ帰るぞ」

「ええ分かりました。．．．シユラ様は？」

「あやつはこの．．．そう、アリアと呼ばれた娘を連れて奥に行つたからのう。呼びに行つてくれぬか？」

「了解しました」

「．．．」

セリユーさんは黙つたままうつむいてしまった。エスデス将軍が「さつさと帰るぞ」と、彼女の手を引いて屋敷から出ていく。

．．．ワイルドハントは危険なことに変わりない。だが、情報が足りない気がする。

．．．危ないだけじゃない、彼らにはまだ何かありそうだ。

「生きていてほしいと願うのは」

今日は6回目の【転生者会議】だ。今日はリンネさんは不在らしい。

あの人は大臣の息子としてもワイルドハントのリーダーとしても事務作業や文官としての仕事を全部こなしているから仕方ないだろう。

僕は姉さんたちの監視を任されているから仕方ないけど……リンネさんはかなり無理をしている気がする。

自分だけで全部背負い込んでる感じがして気が気でない。

……監視も大事かもしれないけれど、もっと僕たちのことを頼ってほしい

殺すかどうかは抜きにしても……同じ転生者として、仲間なんだから……

……これも僕のがままなのかな

コスミナ姉さんと一緒に生きて死にたいっていうわがままと同じぐらいのわがままなのかもしれない

「っていうかさ、おかしくない？」

コハルさんが全員に聞こえるように、なおかつ少々イラついた声で尋ねた。

なんのことだろうか？何かおかしいことってあったかな？

・・・まだ、コスミナ姉さんたちを殺してないこと、かなあ・・・

「あのさ、原作の流れと全然違うって気が付かないの？」

そう言われ、僕は一生懸命アカメが斬る！の原作を思い出そうとする。

転生してから十何年も経過してるし、大体の流れは覚えているけど細かいところまではさすがに覚えていない。

残りのメンバーも一生懸命思い出しているようだ。

やはり原作を何度か見直さないといけないことってあるよね・・・手元に無いけれど、どうだったっけ・・・

「タツミはアリアに誘われて、帝都の闇を知るはずでしょ？なのにこの間、アリア一家を私たちは殲滅した」

「そういえば、確かそんな感じだったな」

アオイさんも思い出したように頷いている。

・・・そういえば1話目はそんな話だったっけ？

「エアちゃんとファルちゃんとルナちゃん、この3人はタツミがナイトレイドに入って、しかもイエーガーズが結成されてから人身売買されたわよね。でも・・・その、この間助けたわよね？」

「・・・そういうええばそうだったっけか」

エリオットさんも渋そうな顔をして同意する。

・・・確かそんな展開だったっけ・・・

「・・・ワイルドハントとイエーガーズが同時期に設立されたのはいいわ。あたしたちがいるんだから多少、原作と展開が違うかもしれない。けど、エアちゃんたちが帝都にやってくる時期も早いし・・・何かおかしくない？」

コハルさんの問いかけに、誰も答ええない。

原作の流れがごちゃごちゃになっている・・・おかしいとは思いますが、自分たち転生者が介入しているのだから順番がおかしくなってしまうもおかしくはないだろう。

「これじゃあ原作の流れが変わるよな。誰が死ぬのかタイミングが掴めなくなる。なるべくならイエーガーズとナイトレイドの死亡者は減らしたいんだが・・・」

オリヴァーさんが疲れたように大げさにため息を吐いた。

コスミナ姉さんたちの悪事をどうにかするのでもそうだけど、なるべくなら原作のキャラクターの死亡は回避したいところだ。

「つていうかよお、リンネの奴はなんも言わないし、アリア一家を粛正したのもあいつの指令じゃねーか。チャンプの奴もそうやってさっさと殺せばいいのにしないしよー」

「・・・殺すかどうかはともかく・・・それもそうだな。エリオットのいうことも一理あ

るかもしれない。リンネのほうが記憶力は良いはずなんだが・・・おかしいな。コハルもオリヴァーもどう思う？」

アオイさんに問われ、コハルさんとオリヴァーさんは互いの視線を合わせて、言いよどんでしまった。

「・・・もしかして、リンネってあたしたちに何か隠してるのかな」

「・・・考えたくはないが、もしかしたらワイルドハントで悪事を働いた人間をすぐに始末できるようにしているのかもかもしれないな」

そんな二人の意見を聞きながら、僕も一生懸命考えてみた。

どうして原作の流れと違うんだろう

原作と違う流れを作った一部の要因はリンネさんが作ったのは確かだし

リンネさんはあまり僕らに自分の意見を言わない。ただ「殺すときは殺す」ぐらいだった・・・

・・・僕らは、信用されていないのだろうか

そう思っ、ただ僕は悔しくなった。

あれだけリーダーとしてまとめられる素質があつて、この中では強いはずなのに・・・なんでちゃんと、僕らと腹を割って話してくれないんだろう。

みんなの意見が、バラバラだから

生かしたいと思っている人が、いるからなのかな

・・・生きていてほしいと願うのは、悪いことなんだろうか

「おーい、今帰ったぜー」

詰所の玄関あたりで、シユラさんの声が聞こえた。

自分たちの会議がバレてはいけない。すぐに詰所の玄関前まで行くことにした。

・・・玄関前には、シユラさんたちと、一人の男の子がいた。

「エリオット、見回りから帰ったぜ」

「今日の見回りは楽しかったでござるな」

「セシルちゃん！コスミナちゃんたちの後輩ちゃんができましたよー！」

「うむ、リンネが忙しそうじゃし、ワイルドハントにも補欠は必要じゃからな」

「シユラの奴が勧誘したんだよ。ま、お前らも仲良くしろよ。特にコハル、お前新人いびりとかすんなよ？」

楽しそうに話すコスミナ姉さんたちだったが、僕らはそれに返答もできなかつた。

「あとで兄貴にも紹介してやるつもりだ。・・・おっと、その前に自己紹介だな。ほらよ」

「あ、えーつと・・・タツミです！よろしくお願いします！」

タツミ試験雇用編

★現状把握

最新話時点で生存している人間（帝具人間含む）を記載

【秘密警察ワイルドハント】

帝国政治班所属組織

★リンネ

チームリーダーであり、事務作業も調査まとめや内政的な業務なども一人でこなしている。

シユラについては大臣ともども殺す気であるが、いまいち他の転生者組と距離感があるようだ・・・

原作軸が狂っている、むしろ狂わせていることについて言及していないため、現在他の転生者から何か隠しているのではないかと疑われている。

★シユラ

副リーダーで現場担当。リンネから当たりが強いが、本人は兄を慕っている。

好感度はほぼほぼMAXである。

原作軸が一番狂う事態を引き起こした。ある意味戦犯。ある意味有能。

イエーガーズのセリユーが保有しているヘカトンケイル（コロ）が未だに苦手であるが、本人は隠している。

★タツミ

ワイルドハントの補欠となった少年であり、本来の「アカメが斬る！」での重要人物。シユラが見回り中に見つけ、兄の補佐に使えろと思つて拾つてきた。

田舎から出てきて、兵士募集受付には入れず、金髪の女（レオーネ）に食い逃げ＆金を巻き上げられて困つていたところをシユラに声を掛けられてついてきた。

エンシン

チャンプ

イゾウ

コスミナ

ドロテア

コハル

エリオット

アオイ

セシル

オリヴァー

《備考》

チーム内は転生者組内部でのいざこざがあるものの、ワイルドハントの本来のメンバーは自分の兄弟姉妹や補佐がいるためか原作よりも関係は親密になっている。

また、転生者と正規メンバーとの関係性もかなり複雑なものとなっているため、現状で誰一人暗殺に踏み込んでない。

リンネは意思を見せているが実際はどう思っているか不明。エリオットはイエーガーズ所属のランとコンタクトをとり、ランとともにチャンプを暗殺しようとしている。

【特殊警察イエーガーズ】

帝国エスデス軍所属組織

★エスデス

エスデス軍を指揮する女将軍。帝国最強という肩書は伊達じやない。

ワイルドハントと協力すべき立ち位置だが、あんまりリンネのことは好きではない。

特に理由はなく「そこそこ強いけど、なんとなく気に入らない」といった類のもの。

★セリユー・ユビキタス

オリヴァーに自分のことを指摘されて言い返せなくなつて悔しくなっている。
それと同時に・・・

★ラン

エリオットにワイルドハントの悪行や情報を流されているが、正直チャンプよりもエリオットを標的としつつある復讐者。

リンネや転生者組がいないとワイルドハントが民衆に手を出す危険性があると考え、現時点で何か策を考えているらしい。

ウエイブ

クロメ

ボルス

Dr. スタイリツシユ

コロ／ヘカトンケイル（帝具生物）

【帝国側】

★オネスト大臣

「アカメが斬る！」の諸悪の根源と言われる外道畜生。

シユラは一応息子として見ているが、シユラよりもリンネを評価している。

反抗して殺意をむき出しにしているリンネに対して、危機感は抱いていない。

「かわいい反抗期みたいなもの」と余裕でリンネに言えるぐらいのメンタルの持ち主。

★皇帝陛下

イエーガーズとワイルドハントの設立をうれしく思っている。

帝都の治安が良くなり、民が暮らしやすくなってくれらるだろうと期待をしているようだ。

今後の出番予定有

★ブドー大將軍

リンネとシユラが大怪我をした一件があつたせいとか、以前よりもリンネとシユラを心配している。特にリンネは何か抱えていることがわかるせいとか、以前よりもよく話すようになった。

また、原作よりも政治関連について学んでいるため、オネスト大臣派とブドー大將軍派に分かれつつあるらしい。(ただし本編で出せるとは言っていない)

サイキユウ

ドウセン

コウケイ

ヨウカン

中庭の番人／宮殿警護専門の帝具使い

ノウケン将軍

シヨウエイ内政官

ボリック／現「安寧道」幹部

カイリ／暗殺部隊リーダー

スズカ

メズ

シユテン

イバラ

【ナイトレイド】

★ナジエンダ

ワイルドハントはともかく、行動方針の一部やリンネについては評価している。

帝国側なので敵対すれば応戦しろと言っているもの、リンネの大臣嫌いは知っている。なので出来れば革命軍に味方してほしいと思っている

★アカメ

リンネとシユラのことを帝国暗殺部隊時代から知っている。シユラはともかく、リンネの大臣嫌いや、帝国に蔓延る悪人への憎悪を知っているので味方になってほしいと思っている。

スサノオ（帝具人間）

マイン

レオーネ

チエルシー

ラバツク

シエーレ

ブラート

【現状所属組織不明】

原作帝具使いを含んだ、所属組織不明の生存キャラクター

今後登場または再登場予定のキャラも含みますが、実際は全員分の余裕があるかどうかは不明。

★エア

ワイルドハントに救われた少女。無事に救われたものの、男性不信に陥っている。エンシンについては特に悪い人という認識はぎりぎり持つてない。

コハルちゃんの姿を見て、その強さに憧れているのはここだけの話。

★ルナ

ワイルドハントに救われた少女。

片目が失明してしまったものの、命は救われた。だが、先端恐怖症を発症しているよ
うで、現在は療養している。

★フアル

ワイルドハントに救われた少女。

足を折られたが、一命はとりとめた。現在はリハビリをしているが、自分の力不足を
痛感しているらしい。

サヨ

イエヤス

スピア

ホリマカ

ザンク

リヴァ

ニヤウ

ダイダラ

ヌゲ

※革命軍の陸型危険種を操る帝具使いや、帝国側の飛行型危険種を操る帝具使いについては未定

※安寧道の教主は第三勢力のため、未定です

「俺の帝具は普通じゃない」

シユラの奴はバカだバカだと思っていたが、こんな大馬鹿をやらかすとは思ってものなかつた。

・・・大馬鹿とわかるのは、原作知識のある俺や他の転生者しかわからないだろう。普通に人間が見れば「新人候補を連れてきた」程度の話だ。

「兄貴！ワイルドハントの補欠として入れたいやつがいるんだ」

こんなことをほざいた後に紹介したのが、まさかのタツミだ

この「アカメが斬る！」の重要なキャラクター

ナイトレイドに入り、帝具である悪鬼纏身インクルシオを継いで、皇帝一族が使う帝具であるシコウテイザーを破る

・・・そういう筋書きのはずだ。

「あ、あの、俺をここで働かせてください!!」

執務室に響くほどの声量で頭を下げ頼み込んだ。

「・・・」

「いいだろ？普段の事務仕事とか全部兄貴がしてるからよ、なんなら補欠がいたら助か

るじゃねえか」

「その、俺……村に仕送りをしないとイケないし、それに出世しないとイケなくて……」

「こいつよ、兵士の募集に入れなかつたって聞いたから誘つたんだよ。適当にエンシンと剣術で競わせたら結構な逸材だし」

「あのつ、俺、お金もちよつとなくて泊まるどころも……だからその、お願いします!!」
俺が何も答えない間に二人がどんどんアピールしてくるが、正直雇う気にならない。
……まったく面倒なことをしてくれるものだ。

確かにタツミをこのままワイルドハントに引き留めたほうがいい。だが、今の組織のありようはタツミには合わないはずだ。

「……タツミ、と言つたか」

「はい！なんでもします！」

「……ここがどういう組織か、分かっているのか」

「え？ええつと……秘密警察、でしたよね」

「……悪を持って悪を制す、そういうやり方をしている。生憎、俺の愚弟は才能があるろくでもないクズ共しか勧誘してないからな。その馬鹿共が悪人に対して好き勝手しているだけだ」

「……」

「メンバーには海賊や猟奇殺人鬼に人斬り、西の王国で魔女認定された女や錬金術師まで在籍している。まともな奴らはいない」

「……」

「薬漬けにしたやくざに薬物投与したりな。この間は民間人を拷問していた貴族を処罰したり凌辱していたようだな……なあ、シユラ」

そう言つて、シユラを見ると少しバツが悪そうにしている。そのまま黙つて様子を見るようだ。

本当のことを俺は言つただけなんだがな。

……まあいい。問題はタツミだ。

「……その、俺、ちゃんと知ってます」

「!」

「街に来たときとか、その、お金を盗んでいった女から聞いてて」

「……どういう内容だ」

恐らくはナイトレイド所属のレオーネから聞いたのだろう。

ナイトレイドからすれば、敵対組織のはずだ。ろくなことは言つてないと思うが……

「・・・帝都の住民からは、恐れられていたり、感謝されてるって」「感謝されるようなことは何一つしてない」

「・・・帝都でひどいことをしていた奴を、同じ目に・・・いや、それ以上に報復してくれるって。貴族や権力のある悪人相手にも怯まない人たちだって。」

「・・・その愚弟たちが馬鹿なことをしないための処置の一つだ」

根気よく説得しようとするが、目の前のタツミはまっすぐにこちらへと射抜くような視線を向ける。

・・・正義の味方と勘違いしているのだろう。

そんな綺麗なものじゃあないんだ

「兄貴、いいだろ?」

「お願いします。軍に入れないなら、俺は・・・」

「・・・わかった。ただし、どうやらワイルドハントに夢を見過ぎているようだからな。試用期間を設ける。いいな?」

俺が妥協案を提示すると、タツミはすぐに嬉しそうにしながら「ありがとうございませー!」とお礼を言ってきた。

シユラも機嫌がよくなったのか、早速タツミを連れて案内すると俺に言っつて執務室から出て行ってしまった。

「……まあ、試用期間中にきつとタツミは幻滅するはずだ

静かになったことだから、また調書の作成をしないといけない。あとは情報屋や子飼いの隠密からの情報をまとめないとな……

《おやおやあ、まさか才能ある少年を手放そうっていう気なんですか？》

……俺の持っている帝具「時間逆行メフィストフェレス」から声が聞こえた。耳障りな言い方をする男の声に俺は書類を書き進めながら適当に返答した。

「手放すも何も、この組織に合わないはずだ」

《決めつけはよくありませんよ》

「……それはそうと、帝具が話しかけるな」

《酷いですねえ。そもそも私は帝具じゃないんですよ？》

「……俺の帝具は、帝具じゃない

いや、この世界では帝具とされているが実際はその枠組みに無理やり収まっただけの悪魔だ。

あの悪魔……ロッドバルトが俺に寄越したのだ。

《ロッドバルトから言われて貴方を手助けすることになったんですから仲良くしま

しようよ》

「黙れ悪魔。穢れているような悪人と仲良くする義理はない」

《酷いですね。そういう偏見はよくありません。そういうジエノサイド的な思想はどうにかしたほうがいいですよ》

まったく本当に煩い奴だ。普段は黙っているくせに

．．．こんな悪魔はかまわない。それよりもタツミだ。

．．．試用期間中に、ワイルドハントのメンバーの異常さに気が付くといいが．．．

「それじゃあなんでエリオットさんのことを」

帝国の辺境にある村で俺は生まれた。多少の四季は感じたけれども、かなり寒い地方だったせいか、作物も限られたものしか作れなかった。

物々交換や旅商人との交流もあったけれど、年々税金が重くなっていく……だから、俺は幼馴染であるイエヤスやサヨと一緒に、この帝都に出稼ぎにやってきた。

旅の途中で盗賊に遭遇してあいつらと逸れるし

帝都に到着したのは良かったけれど、兵士に志願しても無下にされるし

人の好きそうなおっぱいのある金髪女に食い逃げされて、お金もほとんどなくなるし
おまけにガラの悪そうなチンピラに絡まれて……

正直、野宿しようとした矢先に眼鏡の女性たちに絡まれた。

話に聞くと、どうやら秘密警察ワイルドハントという組織の人らしい。

ちようど、イエーガーズ？とかワイルドハントっていう組織は金髪女とかから聞いていた俺は、自分から志願してみた。

「お願いしますー！」

「んー・・・おいエンシン、ちよつとこいつと模擬戦してみろよ。使えるなら補欠にしてやろうぜ」

「シユラお前・・・いいのかよ」

「ちようど兄貴の事務手伝いとか雑用がいたらいいとか思つててよ。でも、使えるやつじゃねえと兄貴も納得しないからな」

・・・そういう経緯があつて、俺は見事に補欠になつたわけだ。

と、いつても・・・リーダーであるリンネさんから「試用期間を設ける」って言われたけど。

確かに帝国所属で民間でもそれなりに信用されてるみたいだけど・・・悪人相手とはいえ、相次に酷い拷問をしているらしいからな

俺もあんまりそういうのは好きじゃないし、出来れば避けたいけど・・・でも、そんなことは言つてられない。

元々兵士として就職しようとして決めて帝都に来たんだ。人を斬る覚悟だつてしたはずだ。ここで諦めるわけにはいかない！

「おーい、タツミ君。聞いてる？」

「えっ、あ、すみません！考え事してました！」

「まったくなあ・・・お前には期待してるんだぜ？」

「ついつい考え事をしていた俺に、エリオットさんが俺の方に手を置いた。

期待してるだなんて光栄だよな・・・」

「あははは、ありがとうございます」

「おいおい、顔が真っ赤だぜ新人。ま、お前は正義感の強そうな奴だから、俺はすごく期待してるんだよ」

「そ、そんなことは・・・」

「頼りにしてるぜ。んじゃ、俺はこれからまた巡回しなくちゃいけないからお前は晩飯よろしくな」

「はいー」

エリオットさんを見送って、一息ついた。

まずは詰所の掃除して、んでもって晩飯の下拵えしてから剣の鍛錬かな？

どうせなら残ってるメンバーの人に俺の実力を見てもらって、ちゃんとリンネさんへの説得材料に・・・

「・・・おい、なんだよ」

・・・チャンプさんかあ・・・

・・・エリオットさんが教えてくれたけど、あんまり良い人ではないんだよなあ・・・
・・・実弟がわざわざ「子供好きの変質者」「殺人鬼」っていうのは引つかかるけど・・・

「あ、いえ、なんでも」

「・・・エリオットのことだが、あいつのことはその、大目に見てやってくれよ」

「え?」

「そのうち、俺のことを殺してくれとか頼むだろうしな。殺しに来たら返り討ちにすりゃあいいが、一応お前もワイルドハントの補欠だからな」

お、おおう・・・?待って、なんかもものすごいこと言われてる!?

「あつ、あの、エリオットさんがその、殺しを頼むってどういう・・・」

「そのままだよ、そのまま。あいつは俺のことが嫌いだしな、何度かそんなことがあった」

もつとすごいこと言われた!え、弟なのに兄貴殺そうとしてるのか!?あんなに親切な人なのにそんな・・・

しかもエリオットさんは、実家で虐待されてたって聞いて・・・二人で逃げたはずだ

ろ？なのに兄貴を殺すつてののか？

「なんで・・・あ、あの、お二人つて・・・虐待されてて、それで逃げ出してつてあの、エリオットさんから聞いて・・・」

「はあ・・・つたく、あいつはよく喋れるよな。普通、喋らないだろそういうの」

「仲が、悪いんですか？」

「・・・少なくとも、エリオットは昔から俺のことを見下してるだろうし、俺のことは嫌いだな」

面倒そうにチャンプさんがため息を吐いて読んでいた雑誌を机の上に置いた。

「それならなんでエリオットさんを・・・助けたんだ？」

「・・・お前よ、自分と同じ、いやそれ以上に酷い目にあってる実の弟を見捨てられるか？」

「・・・でも、その」

「・・・そりやまあ、あのまま見捨てても問題無かったぜ？あいつはあいつで俺のことを見下してたしな。でもそれは、あのクソ共と同じことしてるだろうなと思っただけだ」

「・・・」

「ま、大人は全員クソだし、子供は天使だから仕方ないかもな」

そう答えて、しばらく俺もチャンプさんも黙ったままになってしまった。

うう、沈黙がつらい・・・でも、俺は何をどう言えばいいのかよく分からなかった。

「あと、気を付けろよ」

「え、あの・・・何がです?」

「エリオットの奴はな、自分が一番大事なタイプだ。自分が生き残るためなら、俺より強そうなのにはすり寄りするしなんでもする。切り捨てる時は平気で殺すからな」

「なっ・・・」

「・・・ま、お前はなんか信用されてるから大丈夫だと思うけどな」

「・・・はあ・・・そうかな」

「・・・ま、俺の弟は困り者だが、仲良くしてやってくれよ。あんだけ懐いてるのは珍しいからな」

「・・・」

・・・兄弟姉妹のいない俺には分からないけれど、殺そうとしてくる弟にそれをわかっている兄ってどういう関係なんだろう。

うーん・・・俺、ここで無事にやっていけるのだろうか・・・?

「こんな生活も、悪くはねえな」

女性の買い物がかんなに長いと思っていなかった。

今日はドロテアさんやコスミナさんを筆頭に、ワイルドハントの女性隊員の買い物に俺とエンシンさんが付き合わされていた。

これも補欠の仕事と思えば・・・それに帝都を見て回るのもいいはずだ。

帝都の街は回り切れないほど広いし、なるべく店や道を覚えておくのもいいだろう。

・・・サヨとイエヤスは無事だろうか。

兵士の枠が空いてなかったけど、どこかの店とか、とにかく帝都に来ているはず。

・・・来ていてほしいし、無事でいてほしい。どうやら帝都はあまり治安も良くないところがあるらしいしな。

「おい、なんか考え事か？」

「あつ、す、すみません・・・」

「ま、いいけどよ」

「それにしても、女の人の買い物って結構すごいんですね」

ベンチでドロテアさんたちが買った荷物を置いているが、かなり多い。

特にコハルさんとコスミナさんの服の量が多い気がする・・・アオイさんはほとんど無いなあ・・・

「あいつらなんでもかんでも買うからな。つと、噂をすればなんとやらだな」

どうやら目の前の店での買い物が終わったらしい。コハルさんが嬉しそうにこちらに駆け寄ってきて紙袋の中から2着ほど服を出してきた。

「ねえねえ、タツミ君！」

「はい、なんですかコハルさん」

「こっちのワンピースと、こっちのブラウスさ・・・どっちも買ったけど、どっちが似合うと思う？」

・・・どっちが似合う、かあ・・・

「いやその、俺そういうの詳しくないですし・・・」

「えー、タツミ君の好みでいいんだよ？ほかの人の意見も聞いてみたいの！」

意見が聞きたいのか。じゃあ、ちゃんと選んだほうがいいよな。

・・・でも、どっちも似合いそうだとは思うし・・・こういう時ってどう答えたらいいんだろうか。

俺が返答に困っていると、エンシンさんが呆れた表情を浮かべつつコハルさんへ声を

かけた。

「貧相な体なんだから、どつちを着たところで色気がねえことに変わりはないだろ」

「バカ兄貴には聞いてない！そんな乳首丸出しのクソダサファッションのアンタにファッションセンスなんてなくせに！」

「うるせえな貧乳。その腹回りと太ももの肉を少しでも胸に回せよ。あ、胸の肉が腹に回ってんのかもな。お前帝都に来てから少し太っただろ。二の腕たぶたぶじゃねえか。どうした？家畜として出荷でもされんのか？」

「おうコラやんのかアアアツツ!!」

・・・うーん、エンシンさんもコハルさんも、こういう言い合いがなければ比較的付き合いやすいんだけどなあ。

「まったく、往來でやかましいやつらじゃな」

「いつものことだ」

「ふふつ、エンシンちゃんとコハルちゃんは今日も仲良しさんですねー」

仲良しとはなんなのか、本当にツツコミを入れたい。

そんな騒ぎもあつたものの、なんとか詰所に戻つてきた。女性陣はさつそく買い物したものを自室へ運んでいた。

まだ少し夕飯を作るには早いから鍛錬でもしようかな。

「おい、新入り」

「なんですか、エンシンさん」

「・・・お前、コハルには手え出すなよ」

「ええっ?!手を出すなつて、そんな滅相もないですー!」

びつくりした。いきなり何を言ひ出すんだこの人は!

「・・・あのく、コハルさんにはその、そういうのなひです。というか、俺、まだ慣れてなひしそんな余裕なひですよ」

「おう、そうかそうか。ならいいぜ」

「その・・・なんでそんなことを?」

「ああん?そりゃあ、実の妹に愛な虫がついたら困るからに決まつてるだろ。ただでさえ馬鹿で騙されやすひんだからよ」

うーん、コハルさんも帝具使ひなんだから大丈夫なんぢやなひだらうか。

というか、あんなやり取りをしてるのに・・・

「・・・心配してるんですか?」

「当たり前だろ」

否定されるかと思ったら、即答で答えられた。

「・・・」

「んだよ、何かおかしいのか?」

「・・・なんというか、あんなやりとりを毎度毎度してるから仲が悪いのかと思つてたけど、普通に兄妹なんだな。」

俺には兄弟がないし、イエヤスやサヨもそうだったからよくわからないけど・・・
そもそもエンシンさんもコハルさんも、ワイルドハントの中ではかなり経歴が荒れている人たちだ。

南方でちよつと有名な海賊だったらしいし。あんな喧嘩とか、噂とか、そういうので怖いとか悪い人のイメージがあつた。

けれど、それだけでもないんだな。

「あー、その。海賊してたとか色々聞いてたので。案外人間らしいなあって」

「お前なあ、犯罪者でも人間なんだからな。家族とか惚れた奴に情を持つぐらいするぞ?別の生き物か何かと思つてたのかよ」

「すみません・・・」

「・・・人を殺してる奴が子煩悩とかぎらにあるしな。他人を自分が見てる範囲だけで判

断すると騙されるぞ」

大きいため息を吐いてエンシンさんが俺の額を指で弾いた。

「痛ッ！」

「……本当はてめえだけじゃなくて、シユラの奴にも言わないといけねえんだけどな」
「え……？」

「お前は田舎者だから騙されやすいんだろうが、あいつはイトコの坊ちゃん、親父がお偉いさんだからな。」

「……」

「つつても、そのあたりはあいつの兄貴が再々言ってるからいいかもしれないけどよ」

「……シユラさんのことも心配してるんですか？」

「そりゃあ、つるんでる仲間だからな」

……海賊だし柄も悪いけど、それだけじゃないんだな

俺ももつと、人柄を見てから判断しなきゃいけないな。

「いつの間にか、当たり前」

ワイルドハントで試用されることになってから、俺は自主的に食事の準備を手伝うことにした。

これが兵士での起用だったりしたらこんなことはしなかったんだろうけどな。

でも、このワイルドハントでどれだけ自分が良い人材かをリンネさんにわかってもらうためには必要なことだ。

「毎日ありがとうございます」

「いえ、これぐらいはできますよ」

今日も食事を担当しているオリヴァーさんの料理の手伝いだ。

彼の作る料理は一般向けの料理が多くて助かった……見た目が貴族に仕えてる執事っぽいから、こう、小難しい料理ばかりかと思っただけ……

「それにしても、いつもオリヴァーさんが料理を作ってるんですね」

「ええ、いつもドロテア様にお作りしていたのですが、シユラ様が気に入ってくださったので……」

「へえ、確かにオリヴァーさんの飯って美味しいからなあ。シェフとか、料理人みたいな職業だったのか？」

「いえ、ドロテア様に拾われただけの・・・何も無かった、ただの人間です」

そう答えて苦笑いをするオリヴァーさんに俺は曖昧に返事をするしかなかった。

エリオットさんと違って、オリヴァーさんとドロテアさんはあまり自分のことを話さないよなあ・・・

「あの、昔何かあつたんですか？」

「・・・ええまあ。ただ、ドロテア様に拾われてから自分の視野の狭さに気が付いたといえますか・・・」

「視野の狭さ？」

「要するに、自分の世界が広がったんですよ。恩人みたいなものです」

恩人、かあ・・・

ドロテアさん、いつも飄々としてるけど、良いところもあるってことだな。

そうこうして夕食の時間帯になった。

案外、この組織は食事は一緒に食べるらしいが、シユラさんとリンネさんは宮殿に出

入りしていることもあるからか、いないことも多い

・ ・ ・ というか、リンネさんはまず見たことがない

「うーん、相変わらずオリヴァーの料理はとっても美味しいわね！いくらでも食べれちゃう！」

コハルさんはスレンダーに見えて、結構大食いらしい。

いつもごはんも2、3杯はおかわりして食べている。

「そんなにバカスカ食うなよ。年中冬支度してる熊かなんかかお前」

エンシンさんがコハルさんに皮肉を言いつつも、コハルさんと同じぐらいご飯を食べている。

二人とも海賊出身だったからか、見回りでもよく動くし、よく鍛錬もしているからおなかも減るんだろうな・ ・ ・

「つーかよ、野郎に飯作ってもらうとか恥ずかしくねえのかよ。こういうのは女がやるもんだろ」

「お前なあ、無理にやらせるこたあねえだろう。美味しい飯ならいいだろ、それで」

エリオットさんは女性陣に文句を言いながら、さりげなく嫌いな食べ物を皿の端に寄せたりしている。

案外好き嫌が多いんだよなあ・・・実はオリヴァーさんがどうやって食べてもらえるか考えてるの、気が付いてないよなあ・・・

いやでも、エリオットさんもチャンプさんもよく食べてくれるから作り甲斐があるけれども。

「イズウ、これは美味しかったぞ」

「ああ、ただくとしよう」

アオイさん・・・は、なんというか、これでイズウさんの奥さんとか恋人なんだろうか・・・？

いやそれよりも、イズウさんのごはんは普通なだけ・・・

「しかしアオイ殿、いつも同じご飯で飽きないのか？」

・・・アオイさんの白飯の上にはたつぷりの小豆餡が乗せられている。

おはぎを作ったつもりはないんだけど、アオイさんはなぜかいるも白飯の上に餡子を載せてセルフおはぎで食べてるんだよなあ・・・

ツツコミできなくてしてないし、それに関してはコハルさんたちも視線を逸らしてるけど

「ああ、おはぎと同じで餡子とご飯の組み合わせは最高だぞ。これで栗きんとんもあれ

「ばいばいのだが……」

「それはもうご飯とかおやつなのでは？」

「アオイ殿は甘党だな。そういえば先日、見回りで美味しいあんみつ屋を見つけた。一緒に行かないか？」

「!!……いつ、いいのか……?」

「かまわないが。いつもアオイ殿には世話になっているからな」

「それじゃあ行く!ふっ、ふ……二人で、だよな?」

「?ああ、二人だが」

「……ああ、そうか」

「アオイさん、こころなしかニヤけてるな……」

「というか、この二人って恋人とか夫婦じゃないって聞いたんだよな。でも、アオイさんの様子を見たら、アオイさんはイズウさんが好きなのかな?」

「今日もご飯が美味しいですね、セシルちゃん!」

「そうだね。オリヴァーさんもそうだけど、タツミ君のごはんも美味しいよ」

「コスミナさんとセシルさんに話しかけられ、「ありがとうございます」と礼を言った。

「タツミちゃん、お料理もできて戦えるし、何よりかわいいですよね!」

そういいながらコスミナさんに抱きつかれる。

う、腕に・・・胸の感触が・・・

「あ、あの、その、コスミナさん・・・」

「もー、せつかくコスミナちゃんがお胸を当ててるのにつれないのはだめですよ?」

「姉さん、タツミ君が困ってるよ」

セシルさんが止めてくれたけど、コスミナさんはよくスキンシップをしてくるから心臓に悪いというか、いや、その・・・悪い気はしないけどさ

少しづつ俺も慣れてきたけど、まだまだこれからだ。

リンネさんに正規メンバーとして認めてもらわないとな!

「アオイのことどう思ってるんだ？」

「はあっツ！」

「……！」

「っ、うつへえ……すごいですね、イゾウさん」

今日は帝都にある宮殿内、その中庭でイゾウさんに稽古をつけてもらっている。

ドロテアさんが特殊警察イエーガーズの人と合同で研究をしているとかなんとかで、その手伝いやらなんやらでやってきた” ついで” だ。

「拙者の太刀筋は人斬りのそれだからな」

「人斬り、かあ……」

「タツミ殿の太刀筋は軍式剣術と見たが……田舎の出身なのだろう？」

「ああ、村に軍を退役した人がいてですね……その人に色々教えていただきました」

「なるほど。対人にも向いているから良いだろう」

「そうですね……と、言っても危険種を狩るのが基本だったので、まだ対人は試合形式しかしたことがなくて……」

懐かしいな・・・あの人スパルタだったからなあ

剣術も鍛治も、ある程度料理も教えてもらったわけだし。感謝はしてる・・・もちろん。

「実戦経験が少ない、と・・・ふむ。リンネ殿に進言して盗賊狩りか何かの依頼か調査が無いか聞いてみよう」

「ありがとうございます」

・・・それにしても

それにしても、なんというか、イゾウさんは確かに太刀筋はすごいが、この人って人斬りとか言われてるし・・・

何より本人が自称してるし

「あ、あの・・・イゾウさんはなんで人斬りって自称したり、そう言われてるんですか？」

「この国に来る前は、拙者は辻斬りをしていたからな」

・・・辻斬り？

・・・辻斬り・・・

・・・えっ？

「辻斬りイ!？」

「ああ、辻斬りだ。シユラ殿に誘われてこの組織に入ってからには依頼された件しかこなしておらぬから安心していい」

安心できないから!!

え、待つて本当にまじか。シユラさん、チャンプさんといいエンシンさんといい、なんでこうも癖のある人ばかりスカウトしてるんだ!?!?!?

「大事な江雪への食事という意味合いもあるが・・・もともと人を斬るのは好きでござる」
余計にダメだろ!!!

「へ、へえ・・・」

「戦つて死ぬならば本望だが・・・拙者に何かあつたら、アオイ殿は頼むぞ」

「え?アオイ・・・さんですか?」

「ああ」

アオイさんのことか・・・

「あの、アオイさんも刀を使つてますよね?普通に戦えそうなんですけど・・・」

「アオイ殿はただの刀工だ。殺すことも守ることも、拙者たちの中では苦手としている」

そこまで言うとうと、イゾウさんは黙つたままになつてしまふ。

アオイさんのことを心配してるんだよな……?」

「あ、あの……アオイさんと付き合ってたりますんですか?」

「……恋仲ではないな。あくまでもアオイ殿は刀工として尊敬はしているが……」

「すみません!なんか、その……」

俺が急いで謝るが、イゾウさんは気にしていないようだ。

気にしていないとか、慣れているみたいが正しいかもしれない。

「……アオイ殿は他人に認められることに飢えている。拙者に刀工として認めてもらえたことで依存しているのだろう」

「依存ってそんな……」

「アオイ殿がこのままワイルドハントの一員として、世の人々に認められれば……拙者から離れるはずだ」

「……」

なんというか、なんだろうか

そういうのって寂しいような気がする。だってあんなにアオイさんが懐いているわけだし、イゾウさんだって意外と面倒見いいのにな。

「人を斬る喜びを知っている拙者が戦場以外で死ぬるとは思っていない」

そこまで言うか!!!

あつ、いやでもこれツツコミ入れれないな。

・・・エンシンさんもチャンプさんもアウトローなほうだけど、イズウさんのアウトローっぷりは凄まじい

「・・・・・・・・本当にアオイ殿が拙者を恋い慕っているならば、なおさらその気持ちに相應るわけにはいかない」

「な・・・・・・・・なんでですか！それは、その、アオイさんが可哀想ですよ」

「戦いの場で死ぬことが本望だと思っている拙者が、女一人を幸せにできるわけがないだろう」

そこまで言われてしまうと、俺としては何も言えなくなる。

あんなにもアオイさんが慕っているのに、分かっただけで応えないのは・・・

いや、でもイズウさんの言葉はこう・・・アオイさんが嫌いではないっていうのは、俺にでもわかる。

だからこそ、なんといいかもしどかしいというか、モヤモヤすると言えはいいだろうか。俺の中で、ちゃんと説得できる言葉が浮かばないのだ。

「……覚えておくといい。理由はどうあれ、人を殺す人間が楽に生きれる世ではないぞ？」

そう答えて、先にイゾウさんはドロテアさんがいる研究室のほうへと先に行ってしまった。

俺だって、兵士起用を目標に帝都にやってきた。

人を殺すことだって覚悟はしていたし、今も自分を守って、故郷へ仕送りするために頑張ろうと思っている。

……だけど、イゾウさんの言葉がなぜか頭の中で反芻されてしまう。

好きで人を斬っていたイゾウさんが、なぜそんなことを俺に言ったのだろうか？

そりゃあ帝国に来る前はそうだったかもだけど、今は違う。今は、正しいことのために刀を振るっているのに

……人並みに幸せになっただけとはいけないのだろうか

「姉想いの良い人じゃないか」

俺の今日の仕事はセシルさんの手伝いだ。

セシルさんは包帯を巻いてて怪我人にも見えるけど、セシルさんはワイルドハントの中でも熱心に仕事をしている人である。

いや、ほかの人が仕事してないって意味合いではないけど……番外回りをして、帝都の人たちに関わってるのだ。

仕事っていうか……見回りとか調査よりも、もつと一般人からの依頼に応えている便利屋係みたいなことをしている。

その影響か、ワイルドハントの中で帝都の人たちに一番顔を知られているようだ。

そんなこんなで俺はセシルさんと共に帝都の地下水道へとやってきた。

「タツミ君、耳をふさいでくださいね」

「はいっ！」

俺が耳あてで耳をふさぐのを確認すると、セシルさんが持っていたギター型の楽器を

鳴らした。そうすると、地下水道をねぐらにしていたであろう鼠が大量に現れた。

小さいものがたくさんいると気持ち悪く感じるというが、それは確かのような。これは俺でも怖いと感じる。

どうやら音を鳴らす作業が終わったらしい。セシルさんが俺の肩を軽く叩いた。

「タツミ君、いいですよ」

「あつ、はい」

「これで支配下に置いたので、あとは帝都の外まで連れて行くだけです。それでは歩きましょうか」

「はい！．．．それにしても、セシルさんのその、帝具つてやつはすごいですね」

セシルさんの帝具【天空響鳴スカイハイ】

変わった形のギター型の帝具で、音が聞こえる生物ならば催眠できるらしい。

「そうだね。でも、僕のは距離が離れると効果が薄くなっちゃうし、生物によつて催眠出来る音が違うんだ。そもそも、音が聞こえない状態だと効果もないしね」

「それは癖がありますね。あんまり戦闘向きじゃないっていうか．．．」

「うん、だから僕は戦闘には出たことが無いんだ。戦闘になるとお荷物になっちゃうからね」

「お荷物つて．．．でも、こうやって人のためになつてるじゃないですか！」

何も戦うことばかりが人のためになるわけじゃないはずだ。

こうやってみんなから頼まれごとをされるのだって、良いことのはずだし・・・もつと自信を持つてもいいんじゃないだろうか？

「ありがとう。でも、僕のは・・・僕のは、姉さんたちが悪く思われたりしないためにしてることだから」

「え？コスミナさんたち・・・ですか？」

「普段から良いことをして信用されないと、いざ正論を言っても誰も味方をしてくれないからね」

その言葉が、やけに響いて聞こえた

無事に鼠たちを帝都の外へと追いやることができただけ、セシルさんの定期検診に付き合うことになった。

定期検診はイエーガーズ所属の人間が見てくれていたらしい。どうやらシユラさんの知り合いらしいけれど・・・

「あらあ、セシルったら彼氏でも連れてきたの？」

開口一番にセシルさんと恋人扱いされるとは思ってたなかった。

男同士なんだけど、なぜそう思った!? あつ、いやあれか、オカマか! オカマだからか

!!

「違います!!!」

「えっと、彼はワイルドハントで試験雇用してるタツミ君です」

「あら、噂の新人研修の子? かわいい子ねえ、ちよつと田舎臭いけど」

「えっと、このオカ・・・この先生が、イエーガーズの?」

「はい、Dr. スタイリツシユです」

・・・まさかこんなに濃い人間とは思わなかった。

本当にシユラさんはどうしてこう、人間性が濃い相手ばかりと知り合いになったり、

仲間にしたりするのだろうか・・・

「スタイリツシユ先生、お願いします」

「はいはいつと・・・火傷の傷、全部消さないの? アタシならやれるわよ? こんな検診も

しなくてよくなるし」

「いいんです。これは・・・戒め、ですから」

「せっかくなにかわいいのもつたないわねえ」

二人の会話を聞きながら、俺はセシルさんの火傷の傷を少し離れた場所で眺めた。

セシルさんとコスミナさんは故郷で色々あったらしい。

詳しいことは・・・エリオットさんみたいに話してくれないのでわからないが、あまりよくないことなのは俺でもわかった。

「ドクター、失礼します！少し早いですですがメンテナンスに来ました！」

元氣そうな女性の声が聞こえたのでそちらを向くと、ポニーテール姿の女性と、中性的な男性の姿があった。

男性のほうは確か・・・エリオットさんがよく一緒にいるイエーガーズの人、だっけか。

「あら、セリユー、早いわね」

「はい！今日はランと一緒に・・・・・・ワイルドハントの人、ですか」

女性はセシルさんを見ると、少し渋い顔をして、目を逸らした。

「セリユーさん、セシルさんに失礼ですよ」

「でも、ワイルドハントは悪人が多いです。ランのように、私は割り切れません」

・・・気持ちは分からなくはない。そういう経歴の人たちだし、今もそういう傾向は

あるし。

でもまあ、ちゃんと付き合えば良いところもあるんだけどなあ

「・・・ドクター、そちらは？」

「そつちが噂の試験雇用の子だつて」

部屋に入ってきた二人の視線が、ドクターから俺に向けられた。

「イエーガーズ所属、セリユー・ユビキタスです」

「ランです。貴方は確か・・・」

「あつ、あの、ワイルドハントに試験雇用されてるタツミです！故郷への仕送りのために頑張ってます！」

元気よく挨拶をすると、女性のほうは少し笑顔になつてくれたようだ。

よしっ！よその組織の人でも好感を持つてくれれば、ちゃんと帝都で働けるかもしれないわけだし・・・

「タツミ君、そろそろ行きましよう。その、先に・・・出ますね」

セシルさんに声を掛けられた。セシルさんは少し、居心地が悪そうだ。セリユーさんとランさんに会釈をして部屋から出てしまった。

・・・うーん、もしかしてこのセリユーさんという人が苦手なんだろうか？

「あつ、は、はい。えっと、イエーガーズの皆さんも、その、よろしくお願いしますね！」

そういつて、
すぐに俺もセシルさんの後を追っていった。

「本当に正義を為すなら」

今日はリンネさんの書類整理を手伝うことになった。

シユラさんが俺の試験雇用が決まっただけで頼んでいたらしいが、リンネさんは断っていたらしい。元々、シユラさんはリンネさんの雑務負担を軽減するために俺に声をかけてくれたし、当然のことではある。

俺も雇ってくれるところがあるなら一生懸命頑張ったからな。

リンネさんの執務室には大量の書類に事件資料が積み重ねられていて、部屋の壁を覆うほどの本棚に本やら巻物が収納されている。

圧巻、としか言いようがない。これは全部ワイルドハント設立と運営のための資料やらなんやららしい。

「・・・やるなら雑務だけだ。重要書類は俺が処理する」

「わかりました！」

「兄貴、俺も手伝うぜ！」

「てめえはさっさと詰所で見回りしてこい。悪事を働いたと連絡があれば即座に俺が首を落としてやる」

リンネさんはどうしてこうもシユラさんに厳しいんだ……!

「で、でも、ワイルドハント設立してから一日も休んでないだろ、兄貴……」

「俺が休めば他の隊員がいつ帝都で悪事を働くか分からない以上は休めるわけだないだろう」

休んで!! 設立してからってことは2か月間もこの人休みなしかよ! 休もう?!

あつ、よく見れば目の下にくまがあるし、栄養剤が机の上にくいつもある。携帯食料がそこらに……ってことはこの人、ろくな食事もしてないのかよ!!!

「あ、あのリンネさん。食事とかキッチンととったほうがいいですよ……それに、睡眠とか、そういうのも大事ですよ」

「3時間は寝てる。充分だ。寝ている間にうちのバカ共が不祥事を起こすかもしれないし、起こした連絡があれば即座に殺さないといけないからな」

充分じゃねえから! 危ないからそれ!

っていうか、どんだけ自分の隊員に信用おいてないんだよ!!

……と、ひと悶着あつたが、なんとか俺とシユラさんが書類整理を手伝うことになった。

事件の一つ一つをリンネさんが依頼している情報屋や子飼いの部下が調べているら

しく、証言から証拠から何まで、時間を掛けているらしい。

相手が貴族とか役人とか、逮捕するのが難しい相手ばかり・・・っばい

俺はこういう書類とかやったことがないから、四苦八苦しながらゆつくりとやっている。

さて、俺はともかくシユラさんとリンネさんは・・・

「兄貴、それでこの間エンシンと遊郭街に・・・」

「黙れ」

「そういえばドロテアが親父と蟹食べてたから俺も一緒に」

「黙れ」

「・・・あつ、そうそうこの間イエーガーズの、ヘカトンケイル連れた女がいちやもんつけてきて」

「黙って仕事しろ、口を縫合してやろうか」

対応きつついなく・・・!!

もうなんか、聞いてみているこつちが辛くなるほどにリンネさんのシユラさんへのあたりがきつい。

なまじシユラさんが世間話しようと話しかけているのが本当に辛い。リンネさんになんかしたことでもあるのか・・・

「リンネさん、シユラさんの話ぐらい付き合いましたよ。仕事も大事ですけど、息抜きも必要ですし」

「そうだけ兄貴……その、病気でぶっ倒れて死にかけたことあるだろ？」
病気で死にかけたことあるのかよ!?

「……あの時のことは覚えてない。流行り病で、死亡率の高い病気だったからな」
「それで俺が……て、帝具使ったら治ったんだぜ。治ったつーか、時間を巻き戻したというか。それがきつかけで、兄貴がその【時間逆行メフィストフェレス】の持ち主になつてよ」

そんなことがあつたのか……でも、帝具つてあれだよな。エンシンさんたちが持つてる奴みたいなの……

「時間を巻き戻す帝具、ですか……なんかすごいですね」

「……」

「……あ、ああ！そうだろ！」

リンネさんは何故か苦々しい顔つきになったが、シユラさんはシユラさんで……なぜかいつもと違うような気がする。

何が違うのかと言われたらわからないけど……うーん。まあ、昔の話だからかな？
リンネさんもシユラさんも、何かよそよそしいというか、なんか二人ともあまり良い

表情はしてない気がするし、これって俺が話題変えたほうがいいかな？

「それにしても普通は摘発できない悪人を摘発するつて、かつこいいですよね！リンネさんは正義の味方みたいな人だと思うんです」

「兄貴が・・・？」

「なんだかんだでワイルドハントの皆さんにも潔癖なところありますし、悪い奴は許せないって感じで・・・」

「それはそうだな。兄貴、昔から潔癖っつーか、くそ真面目というか」

昔からこの性格なのかリンネさん・・・いや、悪いことではないけど。なんとというかすごい人だなあ・・・

俺がそう思っていると、リンネさんが俺のほうへと視線を向けた。

「タツミ、質問がある」

「は、はいっ！なんですか？」

「誰からも頼まれてもいない、誰にも感謝されない、誰にも認知されない。けれど確実にその悪人を殺せば正義が為せる・・・お前は思う？」

・・・難しい質問だ。

頼まれても感謝されなくても、悪いやつは倒したほうがいいけど・・・なんか、引つかかる言い方なんだよな。そうだな、俺がどう思うか、か・・・

「．．．前の俺なら、殺してもいいって選ぶかもしれないけど．．．」

「それは．．．正しいことかもしれませんが、良いことではないと思います。」

「．．．．．．」

「あ、あの」

「いいから、続けろ」

「はい！．．．えっと、そりゃあ悪いやつって許せませんし、本当に倒して平和になるならいいけど．．．でもなんというか、殺して正義を為すっていうのは、今の俺にはしつくりこなくて」

「．．．」

「ほんとに正義っていうなら、その悪人を説得したり、和解しようと努力するのが先じゃないかなあって．．．」

「．．．．．．そうか」

「こ、これってなんの質問だったんだ？もしかして採用の是非に関わるやつとかだったんじゃない．．．」

「．．．．．．そろそろ休憩にしようぜ！な？」

シユラさんがすぐに立ち上がって、お茶の準備のために席を外した。

「．．．．．うーん、ワイルドハントにも慣れてきたけど、リンネさんとシユラさん

のこの距離感というか、何かあった感じがすごい気になるなあ・・・

「仲が良いのか悪いのか、俺にはわからない」

昼飯は俺が簡単に作って、その場で食べられるものにした。シユラさんからは好評だったし、リンネさんも「・・・うまい」と一言だけ褒めてくれた。

よっしや！とりあえずこれでアピールはできたよな?!

午前中はなんだか変な空気になったが、午後からもリンネさんとシユラさんと一緒に書類整理だ。1日じや整理できそうにないし、数日間ぐらいは俺も頑張りたいな・・・
本当に採用されたら、こういう仕事も増えるだろうし。何事も経験だ。

「それにしても綿密に調べるんですね。こういうのってトップの人がやる仕事じゃない気がするんですけれど・・・」

「そうだけ、兄貴も俺とかドロテアに任せてくれたらいいだろ?」

「大事な書類を愚弟どもに任せられるか。いつ改竄して誤魔化すか分からないからな」
「え・・・」

「そつ、そんなことするわけないだろ!」

「あの父親に命令されたらいくらでも折れるだろうが。100回ぐらい溺死して出直し

ていつ」

「そ、そんなことないですよね？」

「………。そつ、それは無いな。親父に言われてもやらない」

「返事が遅い。どもるな。自分でもやりかねないと思っっているんだろう？ 悪いことは言わないから、今すぐに窓から飛び降りろ。」

信用無いつてレベルじゃないな。リンネさん、真面目というか疑心暗鬼がすごい激しい人なんじゃないかこれ……

……まあ、シユラさんも歯切れが悪かったしな。

………。二人の父親つて大臣らしいけど、そんなに悪人なんだろうか……。いやいや!! 国の重要な立ち位置にいる人だぞ？ 偉い人だし、きつと悪い人じゃない……。そうじゃないと信じたい。

そもそも、リンネさんからシユラさんへの信用が無い。あんまりにも酷い……。何か失敗でもやらかしたことでもあるんだろうか。

「あ、あのー……シユラさんつて、なんか悪いことしたことがあるんですか？」

「な、なんだよいきなり！ そんな質問しやがつて！」

「………。今のところはまったくない」

えっ？ 無いのか？

「……無いのに、リンネさんはこんなにシユラさんが悪いことをするって思ってるのか……?」

「……今のところは、ですか……」

「うっ……あ、兄貴がいるのにできるわけねえだろ」

「……ほお?俺がいないとやるということか」

リンネさんにそう言われて、シユラさんも何か言い返したり弁明するのかと思つたら、なぜか押し黙ってしまった。なんとというか表情もバツが悪いっていうよりは、何か隠している感じっていうか……

変な沈黙が部屋の空気を支配して、俺も迂闊に発言できない。

「……いや、ここは俺が何か言わないといけない。

ここ数時間だけでもわかるが、この二人の会話にはクツシヨン材が無いといけない。俺だけで対処したくないのが本音だ……コハルさんとかドロテアさんとか!誰かほんと来てほしい!

そのぐらいいはこの二人の仲は相当に複雑だ。

「あのっ、なんとというか二人とも双子、なんですよ?兄弟姉妹とか、双子ってそういう人がワイルドハントに多くて……意外というかなんというか」

「……おう。そうだな。ワケありな奴らが多いしよ」

「・・・それがどうかしたのか？」

「セシルさんとか・・・なんか、羨ましいかなって。俺、兄弟とか姉妹とかいなくて・・・コスミナさんとセシルさんとか、とつても仲が良いですし」

「んだよ、俺と兄貴だつて仲が良いだろ？」

「お前の目は節穴か？ いや、ただの馬鹿だつたな。あまりの馬鹿さ加減に頭痛がしてきた。首くくつて俺に詫びろ」

リンネさんが相変わらず手厳しいし、シユラさんもシユラさんで兄弟仲についての認識がガバガバなんじゃないかこれ。

でもなんというか、これはこれで仲が良い・・・のかもしれない。

エンシンさんとコハルさんのところも言い合いしてるけど、エンシンさんはコハルさんを心配してるところもあるのだ。

お互いに対して素直になれない、ということなんだろう。

リンネさんとシユラさんもきつと・・・あ、違うな。

リンネさんがシユラさんに対して、素直じゃないというか・・・何かを抱えているのかもしれない。

シユラさんは基本的に兄に対してはものすごく寛容的だけど、なんだろうか・・・

・・・リンネさんに対して、引け目がある・・・感じがする

あくまでも俺が見て、なんとなく感じたただけだ

もしかしたら違うかもしれない。けど・・・

「なんだよ、兄貴だつて俺と組手するし、時々飯も一緒に食うだろ？」

「組手は必要だからだ。食事は必要な場合だけにしてる」

「ガキの頃はちよつとぐらいいは遊んでくれたじゃねーか。それにほら、俺だつて兄貴と一緒に本とか読んだんだぜ」

「・・・顔に大怪我した相手を無下にすればブドー大將軍がうるさかったからだ。あと、読書はお前が勝手に俺の隣で読んでただけだ」

「す、少しぐらいいは仲が良いとか思つてないのか？生まれてから一緒にいる双子なんだぜっ」

「・・・・・・・・思つてない」

・・・・・・・・何かを確かめてるような感じがする。

この二人の謎は深まるばかりだが、もう少しリンネさんがシユラさんに仲良くしてくれたいなあ

「オリヴァーさんがふわふわしてる」

今日から何日かはドロテアさんの実験場での手伝いをする事になった。

いつもお手伝いをしているオリヴァーさんが、リンネさんの頼みで少しばかり詰所や研究所に戻る暇がないらしい。オリヴァーさんも仕事熱心な人で、帝都での情報屋代わりに動いたり、監視の仕事もこなしているそう。

だからこそ、今回は試験雇用されている俺が、オリヴァーさんの代わりにドロテアさんのお手伝いをする事になったのだ。

ドロテアさんとは会話したことがあるものの、彼女は宮殿で研究所まで作ってもらっているせい、あまり詰所よりも研究所に入り浸っている。

西の国からやってきた錬金術師？ って奴らしいが・・・具体的になにをどうやっていいのか知らないんだよな。そもそも錬金術ってというのが良く分からない。一体何なんだろうか・・・

・・・ええい！ 本人から教えてもらって、交流を深めればいい話だ！

帝国の宮殿敷地内、研究所まで侍女の人に案内してもらった。侍女の女性は父親が皇帝陛下の教育係を勤めているとかなんとかで、宮殿の中ではある程度信頼されているそうだ。

「宮殿内は決して一人で出歩かないように。ワイルドハントの見習いとはいえ、見慣れない方にすぐに絡まれる將軍や兵士の方々もいますし、不審者と勘違いされると牢獄送りになりますから」

「分かりました、肝に銘じておきます」

「そういや、リンネさんやシユラさんたちも注意してたなあ」

一人で歩き回るのは今まで無かったけど、これ以上に気を付けよう。さすがに牢獄に入るのは勘弁したいところだ。

「でも、やっぱ宮殿内もどっかピリピリしたところがあるよな」

「・・・前々から感じてたけど、帝国のお偉いさんたちって相当問題がありそうだ。」

だからと言って、今の俺がどうこうできるわけじゃないけれどさ。ただ、闇雲に訴えかけても聞いてもらえそうにないことだけは分かる。

とにかく今は、俺にできることをやって、故郷の仕送りをするのが先決だ。

「今日から数日の間、ドロテア様をお願いしますね」

研究所でドロテアさんとオリヴァーさんと合流すると、オリヴァーさんに深々と頭を下げられて頼まれた。なんとというか丁寧に対応されるとちよつと照れるなあ。

「はい！どんと任せてください！」

「ふふ、やつぱり頼りになりますね、タツミ君は」

「やつぱり……？」

「あつ……いえ、なんでも」

オリヴァーさんに「やつぱり」頼りになると言われて、ちよつと嬉しくなった。本人はちよつと誤魔化そうとしているのが気になるけど……試験雇用の身の上だから必要以上で褒めたらダメってことか？

「それではドロテア様、数日間はタツミ君に任せますね」

「うむ。妾もこやつには興味があつたからな」

そんな会話を交わし、オリヴァーさんが首に着けている首輪に触れて帝具の力を解放させた。真つ黒な煙に包まれていくオリヴァーさんの姿が、人の形から獣へと変わっていく。

煙が無くなると、彼の姿は狼のような獣姿になっていた。黒い毛並みが印象的で瞳も深紅のように真つ赤になっている。

「おおおお!!かっこいいです！それも帝具ですか!？」

「ええ、帝具『餓狼変化フェンリル』の能力です」

「いつみてもいいものじゃなあ」

毛並みも艶やかだが、触るとふわっふわしている。普段は大きくて生きている獣に触れる機会は無いし、そもそもそんな獣は危険種ばかりだ。

「本当にすごいですね、帝具って！」

「ふふふ、そうじゃろう？オリヴァーの帝具は特に毛並みもふわふわで妾も気に入って
おるんじゃ」

獣姿になったオリヴァーさんを触ると、確かに手触りが良い。野生の危険種だと泥と
かついてただろうけど、あくまで帝具で姿を変えたオリヴァーさんだからだろう。

・・・そういえばこれって服とかどうなってるんだらうか？

破けたわけでもないみたいだし、でも服は見当たらないし・・・

「あの、オリヴァーさんにドロテアさん、オリヴァーさんの服ってどうなってるんですか
？」

「すみません、わかりません」

「妾も良く分らない」

「分からないのに使ってるんですか!？」

なんかそれ怖くないか!?

「帝具は基本的にオーパーツじゃからなあ」

「お、おーぱーつ・・・、ですか」

「大昔に作られたもので、しかも現代に残っておらぬ技術や素材が使われておるのじゃ。科学で解明できんこともあるぞ」

「へえ・・・」

そういやあ、リンネさんの帝具も時間を巻き戻すとかなんとかだったっけ

「ようするに考えるだけ時間の無駄じゃ」

ううん?!そこまで言うかな!?

・・・いやでも、深く考えてはいけないのかもしれない。そもそもそこまで考えるのは得意じゃないし、研究を本職にしているドロテアさんが言うのだからよっぽどなんだろう。

「とにかく行つてきますね」

「おお、そうじゃったな」

「それじゃあオリヴァーさん、お仕事頑張つてきてください」

オリヴァーさんを見送つたし・・・よし。どんなことを手伝うかは分からないが、精いっぱい頑張るしかない!

期待と不安を胸に、俺はドロテアさんの研究所の手伝い任務に挑むのだった・・・

「ドロテアさんは可愛いと思いますよ」

さて、オリヴァーさんをお見送りしたわけだが・・・これから俺は何を手伝えたいのだろうか。

「ドロテアさん！俺、頑張りますんで。なんでも言っってください！」

「おお、いい返事をするのう。威勢が良いな」

そう言いながらドロテアさんは研究所の中を紹介してくれた。

「妾は基本的に人間の若さや寿命を延ばせる研究をしておつてな。ただ、生物同士の合成なんかもやつておる。いわゆるホムンクルスというやつじゃ」

「合成つて・・・生き物を掛け合わせるつて、具体的にどうするんですか？」

「基本的には素体となる生物に違う生物を掛け合わせてな・・・このへんの仕組みは説明しても分からないじやろうから省略するぞ。まあ、錬金術はそういうこともできる」

「へえー、そつかあ」

生き物同士を掛け合わせるつて、なんかすごいな・・・

人間の不老長寿つてものを研究してるのは医者っぽい気がする。でも、生物を掛け合わせるつてというのは科学者な感じだな・・・

「ふふふ、大臣から支援を得たからのう。素材も十分じゃ」

「へえ、素材つて危険種とか・・・」

ドロテアさんに尋ねようとした俺は、大きなガラスの水槽に入った生き物に目が留まった。見たことがない生き物だが、人間のような姿かたちをしている。

まさかとは思うが・・・

「どうした？」

「あはは・・・」

「ああ、この研究素材か？囚人を使ったんじゃないが、Dr. スタイリツシュとの共同研究でのお」

「やっぱりか!!!」

嫌な予想が当たったじゃないか！人間使ってるって本当かよ!?

「なんて酷いことしてるんですか!」

「・・・まあ、そうじゃなあ。一般倫理からは外れておるの」

ものすごくあつさり返された。というか、答えを想定していた感じにもとれる。

「じゃがな、科学も医療も、下手をすれば食料の歴史も人間の犠牲は付き物じゃろ」

「そ、そんな・・・」

「毒のある食べ物がどう食べられるかとか、人体の仕組みなんかもそうじゃ。そもそも、妾

の研究の内容を大臣も支援しておる。人間を使っても良しと言われたんじゃないかな」

「……でも……」

普通は人間を使います！ っていうのは、反対するものだ。そもそもそんな提案されたら断るものじゃないか？

それで支援しているのだから……シユラさんやリンネさんの父親である大臣は、やっぱり良い人ではないんだな。

……税金が重いと思つてたし、街でも暗い顔をした人を見かけたことがある。やっぱり、国を運営している役人たちが腐つていてることなんだろうか。そんなの許せないけど、リンネさんみたいな人も頑張っているんだよな……

「お主もそんな顔をするでないわ」

「でも……」

……やっぱり、ワイルドハントにいる人は悪人だらけだとリンネさんが言っていた通りだ。でも、普通に話したりしている分には全然優しいんだよな……

「無理に理解せんでもかまわん。妾のような研究職は疎まれることも慣れておるしな」

「……」

「まあ、田舎から出てきたばかりの青臭い子供には刺激が強かつたみたいじゃからな？」

「こ、子供つて！子供扱いしないでくださいよ！」

そんなこんなで、ドロテアさんの仕事の手伝いをするようになった。

俺が任されたのは上層部へと出す研究レポートや報告書を種類ごとに分けることだ。どうやら支援してもらう代わりに研究内容や進捗状況を報告しなければいけないらしい。

イエーガーズ所属のDr. スタイリツシユさんとの共同研究もしているからか、この帝国でやっていた科学的な研究なども調べて自分の研究に生かそうとしているらしい。「なんとというか、書類が多いですね……」

「妾からすればこの国の技術には興味があるから仕方ないじやろう。妾の研究にも生かせそうじゃからな！」

「ああ、そういえば不老長寿の研究でしたっけ……」

不老長寿、か。

御伽噺では聞いたこともあるけれど、そういう研究を真面目にしているのは不思議な感じがする。

「……なんでドロテアさんは不老長寿の研究をしているんですか？」

「ん？そりゃあ、美しいままで長生きしたいからな！」

「ドロテアさん、美しいというよりは可愛いほうだと思いますけど・・・」

俺がそう訂正するとドロテアさんがこちらを見て数秒ぐらい固まっていた。

え、俺何か言ったかな・・・？

「・・・お主、存外たらしの才能があるの・・・」

「たらしってなんですか!？」

「それはともかく、妾は長生きしたくてのう。さすがに不老不死は無理じゃが、長生きできそうな方法を探っておる。」

「長生き、かあ。俺にはなんか想像しにくいなあ」

そもそも俺が年老いてからのことなんて考えたことなかった。せいぜい十年先ぐらいなら妄想しないこともないけどさ。

「ドロテアさん、すごく若いように見えるんですけど、年をとってからのことを考えてるんですね」

「・・・遠回しに皮肉に聞こえるのじゃが」

「え？」

「いや、お主は気にするな。いいな？」

ドロテアさんに念を押されたので、素直に「はい・・・」と頷くことしかできなかった。

「ウェイブに親近感を覚えたのはなぜだろう？」

ドロテアさんの研究棟での書類整理をしていたが、すでに昼時になった。書類整理つて案外時間が過ぎるもんだよな・・・ドロテアさんも欠伸をしながら俺に声を掛けてきてくれた。

「ふあく・・・ふむ、もう昼になったのう。そろそろ食堂に行くか？」

「・・・あのく、お昼ごはん・・・俺が作りましょうか？」

「おっ？良いのか？」

「はい！簡単なものなら作れます」

「それなら頼むか。ここから食堂が少し遠くてのう」

「任せてください！」

研究所の中に併設されてある給湯室を借りて、簡単な昼食を作ることにした。食パンとか卵があったし、サンドイッチにしてみた。野菜が無いけど、厨房じゃないから仕方ないよな。

卵サンドイッチとハムサンド、あとはピーナツバターサンドを作ってみた。このところ、料理をする機会が増えたから作れる範囲を増やしておいて良かったな・・・

・・・料理人になりたいわけじゃないが、喜んでもらえるなら上手になりたいし・・・
さきさきと作ってドロテアさんに出すとしても好評だった。

「うむ、美味しいな！しかし料理ができるとは・・・兵士志願じゃったろう？」

「そうなんですけど、できることは多いほうがいいって、剣術を覚えてくれた人が・・・」
「ほお、殊勝なことじゃな。女でも料理が出来ない奴もおるような時代じゃというのに」

ドロテアさんが指についた卵を舐めとりながら、「やれやれ」と続けて俺に言ってきた。

・・・ワイルドハントの女性隊員・・・コハルさんかコスミナさん、アオイさんあたりができないってことなのかな・・・

そう思っていると「こんにちはー」と声が聞こえてきた。

濃い青色系の上着を着た、俺より少し年上の男だ。隣には同じ年ぐらいの少女もいる。

「イエーガーズのウェイブです。ドクターから頼まれ・・・あっ・・・じゃなくて！Dr. スタイリツシユに頼まれてレポートを持ってきたんですけど・・・」

「・・・」

「おお、イエーガーズのか。すまなかつたのう」

どうやらやってきた二人は特殊警察イエーガーズの隊員の人らしい。スタイリッシュユさんと、セリユーさん、ランさんは少し挨拶したはずだが……

俺と同じ年ぐらいの人も働いてるんだな。この子も軍に所属してるのだろうか……？
「こつちがレポートです。あと、そつちのは……？給仕の人に見えませんですけど」

「あつ、あの、ワイルドハントで試験雇用させてもらってます！タツミです！」

「へー、試験雇用されてる奴つてお前か。俺はウェイブだ。帝国海軍からイエーガーズに入つたばつかなんだ。よろしくな！」

「よ、よろしくお願いします！ウェイブさん！」

「あはは、敬語とか使わなくていいぜ？試験雇用つっても、お互いに帝都の平和を守るための同僚みたいなもんだろ？」

「え、えつと……じゃあ、ウェイブ。よろしくな！」

「おう！」

ウェイブさん……じゃなくて、ウェイブの言葉が優しい。いや、ワイルドハントの人たちが優しくないわけじゃないけど、すごくとつきやすく……感動する……!!
それになんだか、親近感が湧いてくる。なんでかは分からないけど。

そう思っていると、視線を感じる。

どこからだ？と思っていると……

・・・黒服の少女が、じつとこちらを見つめていた。

「……」

「……あ、あの……」

そんなにじーっとみられるとなんだか気まずいというか、俺の顔に何かついてるのか!!? それともなんか俺に変なところがあるとか……?

「クロメ、どうしたんだよ」

「……美味しそう」

い。……どうやら目の前の女の子は俺が作ったサンドイッチが美味しそうに見えたらしい。

「おお、腹が減っておるなら食べるか? 妾はかまわんぞ」

「い、いいんですか……?」

「気にするな、イエーガーズの若いの。代わりならあるからな。お前も食べるといいぞ」

「ありがとうございます」

代わり? ……俺、おかわりは用意してなかったけど……? もしかしたら、お菓子とか持つてるのかもな。

ドロテアさんに勧められて、二人がサンドイッチを食べ始める。

「これ、美味しい」

「おー、これは美味しいな」

「ふふん、ここにいるタツミが妾のために作ったものでなあ」

「あはは、喜んでもらえたなら幸いです」

ウエイブとクロメの二人にもサンドイツチを御馳走した時に教えてもらったが、ウエイブとクロメも帝具使いということが分かった。

ウエイブは『修羅化身グランシヤリオ』、クロメは『死者行軍八房』という帝具らしい。

「へー、やっぱりイエーガーズの皆さんも帝具を持つてるんですね」

「ああ、そうだけ。セリユールが連れてた犬っぽいやついただろ？あれも帝具なんだぜ」

「・・・ランもドクターも、帝具を持つてるよ」

そういう話を聞くと、やっぱり帝国軍からの正規雇用以外だと・・・帝具を持つていたほうが良いようだ。イエーガーズもワイルドハントも帝具持ちで構成されてるし

(イゾウさんとアオイさんだけは違うけれど)

「俺も早く正規雇用して、帝具を持つてみたいなあ」

「おお、目標ができたみたいじゃな」

「頑張れよな。応援してるぜ！」

「・・・頑張ってみたらいいんじゃないかな。サンドイツチ美味しかったから、また作っ

てもらいたいし」

そんな感じで、なんとか昼は和やかに過ごすことができた。知り合いも増え、益々やる気が出てきた！

午後からもさっそく頑張らないと

ドロテアさんが口の中をあけて牙を見せてくる。口の中に取り付ける帝具もあるのか……いや、そうじゃない。なんでドロテアさんの帝具の説明が、俺の血液を吸うってことになるんだ?!

「相手に噛みついて血を飲む攻撃方法だな。怪我の治療や一時的な強化もできる優れものじゃ」

「……あの、それがなんで俺の血を吸うってことになるんですか? 攻撃方法なんですよ?」

「うむ、普通はの。ただ、血液にも味というものがあつてな……まあ、腹も満たせるし、どうせならお主のも吸ってみたいと思っただけじゃ」

「お断りします!!!」

なんでそうなるんだよ!? っていうか、噛みつかれるのはさすがに痛そうだから断るしかない。

「むう……意外とケチじゃな」

「ケチとかじゃなくて、それなら俺、別の料理作りますよ! 買い出しに行つても絶対に作ります!!」

「その必要は無いぞ」

俺がドロテアさんに直談判していたら、聞き覚えのある声が出た。

「おお、リンネとシユラか」

「リンネさんにシユラさん・・・」

「・・・来るつもりは無かったが、愚弟が引つ張つてきただけだ」

「んだよ、折角羅刹四鬼から土産もらったんだぜ？みんなで食べようと思つてな」

リンネさんとシユラさんが研究室にやつてきた理由。

・・・どうやら、大臣の警護をしている羅刹四鬼という人たちからお土産をもらつてきたらしい。それで、すぐに痛みそうなものだったから、宮殿に來ているワイルドハンドのメンバーで食べようということになったとか。

「ほお！これはロマンガニか。帝国における蟹じやろう？」

「そうそう、けつこう蟹みそが美味いんだよなあ」

「・・・タツミ、調理を頼めるか？」

「はい！えつと、普通に茹でてきますね！」

とりあえず普通に茹でたらいいよな。確か調味料はあつたはずだから、それも準備しておこう。

手際よく準備して、俺が茹で上がった蟹を持つていくと・・・研究所にやつてきた來客者がいたようだ。

「ですから、ワイルドハントの大半の経歴は悪そのものです！そんな人間をなぜ採用したんですか！」

・・・確かDr. スタイリツシユのところでは出会った、セリューさんだったのか。

ものすごい勢いでリンネさんにつつかかっている。優しそうな人だと思っていたが、なんとというか鬼気迫るものを感じさせた。

シユラさんは居心地が悪そうにしてたし、ドロテアさんは面白おかしそうに見守っているようだ。

シユラさんはなんでかわからないが、ドロテアさんは止めようぜ!?

・・・セリューさんに対して、リンネさんはとても静かに佇んでいた。

なんとというか、セリューさんがこういうことを言うのを予想してたような感じ：：だろうか。なんとなくだが、俺にはそう見えた。

「帝国の暗殺部隊の連中も殺害した民間人の死体を強姦しているという報告もある。エステス軍も敵側の民間人の凌辱をしているそうだ・・・セリュー・ユビキタス、我々を責めるならば己の上司や同僚を顧みてから言いたまえ」

リンネさんはセリューさんにそう言って、厳しい視線を向けていた。

なんだよそれ・・・!!

・・・帝国軍はそんなことまでやってるのか・・・?!

「そつ、そんなこと・・・そんなことをやっているはずがありません！でたらめです!!」
「・・・それならば同僚や上司に尋ねればいい。嘘を吐けるような人間ではないからな、あいつらは」

リンネさんがそう答えると、セリユーさんは研究所から飛び出していった。

「・・・あ、あのー」

「すまないな、騒がしくした。どうやら俺がここにいることを知って、直談判しに来たらしい」

そう答えて、リンネさんは椅子に座りなおした。

「あの、さっきのつて・・・」

「気にするな、それがこの帝国の現状だ」

そう短く答えられてしまうと、あまり突っ込んで聞けない。

「・・・そ、それよりもよ！早く蟹食おうぜ！なあ、タツミ！」

「えつ、は、はい・・・」

「そうじゃぞー、他の奴らには秘密じゃな」

シユラさんとドロテアさんはさっきの空気を払しよくするように、俺が持っている蟹を代わりにテーブルに運んでくれた。

俺もそのまま、とにかく蟹を食べて会話をすることに集中した。

：リンネさんが「お前にはここが合わない」みたいなことを言っていたことが、少
しわかった。

「サプライズ会食は心臓が飛び出る」

リンネさんとシユラさんがまた仕事にそれぞれ戻ってから、俺とドロテアさんは再び仕事に戻った。ドロテアさんはウェイブが持ってきたレポートに目を通しながら何かを書いたり計算しているようだ。

ただ、集中力がずつと続くわけでもない。適度にコーヒーやお茶菓子をつまみながら、仕事を続けた。

ドロテアさんは西の王国のことや、錬金術の初歩的なもの、俺の知らないことをどんどん話してくれる。

俺にとつては新しいことばかりで、興味を持つてなんでも聞けた。

コース料理などの初歩的なマナーなんかも結構面白かったし、危険種の食べ方とかもタメになった。

「しかし、イエーガーズのセリユーといったか、中々に激情家じゃなあ。見ていて青臭かったぞ」

「そうですか？俺はその・・・セリユーさんが言いたいことも分かったんですけど・・・」

「遠回しに『老いてる』と妾には聞こえておるがのう」

「す、すみませんでしたああああー！！！！」

そんなこんなでもう夕方になり、今日は研究所の仮眠室に宿泊することになった。

「それじゃあ、食堂で食べてきますか？俺、宮殿内の食堂で食べるの初めてで・・・」

「いや、今日の夕食は食べる場所が決まっておる」

別室とはどういうことなのか。

俺が疑問に思っていたら、ドロテアさんに手を繋がれて引きずられるようにしてついていくしかできなかつた。

やってきた部屋に入ると、すでに先客が二人いるようだ。

一人は銀髪でかなり恰幅の良い中年の男性、もう一人は幼そうな少年だが、着ている服装からは貴族なのかと思わせた。

男性のほうは何故か既視感がある。なんだろうか・・・誰かに似ているのだろうか？
「おお、やつときたんですか。少し遅かったですね」

「すまなかつたのう。ほれ、これがワイルドハントで試験雇用している奴じゃ」

「どうやらドロテアさんと男性は知り合いらしい。」

「あ、あの・・・ドロテアさん。この人は？知り合いですか？それにこっちの子はこの人

のお子さんとか?」

俺がおそるおそる尋ねると、ドロテアさんはあつけらかなと答えた

「オネスト大臣と、皇帝陛下じゃ」

ドロテアさんの言葉を聞き、理解した直後に「失礼な態度ですみませんでした!!!」と土下座した。

背筋が凍るというか、首が落とされるんじゃないかと思つて軽く走馬燈が脳内で流れてしまったほどだ。

「気にしなくても良いぞ。余も気にしておらぬからな」

皇帝陛下にそういわれて、すぐに背筋を正して立ち上がった。

「へえ、そうですか。シユラが連れてきた試験雇用の人間が彼なんですね」

「そうじゃぞ。まだまだ拙いが、磨けば帝具を使える程度にはなるはずじゃ」

どう言われて、なんだか照れ臭くなった。

「今日は夕食を食べる予定じゃったからな。ついでに連れてきた。」

「陛下、かまいませんか?」

「余はかまわぬ。いつもは大臣と二人で食べているからな。賑やかな食事のほうが良

い」

まさかオネスト大臣と皇帝陛下と共に食事をする事になるとは思ってもなかった。ドロテアさんが今日の午後に初歩的なマナーの話をしたのはこのためだったのか……皇帝陛下から、俺の故郷の話や仕事ぶりのことを聞かれ、たどたどしいながらもなんとか答えながら料理を食べていた。美味しいけど緊張で味がやや分らない……話の途中で何度か大臣が陛下に合いの手や話の切り替えをしていたが、大臣はこう、マナーとか関係なく食べていた。というか、ホールケーキ一個分をそのまま食べたり、大臣の食事分はかなり多かった。

俺の故郷の重税のことなどを話題にしようとする、大臣がすかさず話の腰を折りにきたのは……気のせいではないと思う。

「今日は楽しかったな。タツミ、ぜひともワイルドハントの正規隊員になれるといいな」
「陛下……ありがとうございます！俺、頑張ります！」

皇帝陛下の言葉がとても嬉しかったと同時に……目の前の少年のことが、少しだけ心配になった。

食事が終わってから、ドロテアさんと二人で研究所へと戻る道すがら

「どうじゃ？この国の大臣と皇帝は」

「……その、噂通りなら、陛下は……」

「……摂政政治は良く聞く話じゃ。とはいえ、お主は今はこちらに入るつもりじゃろう?」
「……はい」

「妾としては応援はしておるが、リンネの意見も分からんでもない。タツミは随分と真つすくなようじゃからなあ。下手にイエーガーズの娘のように盲信するよりはええじゃろう?」

そう言つて笑われてしまった。

「……気を遣つてくれたのだらうか。なんとというか、心配させてしまったのがすまないと思つてしまった。」

「なんで俺のベッドに入ってくるんですか?!」

ドロテアさんの研究所にある仮眠室に宿泊することになった。数日間仕事があるなら、ワイルドハントの詰所に戻るよりもこちらで寝泊りするほうが楽だからだ。

研究所にあるシャワールームを借りてから、ドロテアさんに仮眠室まで案内された。

どうやら仮眠室は休憩室と併設されていて、畳が敷かれたコーナーもあるようだ。ベッドは二つあったので、たぶんこのベッドをドロテアさんとオリヴァーさんが仮眠用に使っているのだろう。

しかしシングルベッドじゃなくてダブルベッドか・・・意外と幅があるよな。

部屋の内装自体は宮殿内の部屋よりも簡素だが、掃除が行き届いていて清潔感はある。

オリヴァーさんが掃除をしてから出張したのだろう。あの人・・・貴族のお屋敷で働いていそうな執事さんみたいだ。

家事もできるし掃除もできて、仕事もできるって、すごいかっこいい。

「普段はここでオリヴァーと寝泊りしておるが、クローゼットには布団もあるし、寝袋も完備しておる。お主が眠りやすいので選ぶと良い。」

「それじゃあ・・・ベッドを借りますね」

「うむ。そうか。妻はシャワーを浴びてくるから、先に寝ると良い」

「そうさせてもらいますね。それじゃあ、おやすみなさい」

一日仕事しただけなのにえらい疲れたよな・・・でもまあ、ウエイブとクロメと仲良くなつたのは嬉しかったな。帝国が荒んでいても、国の為に頑張つてる軍人もいるんだ。

・・・オネスト大臣については、今のところ良い印象はない

リンネさんやシユラさんの実の父親だし、悪いことは言いたくない。けど、リンネさん自身がヘイトを貯めて、俺に大臣のことを言っていることや、帝都で聞いた悪い噂なんかを聞いてきた。

・・・だから、そんな相手を善人だとは、今の俺には思えなくなっていた。

それでもシユラさんのように慕っている人間もいるみたいだし、皇帝陛下も随分と懐いていた。だからこそ、俺は・・・悪人なのかそうじゃないのか判断を下せないのだ。

エンシンさんと話した時みたいに、【どんな悪事を働いていても、自分の家族には優しくしている人間】も世の中にはいるわけだし。

悪いことは悪い、俺はそれを許せない。

目の前で酷いことをしている悪人がいたなら、俺は斬ってしまうかもしれない。

そもそも・・・軍属になるなり、この組織に残るなりすれば、人間相手に剣を振るうのだからあり得ない話ではない。この国は盗賊も多いし、国境近くでは異民族相手に帝國軍が戦っているのだ。

俺だつて人を殺すことは覚悟して帝都までやってきた。自分が殺されるかもしれない覚悟だつて、承知の上だ。

けれど、もしも・・・

猟奇殺人鬼（チャンプさん）がエリオットさんを気にかけているように

西の国の魔女（コスミナさん）をセシルさんが心配しているように

南国諸島の海賊（エンシンさん）がコハルさんを大事にしているように

人斬り（イズウさん）をアオイさんが好きでいるように

マッドサイエンティスト（ドロテアさん）とオリヴァーさんがお互いに信頼しているように

・・・自分以外の誰かに優しくしているところがあると知ってしまったら

俺はその時に、迷うことなく、目の前の相手を殺せるのだろうか。

「はあ……」

なんだか思考がまとまらなくて、寝付けなくなってしまった。

「……む、まだ起きておったのか」

急にドロテアさんの声が聞こえてきたので、扉のほうへと寝ながら向き直る。

ドロテアさんが寝間着姿で立っていた。俺が考え事をしているあいだにシャワーも終わってたらしい。

「あ……寝付けなくて」

「ふむ……まあ、妾も今日はオリヴァーがおらんから寝付けないじやろうしなあ……」
そんなことを返されて、どういう意味か俺が考えようとした。が、ドロテアさんが俺のベッドまでやってきて、そのままベッドに入ってきた。

「ドロテアさん?!なんで俺のベッドに入ってきてるんですか!!?」

「ん?嫌か?」

思わず飛び起きた俺に、ドロテアさんは不思議そうに俺を見上げていた。

「嫌とかそういうのじゃないです!」

「ほほお、妾の色気にやられたか?」

「色気とかそういうのじゃないですよ?!というかドロテアさんからは色気を感じな……」

「頭蓋骨割るぞ、お主」

おっと口が滑った。

って、そうじゃなくて！

「俺が寝付けないのはともかく、ドロテアさんが寝付けないからってなんで俺のベッドに入るんですか!？」

「んー．．．オリヴァーが来てから、よく抱き枕代わりにしておつてな。あやつが起きてる時なんかは狼姿のあやつを枕代わりに寝ておる」

オリヴァーさんの帝具を完全に抱き枕代わりにしているって贅沢な使い方だな?!

っていうか、俺もそれをやってみたいと思ったのは言わないでおこう。

「．．．．．オリヴァーは偶々拾っただけじゃったが、存外気に入っててな」

「．．．はあ」

「あやつが子供の頃に共寝していたせいか、妾も癖になつて」

「．．．なるほど、分かりました」

つまり、オリヴァーさんの小さい頃から世話をしていた名残があるのか。

「じゃからお主を代わりにしようかと」

「．．．それなら、いいですよ。あ、でも血を吸わないでくださいね」

「チツ」

「舌打ち！舌打ちしないでください！」

・・・なんとというか、ドロテアさんにもかわいいところがあるなあ。

俺も緊張しないわけじゃないけど、まあドロテアさんだったら大丈夫そうだし。異性っぽさが少ないというか、胸を押し付けてきたり抱きついてくるコスミナさんと比べたら全然大丈夫だ。

「お主、今失礼なことを考えなかったか」

「気のせいです」

「これが帝都の現実なのか・・・」

オリヴァーさんの出張が終わり、ドロテアさんの仕事の手伝いが終わった頃にシユラさんから連絡があった。

ようやくリンネさんが、ワイルドハントの取り締まりに俺を連れて行ってくれらしい。イゾウさんやシユラさんが進言してくれて本当にありがたい限りだ。

やっと実戦ができるんだ。ここで頑張らないと・・・そろそろ試験雇用期間も終了が近い。

「良かったなあ、新人さんよ。帝都の悪いやつらがどんだけいるか、その目で見るといいぜ」

「は、はい。あー・・・緊張するとうか不安とうか・・・」

エリオットさんには激励されたものの、緊張するし不安も拭えない。

秘密警察ワイルドハントは、「悪人相手に拷問まがいのことをする」という話も聞いている。

・・・まあ、それそのものよりも、帝都の人がそのことを「ざまあみろ」という感情で語っていることのほうが、俺には少し怖かったけれど。

俺が噂を思い出していると、エリオットさんがこつそりと耳打ちしてきた。

「・・・それに、悪人相手に悪逆非道なことしてるメンバーもいるからな。あいつらもいつ他の帝都民にやらかすかもしれないねえから、気をつけろよ」

「・・・えーと、あの・・・」

エリオットさんも、リンネさんと似たような感じというか、同じ隊員を信用してないんだなあ

「いざというときはお前が殺したらいいぜ。あいつら、お前のことは信用してるだろ？」

「そ、そんなことしませんって！ っていうか、その、もう少し信頼したほうが・・・」

俺がフオローしようとする、エリオットさんが眉を顰めて舌打ちをした。だが、すぐに明るい笑顔を浮かべて、俺にこう言ってきた。

「チャンプの野郎やエンシンは根っからの悪人だぜ？ リンネがいるからって何もやらねえ保障はないだろ。お前はこの中で一番才能があつて強くなる。いや、絶対にお前は強いんだよ。だったら、悪い人間を殺し続ければ、お前は英雄にもなれるぜ？」

「つ・・・」

「みんなから認められて褒められるし、金だつて稼げて故郷の奴らに仕送りもできるんだ。だからお前は、迷わずに悪人を斬れたほうがいい。な？ そちのほうがいいだろ？」

「・・・」

「悪人相手なんざ、何したって許されるんだよ」

・・・褒めてくれているのかもしれないが、なんだかとても恐ろしく感じた。

やってきたのはイヲカルという人間の屋敷だ。

調査資料を見せてもらったが、オネスト大臣の遠縁にあたるらしい。近しい人間ではないらしく、シユラさんも「そんな奴いたかな」程度の認識だそうだ。

「大臣の遠縁ですから、権力でもみ消すこともあるそうで・・・時間が掛かりました」

「そうですね。オネスト大臣にも了承を得たと聞きましたし・・・苦労したでしょう？」

「ええ、まあ・・・」

「オリヴァーさん、お疲れ様です。リンネさんも大変でしたよね」

セシルさんの言葉にオリヴァーさんがそう言いながら、苦笑していた。リンネさんはその言葉に何も答えずに、持っている帝具を握りしめていた。

「んでよ、侍らせてる女はどうすんだよ」

「護衛とイヲカル以外は一時保護をして帝都警備隊で取り調べになる。お互いに調査資料の提供をしているからな。警備隊長のオーガとの取り決めだ。代わりに護衛とイヲカルには、何をしてもいい」

エンシンの言葉にリンネは冷たくそう返して、イヲカルの屋敷の門の前までやってきた。

「ドロテア、オリヴァー、チャンプ、エリオット、コスミナとセシルは屋敷の裏手に回れ。逃げる人間もいるだろうが、殺さずに捕まえろ。・・イエーガーズが協力のためにすでに待機している」

ドロテアたちがこつそりと屋敷の裏手に回る間に、リンネがコハルへと声を掛ける。

「コハルは帝具で正門を壊してほしい。護衛とイヲカル以外の人間が周りにいれば、コハルとアオイとイゾウで確保しろ。取り逃しても帝都警備隊が下で待機している。」

リンネの指示を聞きながら、タツミはシユラにこつそりと尋ねた。

「あの、なんかみんなリンネさんの指示をちゃんと聞きますよね。もつとこう、全員殺すとかやりそうだと思ってたんですけど」

「勤めている人間が全員グルならそれもあるぜ?・・・ただ、今回は帝都警備隊やイエーガーズの協力があるからだってよ」

「はあ・・・協力体制だから、ですか?」

「ああ。この間、貴族の屋敷の関係者を全員取り調べただけだよ・・・それが酷いつて進言した奴がいたから、今回はイエーガーズの隊長が進言して協力体制になつたんだとよ」

シユラさんどこそこそと話している間に、コハルさんが帝具を構えて、一気に正門を壊した。

槍の帝具だと聞いていたが、威力は大砲並みに無いか、これ・・・？

帝具で壊した衝撃と爆音で、護衛らしき人間が6人と偉そうにしている中年の男がやってきた。資料に記載されていたイヲカルで間違いないだろう。

「なんだ突然！賊、か・・・」

イヲカルは俺たちを見て顔を青ざめた。

「リ、リンネ様にシユラ様ですか・・・あ、あはは、大臣の御息がどうしてここに？」
声を震わせながら、イヲカルはリンネさんとシユラさんに媚びるような視線を向ける。リンネさんはそんなイヲカルを睨みつけていた。

「ワイルドハントがここにくる意味ぐらい、貴様にも分かるだろう」

「・・・嫌ですね、なんのことだか。それに私はあなた方の、引いては大臣の遠縁ですよ？」

なんとか誤魔化そうとしているのかもしれないが、エンシンさんがイヲカルの横にいた護衛を蹴飛ばした。

「つたく、まどろっこしいな。んで、好きに殺してもいいんだよな？」

エンシンさんはそう言いながら、組み伏せた護衛の腕を容赦なく断ち切った。護衛の

悲鳴が響き、床が血に染まっていく

「な、なにを・・・!!」

「ああん？俺たちに逆らうつてのによ」

護衛達も構えるが、シユラさんは余裕があるようで口角をあげる。護衛達が5人がかりでシユラさんに襲い掛かってきたが、俺が助ける間もなく一人で伸していく。

・・・これ、俺の出番無くないか

というか、シユラさんに至っては倒れた護衛に更に追撃をしている。

「シユ、シユラさんもエンシンさんもちよつとあの、何してもいいって言われてても限度が・・・」

「・・・タツミ、まだお前にはこいつが何をしていたかの資料を見せてなかったな」

止めようとした俺に、イヲカルの腕を無理やり捻りあげていたリンネさんが声を掛けた。ずかずかと屋敷の中を歩くリンネさんの後をついていき、とある部屋の前にやってきた。

「開けてみる」

「は、はい」

リンネさんに促されて扉を開ける

「・・・なんだよ、これ」

そこは、拷問室だった。床も壁も血の跡がこびりついていて、錆び付いた臭いで咽そうになる。部屋には、全裸の女性の死体が重なり合うように、無造作に部屋の隅に置かれていた。

まるでゴミか何かのような扱いだ。

死体は傷と血にまみれていて、局部からの出血や何かがこびりついている。

「このイヲカルは帝都で女を拉致しては護衛達と凌辱の限りを尽くして、拷問を加えていた。大臣の遠縁ということを利用して捕まえられなかったがな」

リンネさんはそう言いながらイヲカルを壁へと叩きつけた。

「ヒツ・・・」

「・・・やつと証拠が揃った。あの男も、お前を切り捨てるつもりだぞ？」

リンネさんの言葉にイヲカルは逃げようと走り始めた。俺が追いかけようとする、リンネさんが帝具を構えた。

「メフェイスト、やれ」

まるで帝具に話しかけているように命令すると、帝具の時計の針が動いた。

・・・気が付くと、またイヲカルがリンネさんに腕をひねりあげられていたのだ。

「!?」

イヲカルも驚いているし、俺も何が起こったのか分からなかったが・・・これがリンネさんの帝具の時間を巻き戻す能力か・・・!

「・・・タツミ、お前は中に入るなよ」

「え?」

「あとは、中に誰もいれるな」

リンネさんはそう言つて、イヲカルを連れて拷問室へ入ってしまった。

いつたい何を・・・

そう思っていると中から豚のような悲鳴が聞こえてきた。どうやらイヲカルに対して何かをしているらしい。

静かになつたと思つたら、何度も悲鳴が聞こえる。

「・・・ああ、そうか」

帝具の力で拷問しては巻き戻しているのか、あの人は。

あまりに恐ろしい行為だが、イヲカルはそれでも「私は悪くない!」「私はお前の血筋だぞ!」と弁明の言葉を吐き出しては拷問されている。

「・・・謝罪の言葉は、一切聞こえない。」

シユラさんが様子に気が付いてこちらにやってきた頃には、「殺してくれ」と懇願する

声へと変わっていた。だが、時折「殺しても良いだろう！いくらでも殺していいはずだ！」とも聞こえてきた。

「おい、兄貴は？」

「……中、に……います」

「……みてえだな。んでよお、実戦する間も無かったけど、現場体験はどうよ」

「……帝都は、こんな奴らがいるんですね」

「……んー、まあな。親父の周りなんてこいつの比じゃねえのぼつかだぜ」

その言葉を聞いて俺は唇を噛み締めた。

「……地方にいる帝国軍なんざ、盗賊を狩る仕事もしねえからな。軍属よりは、ワイルドハントのほうが良いと思う。兄貴が認めるかどうかもあるけど、お前はどうか」

「……俺は、分かりません」

「……そうか」

リンネさんが出てくるまで、シユラさんは俺と一緒に扉の前で待っていてくれた。

第11回目転生者会議と狩人の叛逆

週に一度の転生者会議も、もう11回目である。

秘密警察ワイルドハントが結成されて2か月半と少しだが、取り締まりも上々だ。

今回はイヲカルの屋敷へのガサ入れも終わり、ひと段落ついたことからリンネも参加している。他のワイルドハントのメンバーは久々に全員揃ったことから宴会のために準備をしているらしい。

「ねえ、リンネ。原作の流れを結構変えちゃってるって自覚あるの?」

会議の冒頭からコハルがリンネに掴みかかる勢いでリンネに噛みつくように話し始めた。

「……自覚はある。説明をするからとりあえず着席してくれ」

リンネに言われ、渋々ながらコハルは席に座った。他の転生者たちもリンネへと視線を向ける。ある者は疑念の目を向け、ある者は心配そうに、ある者は何かを慮っているように

「……まず、俺は悪人が許せない。それが原作の流れを変えることだとしても、ナイトレイドが討つとしても。その結果として、原作の『出来事(イベント)』が変更

されてもかまわない」

リンネが静かに転生者たちへと語りかける。

「だから、ワイルドハントのメンバーもそれは変わらない。お前たちがいるおかげか、命令が通りやすいが・・・信用は、信頼は、一切していない。悪性は変わらず抱えた奴らが、いつ悪事を働くかわからないからな」

その言葉の後、会議室は沈黙に包まれた。アオイに關しては殺すような視線でリンネを睨みつけていた。「イゾウのことも殺すつもりなのか」と、視線には込められているのだろう。

コハルやオリヴァーも何か言いたそうな視線を向けるが、何も言わずに気まずそうにしている。その反対にエリオットは満足そうにしていた。

そんな中で、セシルが誰に向けたのか分からない、独り言のような言葉を吐いた。

「姉さんみたいに、周りに壊されて悪人になった人も・・・生きていちやだめなのかな・・・」
その言葉に、誰も答えない。

代わりにコハルが「あのっ」と会議室の面子が目にするほどの音量で、リンネへと話しかける。

「あのさリンネ、その・・・漫画の中の世界なら、悪人は悪人で、善人は善人だと思って

たの。でもつ、その、そうじゃなくてさ……」

「何が言いたい」

「……あいつらにだって、いいところあるじゃん。だから、私は、ちよつとは信じてあげたいのよ」

「……」

その言葉にリンネは返答することなく、コハルを見つめた。

「……とつかさ、私の兄貴たちは悪人だし、悪いことしてるのは知ってるけど。シユラについては悪事を働いたって聞いたことないんだけど」

「……」

「確かに街で娼婦を買ったりはしてるけど、町の人を殺したとか聞かないし」

「……確かに、あいつは一度も『何もしてない』」

その言葉に今度は全員がリンネへと視線を向けた。セシルやオリヴァーも「何もしてないんですか!？」と詰問されたリンネは眉を顰めた。

これにはエリオットも驚いたようで、呆気にとられているようだ。

「ああ、何もしてない。奴の旅には密偵を何人も付けていたが何もしていなかった」

「お前は……何もしてないシユラに対してあんな態度をとっているのか」

アオイが怒気を孕みながらリンネに尋ねるが、リンネは「当たり前だ」と答える。

「あいつらは悪役だろう？ どうあがいても、どう言い繕っても悪事を働く存在だ。今は何もしてなくとも、知らないところでやっているかもしれないし、今後やるかもしれない。その可能性があるからこそ……俺は信頼していいだけだ」

——ところ代わって、帝都のとある貸本屋近くにて

イエーガーズ所属のランとセリユーが、人目を避けるように会話をしていた。

「……ラン、本当にやるんですか？」

「ええ、そのために私は準備をしてきました」

「……なぜ、私にそんな話をしたんですか？ 私が隊長に報告すると思わなかったのですか？」

「いえ、今の貴方は隊長もクロメさんも信用していませんでしょう」

そう、セリユーはエスデス軍や暗殺部隊の実情を本人たちから聞いてしまったのだ。そして彼らは、 “それが当然である行為” として受け入れていることも、知ってしまった。

ランはそんな彼女にエリオットとの計画と…… “ラン自身が立てた計画” を教えたのだ。

「貴方はどうしたいんですか？」

「……………私は……………もう、何を信じて、どうしたらいいのかわからないんです。そんなことを言われても、私は、私はパパの意思を継ぐって……………でも……………」

セリユーにとって、ラン自身が計画した内容は許されないであると同時に、「悪を裁ける最高の計画」とも思えてしまっていた。

「……………セリユーさん、もしも貴方がこの計画に参加してもしなくても、私は……………いえ、「私たち」は実行します。その時は私も彼らと共に死ぬつもりです」

「！」

「もしも貴方が計画に賛同するなら……………」

一呼吸置いて、ランはセリユーへと伝えた。

「私と共に、ナイトレイドへ……………いえ、革命軍へ寝返りましょう」

「なんとというか、俺、ここにきて良かったです」

仕事が一と段落したついで、ワイルドハントで打ち上げがてら宴会をすることになった。あのリンネさんもなんとか参加してくれるらしい。

よく休んでくれたな……とか、考えていたが、シユラさん曰く「皇帝陛下から休めつて言われたんだとよ」と説明してくれた。

言われたというか、恐らくは皇帝陛下からの勅命扱いだろう。それならばリンネさんとしては従うしかなかったようだ。

「陛下からも心配されてたんですね……リンネさん」

「そりゃまあ、ぶっ続けて仕事していたら宮殿でも噂になるからのう。じゃが、仕事熱心なのは妻好みじゃ。男前な顔立ちじゃしなあ」

「コスミナちゃん、そういうリンネちゃんもかつこよくて好きですよ？ ストイックでちよーつと塩対応ですけど、そういうのも素敵です。」

ドロテアさんとコスミナさんからは好感をもたれているようだ。

シユラさんも「そうだろ！ 兄貴つてすごいだろ！」と話に乗っかってくる。イゾウさんたちは苦笑しながらも「ああ、すごいすごい」と話を合わせていた。

そのうちコスミナさんたちもシユラさんとの会話に混ざっているようだ。

ふと、俺の隣を歩いてきたチャンプさんが呟いた。

「まあ、確かにあいつの悪人への敵しきってすっげえよな」

チャンプさんの言葉を聞いて、この間のイヲカルの屋敷への立ち入りのことを思い出してしまう。今でも悲鳴の声や拷問をしている音が、何度も鼓膜に響いてこびりついているような感覚。

ふとした瞬間に思い出してしまう。

正しくはないことだったかもしれないけれど・・・それでも、何度も何度も拷問しては戻して、また拷問するのはやりすぎている。

けれど拷問室に放置されていた死体の山を思い出せば、「やられても当然だ」と囁く自分もいるのだ。

・・・あんな奴は、ああされても仕方なかった。

そう思い切つてしまつたらいいはずなのに・・・

・・・何故だろう、ものすごく胃がむかむかするというか、モヤモヤとしたものがつかえているのだ。

「・・・そう、ですな」

「暗い顔だな。立ち入りしてからやけに思いつめてるけどよ」

チャンプさんに心配そうに声を掛けられた。なんとか言葉を濁すが、彼は「立ち入りの時になんかあったのかよ」と尋ねてきてくれた。

「……ええつと、なんて言ったらいいんですかね。自分で説明できなくて」

「……」

「なんというか、拷問とかそういうのはやりすぎだつて思う反面、人を人と思わない奴を倒すのは間違つてないつて思う自分もいて……」

「まあ、合わねえつてんならやらねえほうがいいだろ。俺たちは犯罪者相手なら何してもいいつて言われて、好きでやってるしよ」

チャンプさんにも言われるが、合う合わないとは少し違う。

「あんまり真面目に考えるなよ。『自分がどうしたいか』でいいだろ」

「あはは……そうなると、故郷の仕送りが優先になりますね」

「そういうことじゃねえだろ。それもお前の目的だけだよ……なんつーの？今の自分が一番大事なもんを優先すりゃいいだろ」

「……自分の、一番大事なものですか」

故郷への仕送りとか、いまだに再会できないイエヤスとサヨのこととか……

でも、今の自分が一番大事にしてるものつてなんだろう

「なんかそういわれると延々考えますね。チャンプさんはあるんですか？」

「お、俺か? . . . いや、いいだろ別に」

「えー、人に振ったなら教えてくださいよ」

「. 誰にも言うなよ? バラしたら殺すからな」

「大丈夫ですよ、言いません!」

「. なんだかんだでエリオットだな」

その言葉を聞いて、少し反応が遅れた。

「おかしいのかコラ」

「なんとなく予想はしてたんですけど、予想通りっていうか。エリオットさんにはなんだかんだで判定甘いところあるんで、みんなわかってますよ?」

「えっ?」

「. なんで驚くんですか」

. ああ、なるほど . . . チャンプさん、周知されてる自覚が無かったのか . . .

宴会の買い出しも終わり、詰所に待機していたリンネさんたちと合流した。

俺もセルさんやオリヴァーさんと一緒に宴会に出すおつまみを用意することになり、手際良く進めた。

そうして料理を出して、宴会が始まった。

俺は酒はあまり飲まないが、他のメンバーは全員、お酒を飲み始めた。

「タツミ君、どこかの居酒屋さんとかで予約しても良かったんだよ!」

「そうですよ、ドロテア様も少し気にしておられましたし・・・」

セシルさんやオリヴァーさんに言われてしまった。シユラさんは「どういうことだ?」と二人に尋ねる。コハルさんやエンシンさんも興味を持ったようだ。

・・・そう、今回の宴会、おつまみを俺が作るから詰所でやろうとリンネさんに言ったのだ。

「えーっと・・・試験雇用期間ももうすぐ終わるじゃないですか。貴重な経験とか、いろんな話とか聞いたりできて・・・そういう感謝の気持ちをどこかで返したかったです。正規の隊員じゃない間なのに良くしてもらいましたから」

ちよつと気恥ずかしいけど、俺がそういうと数秒ほど場が静かになった。

だが、すぐに場が明るくなった。エリオットさんやエンシンさんが「んなこと気にするなよ!」「当たり前だろー!」と声を掛けてくれた。

「タツミちゃんももう仲間ですよー!」

コスミナさんはそう言いながら俺の左腕にしつかりと胸を押し付けながらしがみついた。また胸を押し付け・・・ううおおおお、だめだダメだ、意識をどこか違うところに・・・

「コスミナ姐さん、タツミ君が困ってるから・・・」

セシルさんがコスミナさんを止めようとしてくれる。た、助かった・・・

・・・が、エンシンさんが「いいんじゃないやねえの？」と茶々をいれてきた。いやいや！
良くないって！俺としては嬉しくないわけじゃないけど、いやその、恥ずかしいとい
うかなんというか

「せつかく女の胸を堪能してんだぜ？ちよつとぐらいいいだよ」

「い、いやいや、そのですわ・・・」

俺もなんとかコスミナさんにお断りを入れようとしたら、コハルさんが「ちつ
がー！うー！」と立ち上がった。思わず、他にもお酒を飲んでいたメンバーがそちらへ
と視線を向ける。

「胸なんて無くてもいいもん！女の子の魅力はおっぱいだけじゃにやいしー！」

「やっぱり女は胸だろ、胸」

「そんなことにやいもん！タツミ君は胸は無いほうが好きだよね？」

コハルさんもそう言いながら俺の隣に座って・・・右腕にしがみついていた。コスミ
ナさんほどではないが、一応柔らかいものが当たって・・・

良く見ればコハルさんも顔が赤くなっている、酔っぱらっているらしい。

「・・・」

「・・・」

エンシンさんからの視線がやばい。殺意が籠ってる。

セシルさんは心配そうにじーつと俺を見つめている

「コスミナちゃんですよね？」

「わたしだもん！ね？」

二人が俺に尋ねる中で、エンシンさんがジエスチャーで「コハルを選んだら、てめえ表に出ろ」とやっている。正直滅茶苦茶怖い

セシルさんの視線もなんかこう、きつい、つらい、視線を合わせるのがめちやくちや負担だ。

【Side: エリオット】

宴会で騒いでる時に、詰所の入り口近くで見慣れた影が視界に入った。他の奴らには「酔い覚ましのため、涼みに行く」という振りをして、扉から出る。

そこには、イエーガーズのランとセリユーが外に立っていた。

「ランさん・・・と、セリユーさん、ですか」

「こんばんは、エリオットさん。貴方の兄を罠にかける計画が本日実行できそうです」

ランの言葉に、酔いも覚めて「本当か！」と聞き返した。やっと、やっとこれで安全

で平和な生活ができるんだと思った・・・

けれど、セリューがいるのはなぜだろう？」

「私もランから聞きました。お手伝いしようと、思いました」

「・・・お、おとおお！まじか！でもあんた、こういうのはだめなんじゃないのか？」

「・・・いえ。確かにワイルドハントの隊員が、過去に悪事を働いていたのは事実です」

「すげえ！これならチャンプの野郎の帝具で反撃されることなく殺せる可能性が高くなるじゃねえか！」

「エリオットさん、計画の説明のためについてきてください」

「ああ！行く行く！すぐに行くぜ！」

これで、これであいつさえいなくなれば、俺は何も怖がることなく暮らせるんだ。

もうあいつが子供を襲っているのを止められずにいることもない

成長しないままの不利な体つきでも安全に帝都で暮らせる。

やっと、俺の手で悪役（あいつ）を殺して、俺がヒーローになれるんだ

加害者の事情なんて被害者には関係ねえ

エリオットはランとセリユーについて、帝都にある廃墟までやってきた。

この廃墟は元々貴族が管理していたものだったが、現在では持ち主のいない場所となっている。

場所も中々に広く、ロビー部分は古くなって吹き抜け状態になってしまっていた。

「おおつ、ここはもしかしてランがチャンプに奇襲しかけた場所か？」

エリオットは物見遊山であたりをきよろきよろと見回していた。

転生した年月があるため、忘れている部分もちろんあるが……それでも彼は彼で、この“アカメが斬る！”の作品を気に入っていたのだ。

だからこそ、彼は興奮していた。

……これから自分はチャンプを足掛かりに、ランたちと共に悪役キャラクターをどんどん殺して、安全に暮らして、英雄になるんだ、と。

そんなエリオットとは対照的にセリユーとランは黙って歩いていた。

コロもセリユーに並ぶように歩いている。

・・・不自然なまでに会話がないことにエリオットは気が付かない。

「なあなあ、ここですつげえ奇襲するのにいいよな。まずはあれか？俺がチャンプを連れてきて、お前らが奇襲するってか？」

自己陶醉と興奮がない交ぜになったエリオットは、ランとセリユーに話しかける。

だが、彼らは「その話はあとでゆっくり」と返答するだけであった。

「・・・その前に質問があります」

セリユーが静かにエリオットへと顔を向けた。

「エリオットさんは、帝具をいつから持っていたんですか？」

「へ？なんだよいきなり・・・」

「・・・いえ。私は帝都警備時代にコロと適合したのですが、帝国の外に出た帝具と巡り合った話が聞きたかったんです。ね、コロ」

「きゅきゅー」

セリユーに問われ、エリオットは「おう、そうかそうか！じゃあ教えてやるぜ！」と彼女の質問に答え始めた。

「俺はな、家から出てすぐにこれを手に入れたんだよ」

その言葉にセリユーが一瞬、顔を伏せた。だが、すぐにエリオットへと顔を向き直した。

彼は腰に下げていた自らの帝具を見せつけるように差し出した。

「この【百風千嵐 芭蕉扇】はな、風を操る帝具なんだぜ」

「・・・そうですか」

「おう！こいつのおかげで大抵の危険種や盗賊は一網打尽にできるんだぜ！」

「・・・一網打尽、ですか」

エリオットの自慢の帝具だからだろうか、自信満々にセリユーに見せつけた。

「・・・もつとよく見たいので、私が持つてみてもいいですか？」

「いいぜー」

セリユーに言われるがまま、エリオットは彼女に帝具を渡した。

彼女を疑うこともなく、エリオットが意気揚々と態度になつている中、ランが「少し、

いいですか」と話しかけた。

「なんだよ」

「貴方はずつと、チャンプと一緒にいたんですよね」

「そうだけだよ・・・でもほら、仕方ないだろ？あいつは俺じゃ勝てない体格だしよ。仮に殺しても俺が一人でやっていけなかったし。何度も言ってるだろ？」

「……」

ランは何も返さない。その様子にさすがにエリオットは気が付いたようだ。

「な、なんだよ……どうした？まさか計画をやめるわけじゃないよな？」

「いいえ、やめません」

ランはきつぱりとそう言い切ると、パン、と拍手をした。

乾いたその音が、やけに廃墟内に響く。

なぜそんなことをやったのかとエリオットが問う前に、彼の体は何かを抑えつけられた。

「ったあ、な、なんだよ!!」

エリオットが辛うじて周りを確認すると……自分を取り押さえてるのはどうやら大人の男が複数人、それに廃墟の影や通路からぞろぞろと男性や女性、時には老人や若者がやってきた。

「彼らは、貴方の兄に犯し殺され、貴方に見殺しにされた子供たちの遺族ですよ」

セリユーがエリオットに冷たく言い放つ。

その言葉に、エリオットの顔は真っ青になった。

「・・・エリオットさん」

ランは組みふされたエリオットのの前へとやってくる。言葉を発せないエリオットのの前で彼はしやがみ込んだ。

「私はこの国を中から変えるつもりでした。ですが、チャンプを追いかけてやってきた遺族の方々と話して・・・貴方と話をして、決めたのです」

とても冷たい目で、彼はエリオットへと話しかけた。

「チャンプへの復讐のために・・・我々は貴方に、チャンプが子供たちにしたのと同じことをする、と」

その言葉にエリオットは息を吞んで「やめろっ・・・」と小さく呟いた。

「やめろ！やめてくれっ・・・俺は、俺は仕方なかったんだよ・・・!!」

「やめません」

ランは冷たく言い放つ。遺族たちの憎しみの籠った視線がエリオットを静かに見つめた。

恨み言も何も、彼らは言わない。ただ、憎悪の感情をこめて、エリオットを見つめ続ける。

「セ、セリユーー！お前、こーういうことはだめだろー！だから止めるよ、な？」

セリユーーへと助けを乞う視線を向けるが、セリユーーは冷たく彼を見下ろした。

「・・・貴方にも、この国にも、正義を執行する価値がありません。悪を止めないあなたを助ける意味がありません」

「・・・助ける、助けるつつつてんだろおお!!お前は！お前は正義が好きなんだろ！だつたら助けるよ！てめえはこんなことしないだろ!!」

エリオットの荒げる声に、セリユーーは何も返さない。

代わりにランは「エリオットさん」と声を掛ける。

「自分の家庭環境や体質についてずっと語ってくれましたね」

彼は一呼吸おいて、エリオットへと伝えた。

「貴方それは・・・ただの言い訳で甘えで、子供じみた我儘です。どんな理由があろうとも他人を傷つけて虐げていい理由にはなりません。それに、貴方が止めなかつたことをそれでよしとするわけがないでしょう」

その言葉を皮切りに、廃墟にエリオットの悲鳴がずっと響くこととなる。

「人の恨みは恐ろしい」

エリオットさんが「涼みに行く」と言っていたが、しばらく宴会場に帰ってこなかった。

さすがに遅いと思い、外を適当に見てみるがエリオットさんの姿が見当たらない。近くにはいないようだが・・・なんだか嫌な感じがする。

「どうしたんだよ、んな面してよ」

「エンシンさん・・・エリオットさんがいないんですよ。外に涼みに行くって言うてたんですけど」

「じゃあ真夜中の散歩ってやつじゃねえのか？」

「それならいいんですけど・・・その、エリオットさんって見た目が子供ですし、人さらに攫われたらって」

俺の言葉にコハルがさん「その前に帝具持ちなのよ、あいつ」とツツコミを入れられてしまった。

確かにエリオットさんは帝具持ちだけど・・・

「で、でも・・・なんか嫌な予感というか、あんまり良くない感じがして・・・」

「良くない？具体的に何か感じるのか？」

アオイさんに聞かれるが、具体的には分からないのでなんとも言い難い。こう、胸がざわつくというか、不安になるというか・・・なんだろう。自分でもよく分からない。「と、とりあえずちよつと外出てきますね」

「それなら俺も行く」

俺が行こうとすると、チャンプさんも席を立った。どうやらついてきてくれるらしい。エリオットさんのことが心配なんだな。

ついてきてくれるのは有難い。まだ俺も帝都の街並みに慣れ切ったわけでもない。それにエリオットさんと行動を共にしていたチャンプさんがいれば、見つけやすいかもしれない。

「早く帰ってこいよ」

「はいー」

シユラさんに返事をして、俺とチャンプさんで夜の街を歩くことになった。

「しかしエリオットはどこに行ったんだろうな」

「さあ・・・もしかしたら夜の散歩つてやつですかね」

チャンプさんとそんな会話をしながら歩いていると、どこからか何か聞こえた。チャ

ンプさんと顔を見合わせて耳を澄ませてじつ……と聞いてみる。

……人の叫び声、のような、悲鳴に近いものだろうか。

「行きましょう！」

「……そうだな」

……首の後ろがざわざわする。嫌な感じがするのは気のせいだろうか。

着いたのは大きな廃墟だ。なんだか夜の廃墟つてすごい不気味だな……背筋が冷たくなってくるのは気のせいだろうか？

チャンプさんと共に廃墟の中を進むと、吹き抜けのある大きな空間へと着いた。

そこには大勢のニコニコと笑っている人々と、イエーガーズのセリユーさん、ランさん、ランさんがいた。

……大勢の人たちの足元には、何かが転がっている。

なんだろうと目を凝らしてみると、どうやら人間らしい。それにしても手足が違う方向に曲がっているし、体中痣だらけでほとんど服も破られている。

「エリオット……!!」

チャンプさんがエリオットさんの名前を呼んだ。

……あれが、エリオットさん？

「・・・来ましたね」

セリューさんが冷たく俺たちに言葉を向ける。

「てめえら!! エリオットに何しやがった!」

「・・・私は、彼らの意思を尊重しただけです」

「チャンプさん」

激昂するチャンプさんに対して、ランさんが穏やかに話しかけた。

「私や彼らは、貴方に子供を殺された遺族や関係者です」

「!」

「・・・それだけ言えば、なぜエリオットさんがこうなったか、分かるでしょう?」

「てめえら・・・てめえら卑怯なことを!!」

チャンプさんはそう言つて、怒るが・・・ランさんとセリューさん以外は、に

こにこと、なぜか笑っている。

睨みつけてもないし、罵声も浴びせてない。見た目は怒っているようには・・・エリオットさんを傷つけていたとは思えない。

ランさんが続ける。

「彼らは貴方を殺しませんし、貴方に反撃もできません。・・・ただ、貴方と同じことを

しただけです」

その言葉に彼らに殴りかかろうとしたチャンプさんが止まった。

「貴方が今、感じているものは、貴方が私や彼らに与えたものです。辛いですか？ 悲しいですか？ 怒りを抱えていますか？ 許せないと思つていらっしゃるんでしょう？ なんで弟がこんな目に・・・なんて、思つていらっしゃるんでしょう？」

言葉の節々から怒気が籠つているのがわかる。

にこにここと笑つている人々が、口を開いて何かを言い始める。

「殺したいなら、殺してかまわない。これでやつと息子のところへいける」

「好きに殺せばいい、だつてお前はそうやって娘を殺したんでしょう？」

「そうやって、妹を殺したんでしょう？」

「私たちの大事な子供を、こうして奪つただらう？」

にこにここと、にこにここと笑いながら、そう話しかける。

「・・・わしらを殺したところで、もうお前の大事な弟は戻つてこないがの」

老人が、にこにここと、とても嬉しそうに笑つてそういった。

「お前の幸せを奪えて、もう満足だ」

遺族の誰かが言った言葉に、ぞつとした。

この人たちは笑顔で、本当に嬉しそうにそう語っている。

「チャンプさん」

ランさんがチャンプさんへと声を掛ける

「子供が大人にならないようにしていたなら、貴方の傍にはずつと子供のままの弟さんがいたじゃないですか？」

チャンプさんがランさんへと視線を向ける。

「貴方の弟さんは、貴方の理想そのものじゃないですか」

「そ、それは」

「結局貴方は、自分より弱い相手を虐げたかった……貴方を虐げた人間と、一緒なんですよ」

満面の笑みを浮かべ、彼はそう言い切った。

「……ラン、時間です」

「ええ。それじゃあ皆さん……皆さんの遺志は、受け継ぎます」

そう言うと、ランさんがセリユーさんを抱えて、帝具で飛び去っていく。

「ちや、チャンプさん！」

「……」

顔が青ざめているチャンプさんに声を掛けるが、何も答えない。

「……周りでは、何もしないまま、にこにここと人々が笑っている。」

人の恨みは、なんて恐ろしいものなんだろうか

「生きているのは、いけないことなのだろうか」

【視点：チャンプ】

あの時に言われた言葉が、耳から離れない。

俺の理想が傍にあるのに手を出さずに、他の子供に手を出したのは……
結局、俺が嫌っていた大人と変わらないと。

目の前には、ベッドで死んだように眠るエリオットの姿があった
……最初から、最初からこいつを、選んでいなかったのは……
……このまま生きてても実験台、もしくは殺すかの、どちらかだ。

エリオットの首に、手を添えた

【視点：タツミ】

エリオットさんは生きていた。．．．けれど、怪我が酷いことと、処置が遅かったこともあり、ほとんど植物状態になっていた。かろうじて生きているが、もしも延命をさせるならば、ドロテアさんとスタイリッシュさんの実験のような．．．

．．．人間ではなく、実験体としての道しか、残されていなかった。

いや、正確に言えばもう一つある。

．．．安楽死、というやつだ。

これに関しては、ドロテアさんから説明を受けて初めて知った。

「なんとかできないんですか」

「できません。医療技術にも限界があるし、何よりも本人の生命力がなあ．．．」

エリオットさんは子供の姿のまま生きてきた。だから、体力も人よりも少ないらしい。実験体にするにしても、本人の意識があるままかどうかすらも．．．

．．．リンネさんが、今日は休みにしてくれた。他のメンバーの人たちも、きつと休まなければならぬだろう。

特にアオイさんとコハルさんの顔色が悪かった。女の子にはあの有様は．．．いや、俺も結構きつかった。

．．．エリオットさんを暴行した、子供たちの遺族は、みんな笑ったまま連行されていった。とても、満足そうにしていたのを思い出すと．．．怖くてたまらない。

その復讐が正しいのかどうか……今の俺は分からない。

「……ランとセリユーのこと、気が付けなくてすまない。俺が、俺がもつとはやく気が付いていれば……」

翌朝になって、ウエイブが詰所にいた俺のところまでやってきてくれていた。

「ウエイブ、気にしなくていいのよ。隊長だって“気にするな”って言っていたじゃないの」

……詰所にそのまま宿泊していたスタイリツシュさんがウエイブを慰める。ドロテアさんも「そうじゃぞ」と同意してくれた。

「でも、ランのことだって……セリユーが、ずっともやもやしてたのが分かっていたのに、俺は……何もできなくて」

「コラ、そんなこと言わないの。仕方ないわよ……ランがまさか、チャンプが殺した子供の関係者だなんて。誰も知らなかったんだから」

「そうじゃぞ。妾たちも気がつかない。別にお前だけの責任ではない」

「……すみません。ドクターは大丈夫なんですか？」

「ああ、あたしは中立よ？ エスデス隊長はスタイリツシュだけれど、シユラは友人だも

の。だから、今回の件もどっちが悪いだのなんだのはないのよ」

「……スタイリツシユさんはこういう時もなんだか、いつも通りでちよつと安心してしまった。」

「……今は、いつも通りにしてくれるほうが、少し心強く見えてくる。」

「……あの、俺、ちよつとお見舞いもしようかなって」

「……あ、じゃあ俺が案内するぜ」

ウェイブを連れて、エリオットさんとチャンプさんの部屋へと進んだ。

扉を開けると……何かが揺れていた。

「……え?」

ぎしり、ぎしり、と、縄が揺れる音がする

「……チャンプさんが、首を、吊っていた。」

ぎしり、と音がして、首と胴体が離れる。

首の無い身体が床に落ちて、とれた首が部屋の中に転がった。

「……そのあとのことは、少しだけ記憶がない。

ああいつた死体は、初めてみた。

「……エリオットさんの首を絞めて、首を、吊つたらしい。

二人とも埋葬されたが、葬式に参加できたのはドロテアさんにオリヴァーさん、イゾウさんとシユラさんに、エンシンさんぐらいだった。

「……ほかの人は、参加できるほどに立ち直れてないらしい。

「……生きていちゃ、駄目だったんですかね」

「……」

「……俺は、もっと、生きていて欲しかったですよ。それで変わるものだって、あつたはずですよ。なのに」

「……兄貴から言わせりゃあ、自業自得なんだとよ」

「……リンネさんは、厳しい人ですね」

「……ほんと、親父とは似ても似つかねえよな」

シユラさんが静かに呟いた。

葬式が終わってから、俺は掃除やら家事をこなして……なんだか夜の帝都を歩きたくなつた。コハルさんたちにも顔を合わせ辛いし……何より、仲間が死んだことで動揺しているのだ。

……ランさんや遺族の人たちの気持ちだが、悪いとは思わない

でも俺は、チャンプさんやエリオットさんだつて、いい方向に変わることだつてできたと思うんだ。

許すことはできないかもしれないけれど、それでも……それでも……
……こんな終わり方は、嫌だ。

「タツミ」

聞きなれた声でした。振り返るとそこには……イエヤスとサヨの二人がいた。

「イエヤス、サヨ……!!!」

「おう、しけた顔してるな」

「会いたかったよ、タツミ！」
やつと二人と出会えてよかった。

・・・良かったのに

「タツミ、ナイトレイドに入らないか？」

「イエーガーズの人も入ってくれたの。あとは、タツミも一緒にこの国を救いましょう！」

・・・二人とも、ナイトレイドに入っていた。

いや、ナイトレイドは革命軍の部隊で、この帝国を変えるために働いているらしい。

・・・俺もそれは、とてもいいことだと思った。

けれど・・・

「タツミ！お前も一緒に行こう！」

「そうよ、タツミ・・・ナイトレイドは、国を変えるために活動してるの」

「・・・ごめん」

「何言ってるの！この国はおかしいのよ!？」

「そうだが、もう中から変えるのなんて無理なんだ・・・この国は腐ったやつらばかり

なんだ」

「・・・わかってる。でも、違うんだ」

俺は、イエヤスとサヨに語り掛けた。

「俺だって悪人は許せない。でも・・・悪人にも善人にもいろいろある」

二人に俺は謝ることにした。一緒に行きたいけれど・・・

「今の俺には、お前たちのいるところに答えがあると思えない」

転生者たちのそれぞれの今後の話

〔セシル視点〕

エリオットさんが私刑（リンチ）されて、チャンプさんに殺され、そのチャンプさんが首を吊った。

その事実がどうしようもなく自分にのしかかって潰してこようとしている。

・・・どうしようもなく悲しいし、それ以上に、コスミナ姉さんも同じ目に遭うかもしれない恐怖感が、自分の心に侵食してくる。

正直に言ってしまうえば、コスミナ姉さんがエリオットさんのようなことになってしまいうのが一番怖くて、恐くて、仕方がない。

コスミナ姉さん・・・いや、コスミナに対して、愛着を持ちすぎてしまったのかもかもしれない。

一緒に死ぬ覚悟はしていた

・・・でも、コスミナだけが傷つくことは、忘れていた。ああそうだ、コスミナだけが狙われることだってあるんだ。

「……もしも、もしもコスミナだけが、エリオットと同じ目にあってしまったら
なら
自分はその時、きつと相手を許せない。どんな理由があっても相手に復讐するだろう。」

「……セシルちゃん」

「姉さん、今はゆつくりしててよ。ね？」

「でも、チャンプちゃんもエリオットちゃんも」

「……もう誰も、死なせないから。ね？」

殺されるぐらいなら、正当防衛で相手を殺してしまえばいい。

コスミナ姉さんは……ただの被害者なんだから

【アオイ視点】

チャンプとエリオットが死んでも、何も思わなかった。だって子供に手を出していたのは本当のことだし、そういう復讐者もいるだろう。

エリオットが油断して、チャンプがそれを考えてなかった。それだけの話だ。

私はイズウの前に復讐者が現れたら殺すまでだ。

もちろん、イズウが返り討ちにするだろうけれども

ああ、それにしてもこれでエリオットがいなくなつて清々した。前々から殺すだけのんだの煩くて仕方なかった。

大事なイズウを殺させるわけがないだろう。

イズウはとて素晴らしい奴なんだから、少しぐらい“どうでもいいモブキャラクター”を殺してもいいだろうに。

転生前と同じく、頭の固い奴は嫌になるな

「アオイ殿」

「どうした、イズウ」

「・・・墓参りに行くんだが、行くか？」

「二人つきりですか？行く！そのあと一緒に何か食べに行かないか？」

「・・・そうだな」

ふふふ、イズウと二人でデートか・・・楽しみだな！

【コハル視点】

「おい、大丈夫か」

「・・・」

エンシンが声をかけてくる。大丈夫なわけがない。

あんな風に復讐されて、あんな風に死ぬなんて

私は、私はただ、生きるためにエンシンと生きて、海賊になるしかなかった!!私だつて綺麗に生きてたかった!

でも、でも、あんな風に、誰かに復讐されて、怖い思いをして、痛いことをされて死ぬのは嫌だ!

「・・・やだ。死にたくない」

「・・・そうかよ」

「やだ、あんな風に、死にたくない」

「・・・だったら、殺すしかないだろ」

「・・・」

「一度しか生きれないなら、全力で戦うまでだろ。死にたくねえならなおさらな」

エンシンの言葉が、心に刺さる。

殺さないといけない、殺さないと、殺される。いやだ、怖い、ちゃんと真面目に生きたい、普通に生きたかったただけなのに。

これしか生き方が無かったんだから、仕方ないのに

「さつさと立ち直れよ。いつもみたいにやかましくねえと、こつちも調子出ねえんだよ」
「・・・バーカ・・・」

【オリヴァー視点】

「ふむ、葬式も終わったが、まだまだ全員本調子じゃないのう」

「そうですね。皆さん、やはりお仲間が亡くなって悲しんでいる人もいますから」

ドロテアに対して、レモンティーとスコーンを出しつつ用意しておいた返答を答えた。

本当のところ、悲しんでいるのは一人か二人ぐらいだろう。悲しいよりも、自分や自分の大事な相手が死ぬ事に対しての恐怖感のほうが強いと思っっている。

別にエリオットとチャンプが嫌いかどうかというわけではない。

・・・ワイルドハントのメンバーは、リンネの言葉を信じるなら・・・シユラ以外は、原作通りか、原作よりも軽いながら罪を犯しているはずだ。

「しかしあのランが、チャンプが殺した子供の遺族関係者だったとはなあ」

「・・・驚きましたよね」

「オリヴァー、あまり驚いてないように思えるが？」

「驚いてますつて。もう何日も経過してますし。それよりもセリユーさんも離脱したほうが驚きですよ」

「・・・まあ、それはそうじゃな。ともあれ、あれだけ正義感が強いなら、遺族たちの意見を真に受けたのだろう」

「・・・そうですね」

チャンプがしてきた犯罪行為は、元をたどれば親による虐待が原因だ。一概にチャンプが悪いとは・・・言いにくい。

だがそれでも彼は子供たちを「痛めつけて殺した」のだ。

自分が忌避する、嫌いである大人と同じことをした・・・彼もそれに、気が付いたのだ。気が付いてしまった。

本当に子供が好きなら、自分のような経験をさせないように慈しむべきだった。

そういう意味では、狂い切れていなかったのかもかもしれない。

……原作よりも、幾分も、話ができるはずだった。

……エリオットはそのチャンスを全て捨ててきたのだ。

彼らがこういつた終わり方をしたのは……こうなるべきであったのだ。

「オリヴァー、難しい顔をしておるのう」

「……いえ、世の中つてやるせないですよね」

「そういうもんじやろ」

「……そうですね、どうにもならないこともありますよね」

【リンネ視点】

「お前は、本当に何も隠してないのか？」

「なんですか、いきなり」

帝具に化けているメフィストフェレスに俺は問いかける。しかし相手はいつものように余裕の笑みを崩さない。

「……他の奴の帝具は原典に無いものだ。それは分かる。しかしなんで俺には、お前が

「ついているんだ？」

「さあ？ 私はロッドバルトに頼まれただけですし？」

「・・・本当に何も隠していないのか？ 俺が病気になるっていた間に、シユラがお前を持つてきたらしいが」

「えへへ、本当のことですよ？ 彼が私を貴方のところに持ってきたから、貴方は時間を巻き戻して病気になる前になったんです」

「・・・本当に、何か、隠していないか？」

「いいえ、別に」

ああ、胡散臭い奴だ。

・・・まったく、食えない悪魔だ

「俺の、今、答えられること」

イエヤスとサヨの誘いを断り、連絡ができるところだけ教えて……その日は詰所ですぐに眠った。

本当は一緒に行きたかった。また三人で一緒に村に仕送りをして、ご飯を食べて、それで……三人で一緒にいたい。

それは間違いじゃない。その気持ちだって俺にはある。

……村のために、善良な民のために何かをするのは、間違いではないのだ。この国は確かに腐っている。

けれど俺は……

国が腐っていても頑張っている人間がいることも知ってしまった

民衆のために、誰かのために軍から離反してまで信念を貫いた人間がいることを知ってしまった

生きるために足掻いた結果、悪事をしている人間がいることを知ってしまった

正当な恨みだとしても、尽きない恨みを抱えてしまう人間を知ってしまった

・・・俺は、もつと人間を知りたい。

次の日、俺はリンネさんの執務室へとやってきた。案内してくれた侍女の人にお礼を言つてから、ノックをして室内へと入る。

リンネさんは執務室の椅子に座つて、書類を処理していた。
俺へと視線を向けて、彼は作業の手を休める。

「試験雇用期間が終わつたな。最後は慌ただしかつたが、どうだ？ 帝国がいかに腐つて
いるか分かつただろう？」

「・・・はい」

「決まりだな。お前は民衆のことを大事に出来る人間だ。帝国にいるべきではない・・・
こんなところにいたところで、自分の精神を削るだけだぞ」

「確かに、試験雇用期間中・・・きつかつたですね」

「それなら話は早い。答えを聞かせてもらおう」

「リンネさん、俺……」

一呼吸おいて、俺は自分の答えをリンネさんに伝えた。

「ワイルドハントに入ります」

俺の言葉を聞いたリンネさんは珍しく呆気にとられていた。すぐに眉を顰めて俺を睨みつけて「もう一度言ってみろ」と聞き返してきた。

「……俺は、ワイルドハントに入りたいです」

もう一度言い直すと、リンネさんは小さくため息を吐いて片手で顔を隠すような仕草をしていた。

「……いいのか」

「はい」

「正義の味方じゃないぞ」

「知ってます」

「悪人ばかりだ、ろくでもない奴等しかいない」

「確かに、善人というには少し困った人が多いですね」

少しだけ彼らのことを思い出して苦笑いをしてしまう。

そう、善人ではないのだが・・・すくなくとも、全部が悪人でもない。

「……………この国は腐敗している」

「……………それなら、俺たちが治せばいい。できるかどうかは、分かりませんが」

もしかしたら失敗するかもしれない

イエヤスやサヨがナイトレイドに誘ったように、外から壊してしまうのが正しいのか
もしれない

「敵は多いぞ。戦闘だけじゃない、政治も関わってくる」

「強くなります。元々俺はブドー大將軍みたいな人に憧れてましたから。政治は・・・頑
張ってみます」

「……………ワイルドハントの有様も歪んでいる。抑止力が無ければ無法者の集団になる」

「もしもそうになったら、俺が止めます」

止めれるか分からないが、止めれるように

俺はここで、強くなりたい

「……………」

「……………俺は、ここを選びます」

リンネさんは俺への詰問を終えると、黙り込んでしまった。

確かに俺はリンネさんの言うとおり、今のこの帝国で働くことは向いてないだろう。

国を変えるために外から壊したほうがいい可能性だつて捨ててきてない。

でも、俺はここで学んだことがあつて・・・ここにいたいと思つたのだ。

「リンネさん、俺、確かに今の帝国で働くのは向いてないかもしれないかもしれません」

「・・・じゃあ、なぜわざわざこんな組織に残るんだ」

そう聞かれてしまった。

・・・うまく説明できるかは分からないけれど、俺が思つたことを伝えてみよう。

「俺は、最初は善悪つてはつきりしたものだと思つてたんです。良い奴と悪い奴がいるだけだつて。・・・実際はそうじゃない、誰だつて良いところも悪いところもあるつて気が付いたんです」

リンネさんは静かに俺の言葉を聞いている。俺もゆっくりと、頭の中で喋ることを整理してから、自分が考えてたことを言葉へと変換する。

「・・・世の中は、いや・・・人間は、はつきりしてないほうが多いんだつて気が付きました」

「・・・」

「悪人だつて、家族や友人を大事にするし・・・善人だつて、誰かを殺すほど憎んだり恨んだりする」

俺はここにきて、それを知つた。

たった一面しかないなら……悪人は悪人で、善人は善人という簡単なものだったら、もっと楽に考えただろう。

「ワイルドハントで試験雇用されて、俺はいろんなことを知ることができました。もしも、最初に会っていたのがイエーガーズの人たちや……革命軍の人だったら、違っていたかもしれないね」

それだけはリンネさんに伝える。

「でも俺が最初に出会ったのがここだったから……もつと俺は、学ぶことがあります。だから、お願いします」

それだけ伝えて俺はリンネさんの返事を待った。

しばらく……どれぐらい経ったか分からない。だが、リンネさんは重い口を開いて「わかった」とだけ答えた。

「……そこまで言うなら、かまわない」

「！」

「ワイルドハントに、入隊することを許可する」

ワイルドハント本格始動編

「双子の片割れが愉悦しながら私に連絡してきた」

私の双子の片割れは株式会社経営者である。

細かく言えば、最近流行の『異世界転生』とか『異世界トリップ』とやらを実際に商売にしているのだ。

なんとというか、「それって稼げるのか？」と思ったりしたが、案外稼いでいるらしい。中には他人の命でチートを得ているお客さんもいるとかなんとか。

いや、人間社会っていつの時代も闇が深くて最高ですね

・・・というか、株式会社ってことは株式あるんですね・・・

株主がいるというものにわかに信じがたいところではあります。

ん？ああ、ご紹介が遅れました。

私、メフィストフェレスと申します。

真名はもう少し長いですが、短い名前のほうが世間では馴染みがきつとあるでしょ

う。

ゲーテ氏の『ファウスト』が一番有名でしょう。実はドイツに伝わる伝説が元なのですよ。ファウスト伝説と呼ばれるものですね。

いやー、あの頃は楽しかったですよ。結末に関しては黙秘しますが。

ファウスト伝説を知らない？教えてくれ？

貴方の目の前にある機器はなんでしょうかねえ・・・検索エンジンって知ってますか？

閑話休題

片割れであるロッドバルトとは一緒に暮らしているわけでもないのですが、好きな時にお互いの家を出入りする程度の仲です。

私が秋葉原でメイドカフェで楽しんでいるところ、珍しく電話をかけてきました。

『くくくくつ、メフィストですかあ？今どこにいます？』

「絶賛メイドカフェ満喫してます」

『メイドカフェって、自宅にメイドいるじゃないすか』

「自宅のメイドとメイドカフェは別物ですよ。それで、電話なんて珍しいですね」

『ああ、それです！ちよつとしたお願い事がいくつかあるんですよ。どうせ暇ならちよこつと手伝ってください』

「いいですよ。それで私はどこに行けばいいんですか」

『私の自宅の自室でいいですよ。ちよつとそこにいますから』

「はいはい、すぐに行きますよ」

ロッドバルトが笑いながら楽しそうに愉悦している時は、大体めちやくちや面白い事件が起きている。

それが分かっていたので私もすぐに向かいました。

私もそういう面白いことは死ぬほど好きですからね。

ロッドバルトの自宅に上がり、自室に入ると見慣れない内装・・・どこか違う空間と繋がれていることはすぐに理解しました。

どうやら貴族階級か、それ以上の人間が使っている部屋・・・置いている調度品や内装からして、現代ではないみたいですね。

ロッドバルトと見慣れない人間の子供がいました。子供のほうは褐色で顔に十字傷

があるようですが・・・ふむ、着ている服の生地は中々上質なものですね。

あと、気になるものはベッドの上には魔されている子供でしょうか？

「ようこそ来てくれましたね！ほら、ご挨拶をしてください」

「・・・」

十字傷の子供は私を警戒しているようです。

かといって、ロッドバルトも警戒しているのか、距離を離して立っていましたか。

「それをお願い事とは？」

「1つ目はベッドで寝込んでいる子供を治療してほしいのです。魔術でできますよね？」

・・・それを言えば、片割れも魔術で治療できるはずだ。

しかもロッドバルトのほうが残念ながら魔術のセンスは私より上である。認めたくないというか、本当にそこらへんは腹が立ちますか。

「2つ目はこのベッドで寝ている子供の武器代わりになってほしいんですよ」

「・・・はあ？」

「ちゃんと説明はします」

「なるべく短めでよろしくお願いします」

かくかくしかじかまるまるうまうま

大体の経緯をロッドバルトから聞きました。

どうやら会社のキャンペーンと称して転生者を集めて右往左往するのを楽しんでいた。

転生者の一人が流行り病に掛かった。

そして、転生者が殺す予定の相手が・・・ロッドバルトと契約した結果、私が『帝具』とやらになってくださいってことでした。

「いやいや、なんで私が『帝具』として監視を？」

「だって私と彼の契約がバレたら面倒ですし、バレたらちやちやつと忘却魔術使っていくんですよ。出来るだけ今日のことは秘密にしておきたいのですので」

「それはいいですが、私は武器のままですつと過ごせと？」

「いえ、今の姿を晒してもいいですし、適当に騙して、疑心暗鬼になっている転生者さんを裏で笑っていてください」

「ゲス極まりないですね、そういうの大好きですよ」

「ですよね！貴方なら分かってくれると思いました！」

「イエーイ！」

「イエーイ！」

ロッドバルトとハイタッチをした後、ロッドバルトと契約したという少年へと視線を移した。

「貴方も、よくまあ……悪魔と契約しようと思いましたがね」

「……」

「いえいえ、責めるつもりは毛頭ございません。私も悪魔ですし、悪魔と契約したい願いがあある人間なんて星の数ほど存在してます。だから気に病むことなく、契約したことを誇りに思ってください」

「……そうか」

「さてと、私は適当に認識改竄の魔術でもかけておきます。これで私が『帝具』になっても、誰も不思議に思いません。話を合わせてくださいかね？」

「わかった」

「そういえば……貴方の名前、聞いてませんでしたね。貴方のお名前は？」

「……シユラ、でいい」

★現状把握 2

最新話時点で生存している人間（帝具人間含む）を記載しております。

【秘密警察ワイルドハント】

帝国政治班所属組織

★リンネ

チームリーダーであり、事務作業も調査まとめや内政的な業務なども一人でこなしている。幼少期に流行り病で死にかけていたことがあるのだが、本人はあまり覚えていない。

だが、その直後に帝具「時間逆行メフィストフェレス」を手に入れている。

悪人が嫌い過ぎて、原作軸を狂わせてでも先に処分したり、ワイルドハントの原作キャラメンバーを信用してないし信頼もしてない。

★シユラ

副リーダーで現場担当。リンネから当たりが強いが、本人は兄を慕っている。

好感度はほぼほぼMAXである。

前回、リンネを病気から救うためにロッドバルトと何らかの契約をしたことが判明し

た。契約内容などは不明。

★タツミ

本来の「アカメが斬る！」での重要人物。

この度正式にワイルドハントの隊員として加入した。帝国の闇に気が付いているし、本人も革命軍のように外から壊すべきかもしれないと悩んでいる。・・・が、それでもここでもっと学んでいきたいと決意している。

エンシン

イゾウ

コスミナ

ドロテア

コハル

アオイ

セシル

オリヴァー

《備考》

チャンプとエリオットの死亡、イエーガーズのランとセリユーがイエーガーズから離脱して革命軍（ナイトレイド）に合流したことで転生者組の精神がやや歪む。魂が濁るといいますか、とにかくちよつとやばい。

原作正規メンバーはそれなりに割り切っているようである。

【特殊警察イエーガーズ】

帝国エスデス軍所属組織

★エスデス

エスデス軍を指揮する女将軍。帝国最強という肩書は伊達じゃない。

ランとセリユーがまさかの離脱したことによって、オネスト大臣にちよつと怒られた。でも本人は「残念だったけど、戦いがいがある」とめっちゃポジティブ。

悲しいとかそういうのはあんまりないです。だって、戦うほうが楽しいんですもの。

★ウエイブ

イエーガーズ所属の海軍出身隊員。原作においてもそれなりに重要な立ち位置に存在している。

ランやセリユーの事情や心の闇にちゃんと踏み込めずにいたことを悔いている。敵

に回っても恐らく説得から入る可能性が高い。

タツミに関しては良い友人として付き合っている。

クロメ

ボルス

D r. スタイリツシユ

【帝国側】

★オネスト大臣

「アカメが斬る！」の諸悪の根源と言われる外道畜生。

タツミからも警戒され、リンネからも命を狙われているが本人はわりと平然としている。シユラに関してはそれなりの評価ではあるが、リンネへの評価のほうが実は高い。

イエーガーズから離反者が出て、また食欲がなくなつたとボヤいている。

★皇帝陛下

今後の出番予定有

★ブドー大將軍

今後の出番予定有

サイキユウ

ドウセン

コウケイ

ヨウカン

中庭の番人／宮殿警護専門の帝具使い

ノウケン将軍

シヨウイ内政官

ボリック／現「安寧道」幹部

カイリ／暗殺部隊リーダー

スズカ

メズ

シュテン

イバラ

【ナイトレイド】

★ナジエнда

ワイルドハントに対しての認識はイエーガーズと同等。帝具使いであることやその経歴に対しての警戒はしている。

しかし、行動方針の一部やリンネについては評価している。

帝国側なので敵対すれば応戦しろとメンバーには言っているものの、リンネの大臣嫌いは知っているので出来れば革命軍に味方してほしいと思っている。

★アカメ

リンネとシユラのことを帝国暗殺部隊時代から知っている。シユラはともかく、リンネの大臣嫌いや、帝国に蔓延る悪人への憎悪を知っているので味方になってほしいと思っている。

★イエヤス

ナイトレイドに入ったタツミの幼馴染。タツミと再会したものの、ナイトレイド入りを断られてめっちゃショック。

だが、タツミが熱血タイプで自分たちと志はきつと同じだという自信はあるため、今後も仲間に入って欲しいと勧誘していくつもり。

★サヨ

ナイトレイドに入ったタツミの幼馴染。タツミと再会したのだが、ナイトレイド入りは断られてしまい・・・

だが、彼女もイエヤスと同じく諦めるつもりはないようだ。

スサノオ（帝具人間）

マイン

レオーネ

チエルシー

ラバツク

シエーレ

ブラート

ラン

セリユー・ユビキタス

コロ／ヘカトンケイル

【現状所属組織不明】

原作帝具使いを含んだ、所属組織不明の生存キャラクター

今後登場または再登場予定のキャラも含みますが、実際は全員分の余裕があるかどうかは不明。

★エア

ワイルドハントに救われた少女。無事に救われたものの、男性不信に陥っている。エンシンについては特に悪い人という認識はぎりぎり持っていない。

コハルちゃんの姿を見て、その強さに憧れているのはここだけの話。

★ルナ

ワイルドハントに救われた少女。

片目が失明してしまったものの、命は救われた。だが、先端恐怖症を発症しているよ
うで、現在は療養している。

★ファル

ワイルドハントに救われた少女。

足を折られたが、一命はとりとめた。現在はリハビリをしているが、自分の力不足を
痛感しているらしい。

スピア

ホリマカ

ザンク

リヴァ

ニヤウ

ダイダラ

ヌゲ

※革命軍の陸型危険種を操る帝具使いや、帝国側の飛行型危険種を操る帝具使いについては未定

※安寧道の教主は第三勢力のため、未定です

【悪魔】

★ロッドバルト

諸悪の根源。株式会社レイク・オブ・スワンの社長でもある。

リンネが流行り病で死にかけた際に、どういう因果なのかシユラとなんらかの契約をしたらしい。

★メフィスト

ロッドバルトとは双子。リンネの「時間逆行メフィストフェレス」はこいつである。

ロッドバルトに頼まれて、リンネとシユラの監視をしながら愉しく様子を観察している。

「俺の帝具は」

秘密警察ワイルドハントにタツミを加入させることにした。

本来ならばナイトレイドに入るべき人間だったが、本人がどうしてもここがいいと言つて聞かない。

仕方ないので入隊させることにした。

・・・どうせ悪人を先々始末して、原作から逸脱しているのだ。

それならばタツミを手元に一時期置いて、内部から悪人を殺させればいいだろう。

どうせそのうち、ナイトレイドへと寝返るはず・・・

タツミという人間は、それだけの正義感と熱血の持ち主だからだ。

こんな帝国内部で最後の決戦までいるはずもない。現実に耐え切れずに、外部から壊すことを最後には選ぶはずである。

・・・それでいい。

むしろ、そうでなくてはいけない。

「兄貴、タツミの奴に帝具は持たせないのか？」

「持たせる。こつちにこい」

「は、はい！」

シユラもついてくるらしい・・・面倒だな。まあいい。

タツミを連れて、宮殿内にある帝具保管室へと向かった。何人か侍女や兵士とすれ違ったが、相変わらず大臣の息子として恐れているらしく、表情が硬い者が何人もいる。オネストやシユラと同じように見られるのは気に食わないが、言ったところで変わるわけもないだろう。

帝具保管室に現在保管されている帝具は仮面の帝具「超力噴出バルザック」ともう一つ・・・原作では見かけなかった帝具の二つのみとなっている。

ダイリーガーや芭蕉扇はセリユー・ユビキタスが革命軍側に寝返った際にそのまま奪っていったため、あれらは回収できていない。

ベルヴァーク、スクリーム、ブラックマリンはエスデス將軍管轄の三獣士が持っているし、他のいくつかの帝具も所有者がすでにいる状態だ。

「大体の奴が持つてるもんなあ・・・この仮面はどうだ？」

「いまいち・・・もう一つはどんなものですか？」

「……これだな」

保管室の奥にかけられていた剣をタツミに見せる。

帝具の一つらしいが、原作に出てきていない帝具のせいかな、性能はよくわかっていない。

「へー、剣の帝具か。タツミにびったりだな」

「だが、鞘から抜けないんだ」

俺がそう言うのと、タツミとシユラは顔を見合わせて、俺へと視線を向けた。

「……所有者と認められなければ、鞘から本体が抜けないんだろう」

俺はすでにメフィストフェレスを持たされていたから抜けなかったが、タツミにこれが合わないならば、帝具無しで活動をしてもらうことになるだろう。

そうでなくとも、タツミは成長すれば將軍クラスの器を持っているのだからかまわな
いとは思うが。

「それじゃあ無理だったら抜けないんですか!？」

「物は試しってやつだな」

「抜けなかつたら嫌だなあ……俺も折角帝具が持てれるなら持ちたいですし」

「帝具つてのは相性があるもんかな、兄貴?」

「……そうだな」

俺の帝具は、本当は帝具じゃないがな。

相変わらずメフェイストはシユラやタツミが見えないだろうと、部屋の机に座ってこちらを眺めている。

腹が立つから持っているレイピアで刺し殺してやりたいが、我慢しておこう。

「俺が試しに抜いてみよう」

ぐい、と鞘から本体を出そうとしてもビクともしない。鞘から本体が抜けないのだ。

これはシユラも同じらしく、シユラも同じようにしてタツミに見せてみた。

「ほらな？どんなに力を入れても抜けないだろ？」

「そうですね・・・」

「つつーわけで、お前も抜いてみろよ。抜けたらそいつはお前のもんだぜ」

「・・・や、やってみますね」

タツミが帝具を受け取り、鞘から本体を抜こうと構えた。

ス・・・と自然に抜ける。

現れた刃は夜闇を思わせるような、不思議な色合いの刃であった。

だが、不思議とずっと見ていられる・・・夜空の色。とても美しい刀身だ。

「……… 抜けました！ 抜けましたよ俺！」

「すつげえな！ へえ、こんな刃なのか。初めてみたぜ」

「…… 本当に抜くとはな」

本当に抜けるとは思ってなかった。

原作にも無いような帝具なのだから、タツミが使えるわけがないと思っていたのだが……

……これも原作から逸脱した影響か？

まあいい。使える帝具ならば使ってくれたらいいのだ。

「……すごい綺麗な刃ですね」

「刀身の色合いも変わってるよなあ。そういや、これって名前なんだっけか」

シユラに問われて、その帝具の名前を俺は答えた。

「星霜千巡（せいそうせんじゆん）アルファルド、それがその帝具の名前だ」

帝具の名前だけしか図鑑に載っていない。

少なくとも、ここ数十年、数百年の間使われていないらしく、ろくな文献が残っていないのだ。

・・・原作に無い帝具とは言え、コハルたちが持っている帝具は、まだ図鑑に記載されていたり、古い文献に記載されている。

これは転生させた悪魔の辻褃合わせなのか、そういう帝具があるという“設定”なのかは分からないが・・・

少なくとも、性能も何も分からない帝具なのだ、タツミが持っているアルファルドは・・・

「へえ、アルファルドかあ。いい名前ですね」

「今日からこいつの持ち主がお前だぜ。帝具が持てて良かったな」

「・・・」

「はい！今日からこいつと一緒に頑張ります！」

「私はあいつを信用しない」

タツミはエンシンとコハルと共に帝都のとある場所にやってきていた。とある場所・・・というよりは、リンネが最前にいる療養所である。

どうやら以前にエンシンたちが助けた少女たちが療養しているらしいと聞いて、タツミが進言して行くことになったのだ。

「いらつしゃい。あの、ファルちゃんたちはリハビリ中で・・・」

「ほら、果物持つてきたから、三人で食べなさい」

コハルがエアに果物籠を渡して、タツミの手を引いた。

「えっと、俺・・・ワイルドハントに新しく入ったタツミって言います！よろしくお願ひします！」

「はいっ、えっと、エアって言います。よろしくお願ひしますね、タツミさん」

「んで、お前はなんで来たかったんだよ」

「えっと、エンシンさんたちが助けた人って、どういう人たちがいるかなって知りたくて・・・」

エンシンの言葉にタツミは素直に答えて「今は色んな人に会いたいんです」と付け加えた。コハルは笑顔でそれにこたえるが、エンシンはバツが悪そうに顔を逸らすのであった……

ところ変わって、帝都のメインストリート。

イゾウとアオイ、コスミナとセシルの4人が見回りをしていた。ドロテアとオリヴァーはオネスト大臣に何かしら頼まれたらしく、二人は見回りに参加していないようだ。

イゾウとコスミナがあたりを散策する間、アオイとセシルの二人が……会話に興じていた。

「……平和だね」

「今のところはな」

短い会話の中に、色々な意味が込められている。

そこには今後の展開……この世界で言うところの未来に何が起ころるか、ということだ。

「リンネさん、何か隠しているのかな。僕らと協力してないもんね」

「……対応があまりに厳しいが、エリオットのことを考えると私たちも危ないかもしれ

ない」

「えっ?」

「リンネは私たちも悪事を働いていると思つたら、見殺しにするか、殺すつもりなんじゃないかと」

アオイの言葉にセシルの表情が強張つた。

「……私は、あいつのことは信用できない」

「……アオイさん」

「あいつの暗殺も私は視野に入れてる」

「!」

“ 暗殺 ”

その言葉にセシルは言葉を失つた。

同じ転生者相手に、アオイは「殺す」と言つたのだ。

「……セシル、お前も自分の大事な相手を助けたいなら……それなりに覚悟をしたほうがいい」

「……」

セシルの視線は自然に、コスミナへと向けられる。彼女は今、イゾウと何か話しているようだが、とても楽しそうに見える。

「……お前だつてコスミナが大事だろう？」

「……うん、大事だよ」

ナイトレイド本部にて

「……私もランも、遺族の皆さんに国を変えて欲しいと頼まれたから、ここにいるだけです」

セリユーは短くそう答えて、ナイトレイドのメンバーたちにお辞儀をする。そしてコ口を引き連れて、宛がわれた自室へと戻っていった。

彼女の対応に怒る者、心配する者もいたが、ナジエンダは「入ったばかりだから、あまりかまつてやるな」と告げる。

「入つてくれて助かった。こちらは1人でも多くの人間が欲しいところだ」

「いえ、我々もあのままいることはできませんでしたから」

ランの言葉にナジエンダは「それもそうだ」と納得した。

あのまま復讐したところで、ワイルドハントとイエーガーズの軋轢もあつただろう、何よりも遺族たちの気持ちを踏みにじることになる。

「さて、今回は解散だ。タツミのことは……イエヤスとサヨに任せる」

「ああ、今度こそ、タツミにOKって言わせてやるぜ！」

「うん！タツミもきつと分かってくれるもんね！」

彼らの様子を眺めながら、アカメは一人、フードを深く被ってそこから離れた。

アカメがやってきたのは帝都のとあるお店。

裏路地にある小さな店だが、雰囲気はとても良い場所である。アカメは帝国時代から、この店を使っている。

使っているというよりは……とある人物と会うために使っている。

「……」

アカメは店に入るなり、店内を見回した。カウンターの席に馴染みの姿を見つけて、隣に座る。

「……リンネ、久々だな」

「……また来たのか。指名手配犯が暢気なものだな」

そう言いながらも軽口をたたく彼らに、マスターが静かにドリンクとつまみのおかずを出した。

「……革命軍への資金提供、感謝する」

「毎回言っているが、厭きないか？俺はそんなことはしてない」

「素直じゃないな、お前は」

「違う」

そうして二人で静かに話し続ける。

「……お前は自分の父親にも、あのエスデスにも対抗している。本格的に革命軍に来ないか？」

「何度も言っているが、今は行けるわけがない。この立場じゃないと悪人を殺せないだろう」

「……リンネ、シユラたちが心配なのか？」

「……あいつらは悪人だ。メンバーの半分は確実に。俺が目を見れば何かするかもしれない。だから無理だ」

そう応えるリンネにアカメは言葉に詰まってしまふ。

「……そんな彼らを、離れた席からこっそりと見ている者がいた。」

「……」

シュラが、こつそりとそこで二人の様子を見ていた。

「人には見えないものが見えている」

私の名前はアカメ、以前は帝国の暗殺部隊で働いていたのだが、今はナイトレイドで革命の手助けをしながら暗殺家業をしている。

・・・少し昔のことを話すとしよう。

私は幼い頃から、他人には見えないモノが見えていた。それは真つ黒な塊だったり、角の生えた赤い肌の生き物だったり、様々だ。

最初はみんなが見えているものだと思つて振舞つていたせいか、両親や村人から気味悪がられてた。・・・むしろ、私がクロメと共に親から帝国に売られたのはそれもあつたらう。

その見えないモノ・・・例えば世の中と言えば『化け物』『怪物』『妖怪』、そういった類のものなのかもしれない。

それは私のことをからかうこともあれば、興味深そうに眺めることもある。優しくしてくれるモノもあれば、騙し打ちのように攻撃してくるモノもいた。

・・・私の周りは、誰も彼も、私と同じモノが見えない。

幸か不幸か、そういつた存在を相手にしながら暗殺者として育成されたことによつて私はかなり鍛えられた。

危険種だけでなく、敵対組織の人間だけでもない、誰も見えない『ナニカ』を相手に一人で戦うこともよくあつた。

任務で帝都の宮殿に滞在していた頃・・・リンネと出会つた。

ブドー大將軍と鍛錬をしているところへリンネがやってきたのだが、彼の傍には短い角の生えた紫色の髪の子がいた。

「・・・！」

今まで見たことがないぐらい、『怪物』の中でも強い気配がした。

心臓の鼓動が早くなるほど緊張してしまい、向こうも私に気が付いたらしい。

唇に人差し指を当てて、その男は私にウイंकをしてきた。

「どうした？」

不意にリンネに声を掛けられた。

「大丈夫？ 鍛錬で疲れちゃった？」

「アカメ、疲れてるなら早く休んだほうがいいよ」

仲間たちにも心配されてしまったので、適当に誤魔化して私はその場をすぐに離れた。

・・・離れたが、あの男はついてきていた。

「珍しいですね。認識障害の魔術を使っていたのに私のことが見えるなんて。うーん、魔術のレベルでも落ちちゃいましたかね？」

「・・・お前はいつたいなんだ？」

少しだけ距離を離して私は男に尋ねる。そいつは軽く「帝具ですよ。リンネ様の所持する帝具、メフィストフレレスでございます」と説明をした。

・・・すぐに嘘だと分かった。

父さん・・・ゴズキが当時所持していた帝具である村雨とはまるで違う。

「・・・嘘だ」

「あ、分かりました？ やはり私が見えるだけありますねえ」

危険な存在なのは、雰囲気に分かる。今まで私が出会ってきた、私にしか見えない存在の中でも、背筋が凍るようなものを感じた。

・・・人を害するモノだ。

「おい、そこで何してんだよ」

聞こえた声に振り向くと、先ほどであったリンネと瓜二つの・・・顔に十文字傷がある男がいた。

その男の近くにも、メフィストフレスと同じ雰囲気のある男がいる。大きなヤギのような角が生えて、翼が片方だけしかない銀髪の男だ。

「っ・・・!」

「お、もしかして暗殺部隊の奴か?へえ・・・上物もいるじゃねえか」

リンネと瓜二つの顔をした男がすぐに私の近くに近づいてきた。・・・が、すぐに誰かが私の背後からやってきたようだ。

「シユラ、何をしてる」

「げっ・・・んだよ、兄貴か。こいつ、暗殺部隊の奴だろ?珍しいからよ。薬漬けにしないみてえだから・・・」

「何かをする気だったのか」

「・・・珍しいから近くでみただけだろ」

・・・その時に、シユラがリンネの兄弟であることが分かった。

それと同時に、メフィストフェレスと銀髪の男は愉快そうにクスクスと笑っている。どうやらこの二人のやりとりをみて楽しんでいることは分かった。

「・・・暗殺部隊のアカメだったな。あまり宮殿内をうろつくな。休むならさっさと自分の宛がわれた部屋に戻れ」

「・・・分かった」

「シユラ、この後に鍛錬があるのを忘れているようだな。少し本気で相手してやる」

「殺すつもりかよ!？」

彼らのやりとりを少し眺めて、すぐに部屋に戻った。

走って、走って、部屋に滑り込んで一息ついて・・・顔を見上げたら、あの銀髪の男とメフィストフェレスが自室にいた。

「並行世界ともなると、同一存在でも個体差が出るんですね。まさか我々の認識阻害の魔術も看破するとは・・・」

「ロッドバルト、どうします？面白そうな人間だと思えますが」

「っ!!」

ああ、これだから人に見えないモノが見えるのは・・・嫌なことばかりだ。

奴等に……メフィストフェレスとロッドバルトで出会ったことで、私は奴等から真実を聞かされた。

これから私が辿る道も、これから私が立ち向かうべき苦難も。そして私の半生は、他人にとつての物語だと。

実に愉快そうに、悪魔と名乗った二人は私に語った。

「ああ、今ならサービスで契約してもいいですよ？クロメさんと一緒に幸せに暮らすのも有りですよ。誰だってそんな面倒なことはしたくないし、危ないことはしたくないでしょう？メフィストフェレスの名にかけて、クロメさんと貴女が一生幸せに暮らせるようにサービスいたします。」

「もしくは誰にも負けない力はどうでしょうか？今までだって死んだ仲間はいたでしょう？ならば死なないために相手をすぐに殺してしまえる圧倒的な力を手に入れてもいいでしょう。それならきつと、全部守れますよ？どうです？」

悪魔たちの言葉はとても甘美な言葉だった。

これから仲間がもつと死んで、クロメと離れ離れになって、民のために戦ってもどんな仲間が死んでいなくなる

それが本当なら、本当に未来に起こることなら……嫌だ。

「せっかく我々の魔術を看破できるほどの能力があったのですから……これも縁ですよ。ね、ロッドバルト」

「そうですよ。これも何かの縁です。どうですか？」

「私は……」

……嫌だけど、こんなズルをするのは、もつと嫌だ

「私は、お前たちの力は借りない」

「……おや、借りないそうですよ、ロッドバルト」

「これはこれは、意外ですね」

「私は……私ができることをするまでだ。」

クロメのことを考えると辛いが、それでも私はこいつらの言葉に耳を傾けるわけにはいかない。その誘惑に乗るわけにはいかない。

「今もそうですが、人殺しの業からは逃げられませんか？たとえ革命軍に行つたとしても、仲間を大事だと思つていたとしても、貴方の才能は人殺しに向いていることに変わ

りはありません」

「仲間を思っただけでも、民を思っただけでも、結局貴方は人を殺すことしかできないんですよ？ そのうち妹を殺すかもしれないのに、本当にいいんですか？」

そうかもしれない、私は、人を斬ることで幸せになると思っている。

自分にできることはそれしかないと思っただけだ。

「生きていく限り、私は業を背負い続ける。悔いたりしない、嘆いたりしない。例えその先に何があったとしても」

・・・私の人生が、他人にとってのただの架空の物語として俯瞰されていると、悪魔たちに教えられた。

「誰かに責められても、誰かに馬鹿にされても、これは私が選んだ、私の人生だ。」

・・・長くなったが、それが私の今までの半生だ。

結局、私は革命軍に寝返ったし、クロメとは離れ離れで……いつかは殺し合うかもしれないことになってしまった。

「リンネ、それじゃあな」

「……」

リンネに声を掛けて、席を立つ。リンネの傍にいるメフィストがにつこりと笑うが、私はすぐに視線を逸らして店から出た。

……リンネはずっとあの悪魔に付きまとわれている。

私に何かできることがあるればいいのだが……いや、できることからやっ歩いていくしかない。

「尊敬する人のかっこ悪い姿なんて、みたくない」

【タツミ視点】

今日はイゾウさんとエンシンさんと剣術の鍛錬をしている。エンシンさんは暇つぶしだと言っていたものの、ちゃんと付き合ってくれているのでこちらも助かった。

俺は帝国軍式の剣術だけなので、イゾウさんやエンシンさんのような剣術を学ぶのはすごく勉強になる。

「お前、真っ直ぐすぎるんだよ。もうちよつと変化球覚えろつての」

「吸収力が早いでござるから、どうせなら格闘技もシユラ殿やリンネ殿から教わると良いだろう」

「はいっ！」

「イゾウ！差し入れをもってきたぞ！」

「セシルちゃんを作ってくれたんですよ〜！」

「皆さん、休憩しましょう」

アオイさんとコスミナさん、セシルさんがやってきた。

セシルさんは俺とあまり変わらない年齢の同性だが、わりと料理はできるらしい。

俺もできるけど、あくまで軍で役立つためのものだから、趣旨が違うしな・・・

「おー、レモンの蜂蜜漬けか。それにそっちはおはぎ・・・」

「これはイゾウに準備したものだ。食べるな」

エンシンさんがおはぎに手を伸ばしかけたのだが、すぐにアオイさんが皿を動かして、イゾウさんへと手渡した。

「量が多いから、皆で食べると良いと思うが・・・」

「イゾウ、いいんだ。私が心を込めて作ったものを万年発情期のエンシンなんぞに食べさせたくはない」

本当にアオイさんは手厳しいなあ・・・

「アオイ殿、どうせなら皆で食べたほうがいい。せつかくアオイ殿料理は美味しいのだから」

「!・・・うまい、美味しい、のか・・・それなら仕方ない、分けても大丈夫だな」

ちよろすぎやしないか・・・?

「タツミちゃん、ほら、あーん」

「えつ、こ、コスミナさん、自分で食べれますよ」

「コスミナちゃんが食べさせてあげます!」

コスミナさんが腕に絡みつくように抱き着いてきて檸檬の蜂蜜漬けを口元に持つてきた。それよりも腕に胸が、柔らかい……

「姉さん、タツミ君が困ってるから」

「え〜」

「ね？困ってるよ。タツミ君は慣れてないんだよ」

「むー……セシルちゃんが言うならいいですけど、食べさせるのはいいですよね？」

セシルさんのおかげで腕は解放されたが、「あーん」はまだやりたいらしい。

ちよつと恥ずかしいが、おそるおそる食べると喜んでくれた。

「お前たち、ワイルドハントの人間だな」

声が聞こえてきたので、声の主を探すと、3人ほどの黒い軍服らしきものを纏った男たちを引き連れて女性がやってきた。

長い髪とスタイルの良さを引き立てる白い軍服の女性で、好戦的な雰囲気を漂わせている。

「これはこれは……エスデス将軍か。イゾウに用事があるなら私が代わりに応えるが」
「別に誰かひとりに、というわけじゃないが……強いて言えば、その新入りの隊員に興

味がある」

アオイさんの威嚇を無視しながら、エスデス將軍と呼ばれた女性が見てきた。

「先ほどの鍛錬を眺めていたが、中々の逸材だな。どうだ、うちの三獣士と相手にしてみないか？」

「え？あの日……」

「リヴァ、お前は元將軍だろう。相手してやれ」

「……はい」

リヴァと呼ばれた中年の男性が前に出てきた。

「つていうか將軍!?こんな若い女性が將軍というのも驚きだが、まさか元將軍の人と今から鍛錬すんのか!？」

「エスデス様は特殊警察イエーガーズのトップの人で、ウェイブさんたちの上司なんですよ」

「ええ!?!じゃあめちやくちや偉い人じゃん!？」

「分かりやすい説明をセシルさんがしてくれたが……それならなおさら、俺が断るわけにもいかないだろう。」

「よ、よろしくお願ひします!」

「タツミちゃん、いいんです?」

コスミナさんに心配されたが、将軍クラスの間と鍛錬することなんて中々無いだろう。それに鍛錬だから死ぬ心配も無いし、怪我もまあ・・・そんなには無いはずだ。多分。

「タツミです、お願いしますリヴァさん！・・・やれるところまで相手してください。」
「その意気や良し。私も是非とも相手してみたいと感じていたところだ」

そのままリヴァさんと剣術で戦うことになった。軍式の剣術だろうと思つて立ち回るが、全て受け流される。

これが将軍クラスの力なのだろう、実際に異民族と戦うような人間なのだから当然だ。

真つ直ぐなままだと読まれる・・・！

エンシンさんのようなフェイントをかけるか、イズウさんのように精神を集中させて攻撃を読み切るか・・・

いや、俺はまだ二人の域に達してないだろう。
それなら・・・

距離を離して、まっすぐに相手を見る。

剣を構えて踏み出した。

「ふっ、甘い！」

リヴァさんが剣をいなそうとしたところで、俺は剣から手を離れた。

そのまま相手の懐に潜り込んで掌底を喰らわせる。

「っ……!!」

「……いよっしやあ!!」

元將軍相手に、やっと一撃入れられた。

リンネさんがシュラさんにやっていた技を使ってみたが、上手くいくとは思ってなかった。

嬉しくて笑っている俺に、リヴァさんが手を差し出してきた。

「若いのに中々からめ手を使ってくるのだな。だが、先ほどのはさすがだ。油断していた私の隙を上手くついたな」

「い、いえ！俺もリンネさんがやっていたのを思い出して……」

そんな会話をしていると、エスデス將軍が「よくやった」と俺のほうへとやってきた。

途端、俺の首に何かをつけた

「へっ?」

「褒美に、私の恋人にしてやろう」

頬を染めてにこやかに告白してきた。

「えっ」

「ほら、行くぞ」

容赦なく首輪につけられた鎖を引っ張って俺を連れて行こうとする。

「ま、ま、待つてくださいい!? 恋人!? 恋人って!?」

「恋人だ。お前に拒否権は無い」

無いかーい!!

エンシンさんたちに助けを求めようと視線を向けるが、この異常事態にエスデスさんの部下もエンシンさんたちも動けないようだ。

そりやそうだよ! 俺も良く分かってないよ!

「エスデス様、そいつはワイルドハントですよ」

ふと、エスデスさんの部下の：俺ぐらいの身長の方が声を掛けた。

「ニヤウ、文句があるのか？」

「引き抜くなら、大臣にどうこうってあると思うんです」

「言うことなら聞かせる。とにかく私はタツミを連れ帰る」

「・・・」

少し不服そうにしてから、俺のことを睨みつけてきた。

え、な、なんだいきなり・・・

とにかく、この状態をどうにかしたいと思っていたところにリンネさんが来て、なんとか制止してくれた・・・

助かった・・・

「セシルちゃんには、内緒ですよ?」

「結婚を前提に俺と付き合ってください!!」

コスミナさんと巡回中にいきなりコスミナさんにプロポーズしてきた人がいた。綺麗な季節の花で彩られた花束を差し出して跪いてる。

いきなりのことにコスミナさんもキョトンとしてるし、頭が追いついてないようだ。

「こらあ!お兄ちゃん!何いきなり告白してんのよ!」

「あいたあつ!」

・・・気が付くと、少し小さな少女が跪いていた男性の頭をチョップしていた。

少女は俺とコスミナさんのところまでやってきてくれるが、金髪で三つ編み姿が可愛らしい。

「ごめんなさい、うちのお兄ちゃんがいきなり迷惑かけました」

「・・・あつ、いえいえ、コスミナちゃんはイケメンさん大好きですから。一緒にイイことするなら・・・」

「コスミナさん!だからそういうことやるのは控えろってセシルさんも止めてましたか

らね!？」

今度は俺が少女と男性に謝る番だ。

とりあえず路上でもなんなので、男性が営んでいる店で休ませてもらうことになった。小さい店だが、いい雰囲気の弁当屋さんだ。

「仕事でウマトラ劇場に行くことが多いんですよ。その、コスミンさんがウマトラ劇場で歌っているのを聞きました。それでその歌う姿が綺麗で……」

「ごめんね、お兄ちゃんが。でも、どうせなら私とお兄ちゃんと友達になつてよ」

「……はあ。ん？ウマトラ劇場？」

「あつ、その、その話は……」

なんで劇場に？

「……コスミンさん？」

「うう、まだ秘密にしておこうって思ってたんですが……」

店を離れて、すぐ近くのウマトラ劇場にやってきた。劇団員が劇や歌の練習をしているようだが、コスミンさんが入ると、すぐに劇団員が気が付いた。

「おお！コスミンじゃないか！」

「はい、今日はちよつと見回りついでに……」

「ねえねえコスミナ、ちよつとこつちの歌を一緒に歌ってくれない？」

「お仕事ですけど……タツミちゃん、いいですか？」

「えっ」

いきなり聞かれて、思わず頷いた。

……どうやらコスミナさんは俺やワイルドハントのみんなが知らない間に劇場の人間と馴染んでいるらしい。

その間に劇場の支配人が俺に話しかけてきた。

「コスミナさんのスカウトの話をしていたんですが、まだ渋られてるんですよ。でも、時々歌ったりしてくれまし、劇団員にはいい刺激になってます」

「……はあ、でも、なんで」

「実はウマトラ劇場は……オネスト大臣の息子であるシユラ様が幼少期から懇意にしてくれまして。それでコスミナさんが帝都に来てすぐにこちらを紹介してくださったんですよ」

……それは初めて聞いた話だ。

コスミナさんもそうだが、シユラさんもそういうことは言っていない。リンネさんたちからも聞いたことが無い。

「最初はコスミナさんの性格に驚きましたが、シユラ様から予め聞いておりましたし。今ではコスミナさんと友人になった劇団員も多いのですよ」

「そうですか・・・でも、楽しそうにしていますね」

「ええ、ワイルドハントも危険な仕事と聞きますからいい息抜きになるかと思えます。もつとも、あんなに素晴らしい歌声の持ち主なら・・・」

「・・・」

「タツミちゃん、もうちよつとセシルちゃんたちには秘密で」

ウマトラ劇場を出た後、コスミナさんに頼み込まれてしまった。

「え、なんでですか」

「ふふーん！セシルちゃんも皆さんとお友達になってもらいたいのでサプライズしたいんですー！」

「サプライズって・・・」

「セシルちゃんも年頃の友達がいまませんし、他のみんなもそうでしょう？それにいつも、セシルちゃんはコスミナちゃんを心配してくれていますから」

「・・・そうですか。俺も秘密にしておきますね」

「ありがとうございますー！」

コスミナさん、故郷を追われて辛い思いをしていたらうに・・・帝都に来て、少しは幸せなんだろうか。

「シユラつちには感謝してます！帝都に来てすぐにあのウマトラ劇場を勧めてくれたんですよ」

「シユラさんが斡旋つて、なんか意外だなあ」

あまりシユラさんはそういうタイプには見えない。多少女遊びはしてるから、夜の街でも多少顔は広いみたいだけど、ウマトラ劇場のような類の人脈もあるんだ。

「うーん、シユラつちは最初、コスミナちゃんを劇場に置きたかったみたいですよ」

「・・・え？」

「でも、コスミナちゃんだつて帝具がありますし、帝具で倒したイケメンさんとイイこともできますから、今は保留してるんです。」

「そうなんですか・・・なんというか、コスミナさんはブレないなあ」

ちよつと正気が減つてるところはあるにしろ、コスミナさんも帝具使いとしてそれに強いから・・・

・・・でも、シユラさんがそういうことを言っていたのはなんか驚いたなあ

別に悪人とまではいかないけど、それなりにガラが悪いところあるもんな。エンシンさんと下世話な話でよく盛り上がってるし。

「そういえばタツミちゃん、遠方にいる官僚さんの護衛任務が入るそうですよ」

「護衛任務って・・・急ですね」

「リンネつちが急に。シユラつちからこっそり教えてもらったんですけど・・・シユラつちのお父さんと対立する派閥の官僚さんらしいですよ」

対立・・・つまりは良い官僚なんだろうか？

護衛ってことは、危険な目に遭うかもしれないってことだろう。初の護衛任務ってことか。

「どういう組み分けになるか分かりませんが、お互いに頑張りましょうね！」

「・・・はいっ！」

「・・・セシルちゃんは、死にませんよね？」

——帝都宮殿にて

ワイルドハントの執務室にて、リンネから任務が伝えられた。

それは僻地や田舎に飛ばされた文官の護衛任務である。

「護衛、ですか・・・でも、またなんでそんな」

「近々、民衆への備蓄配布などで外出する機会が増える。チヨウリ前大臣に至っては帝都に戻ってくるとのことだ」

その言葉に転生者である者たちは背筋を伸ばす。

そう・・・原作軸においてはオネスト大臣がエスデスに命じ、配下の三獣士たちがナイトレイドを騙り良識派の文官たちを暗殺していった事件のことを思い出したのだ。

「護衛ねえ、普通に雇われた奴がいるだろ。俺たちがわざわざ行くほどのもんかよ」

エンシンの言葉にリンネは「声が掛かったただけだ。俺も貴様らを外に出すのは不服だ」と答えた。

「コスミナには先に言っていたが・・・コスミナとセシル、タツミの3人でチヨウリ前大

臣と娘スピーア嬢の護衛を頼む。無事に帝都まで連れてこい」

リンネの言葉にタツミは「よっしゃ!」と気合を入れる。彼にとっては帝都から外に出て、初めての任務である。

「初の遠征任務!頑張ります!」

元氣よく答えるタツミに対してエンシンたちは笑っていたものの・・・転生者たちだけは表情を曇らせたり、リンネに対しての疑念のまなざしを向けていた。

・・・コスミナがセシルへと近づく

「セシルちゃんはコスミナが守りますからね!」

セシルに抱き着きながらコスミナは元氣よく言ったが・・・セシルには分かった。コスミナが不安がっている、と。

「姉さんは僕を守るから、大丈夫だよ」

・・・今のセシルは、それだけしか言えなかった。

——— 同時刻、宮殿内

「リンネもめざといようで、私にとつて邪魔になる文官を保護しようとしているようなんですよ」

ローストした肉の塊に齧りつきながらエスデスに自分の意見を伝える。それに静かに彼女は頷いた。

彼女にとってもリンネの言動は自分に対抗するもの……それだけなら彼女も嬉々として敵対するが、リンネは革命軍に行く素振りすら見せない。

「ちようど良いですから、リンネの手駒と戦わせてみましょう。シユラが集めてきた自慢の帝具使いの腕試しにはいいでしょうし」

「フン、相変わらず厳しいものだ。だがいい、私も戦わせてみたいところだ」

「これで負けたらそれはシユラの人選ミスですし、帝具は回収すればよいですからね」
「……代わりに、分かっているだろうな？」

エスデスの言葉に、オネストは軽くため息を吐いて「はいはい」と答える。

「イエーガーズへの補充要員でしょう？ まったく、ドSが過ぎますよね」

「それぐらいの見返りは必要だ。ダイダラとニヤウの二人にでも任せよう」

「おやあ、リヴァ”元”将軍は行かないのですか？」

「ランが抜けた穴にイエーガーズの参謀に就かせているからな」

そう、ランが抜けた穴をリヴァが代わりに埋めており、遠方に居るエスデス軍との連絡も彼が担っている。これ以上彼に仕事を担わせることができないのだ。

「裏切り者が出て大変ですなあ」

「それでもないぞ。ランとセリユの二人も敵になるならそれで良い。敵は多いほど楽しみが増えるからな」

彼女がくつくつと笑うと、オネスト大臣も「貴方も好き者ですねぇ」とニヤニヤと笑うのだった・・・

リンネの執務室にて

護衛任務の通達のと、転生者であるセシルとアオイの二人はリンネの執務室へと残っていた。残っている理由はもちろん・・・

「お前、三獣士が来ると分かかっていて何故護衛任務を出すんだ!」

「・・・コスミナ姉さんと僕、それにタツミで勝てるはずなのに」

・・・直談判、である。

「・・・要件はそれだけか」

リンネは彼らの意見に対して、書類を片づけながら簡単に返答をするのみだ。そして彼は2人から異論が出る前に彼は更に言葉を続けた。

「死んだならそれまでだ。ワイルドハントは殺すと決めたのを忘れたのか」

その言葉に、アオイはリンネを睨みつける。セシルは・・・顔を少し青くして視線を逸らしてしまった。

「鎖や首輪がなければ、すぐに人を虐げ、辱しめ、殺す奴等だ」
リンネは吐き捨てるように呟いた。

・・・彼のその言葉で、セシルは原作での彼らの悪逆非道な行いを思い出して身震いをしてしまった。

現在は多少は落ち着いているものの・・・悪性そのものが、消えているわけではない。
「……多少、長所があったとして、それで重ねた罪は、消せない。罪を重ねようとするなら消すまでだ」

・・・そこまで言い切つて彼はアオイとセシルに部屋から出るように促した。

大人しく執務室から出て、セシルはすぐに走り去ってしまったが、アオイはそこで立ち止まって壁を殴りつけた。

「許せない」

たつた一言、小さく呟いた。

「何もしていかない弟（シユラ）を、信じることすらできないあいつなんかには・・・分からない」

アオイは血が滲むほど唇を噛み締める。

「私は、イズウに救われたのに。救われたから、今度は私が助けえない」

「あいつを、殺さなきゃ」

「僕が守るから、安心してね。姉さん」

〔タツミ視点〕

前大臣チヨウリ様が娘さんを伴って帝都宮殿に復職するとの連絡を受け、護衛として俺と、イゾウさん、コスミナさん、そしてセルさんの四人が担当することとなった。

アオイさんは不服そうにしていたが、リンネさんが「同じ組み合わせでしか戦えないならチームとして戦うつもりが無いとみなす」と言ったことでなんとか納得してくれた。

アオイさんはいつもイゾウさんと一緒に行動したいらしいが、リンネさんはそういったものを我が儘だと思っているようだ。

うーん、確かに襲撃されたりした時に困るもんな。仲間の誰とでもそれなりに連携をとれるようにしないとイケない。

ナイトレイドは帝具使いの集まりだと聞く。

もしかしたらイエヤスやサヨも帝具を持っているかもしれない。

戦うのはもちろん嫌だ。あの二人は俺の大事な幼馴染なのだから。

それに俺だって、どちらかと言えば民衆のために戦うほうが性に合っていると自覚はし

てる。

「タツミちゃん、考え事ですか？」

考え事をしているとコスミナさんに声を掛けられた。

「えっ、あ、はい！すんません！」

「姉さん、タツミ君も緊張してるんだよ」

「そうなんです？」

セシルさんの指摘通りだ。

ただの護衛任務だけど、緊張している。人を殺すことは覚悟していたが、これは初めての遠征任務になる。

しかも護衛対象は前大臣とその娘・・・緊張しないわけがない。

「リンネ殿の指揮する秘密警察と聞いていたが、初々しい若者もいるものだな」

チヨウリ様が少しリラックスしながらこちらに話しかけてくれた。

「あのっ、はい！タツミといいます！この間、帝都に来たばかりで…外にいるイゾウさんたちより経験は少ないけど、頑張らせてもらいます！」

「ははっ、そう堅苦しくしないでいい。帝都にもまだ、有望な若者はいるようだな」

「リンネ殿の指揮下にいる方なら安心します。あの大臣の息子ですが反大臣派ですか。それに任せてください！いざとなれば私も戦いに参加します」

「え？えつと、スピア、様もですか？確かに武器はあるみたいですけど……」
チヨウリ様の娘であるスピア様が誇らしげに「こう見えて皇拳寺に認められていますので」と返してきた。

皇拳寺、と聞いてあのときのことを思い出した。

あの惨状と悲鳴と、謝罪もなく開き直った叫び……リンネさんを少し怖いと思ったときのことだ。

「ふむ、娘はこう言ってるがおかげで嫁の貰い手がなあ」

「うっ、わ、私だってあれですよ？気にしてないわけじゃないですけど！でもほら、殿方のほうが先に引いて……」

「スピアちゃんも可愛いですからすぐにお婿さんも見つかりますよ！ね、セシルちゃん。可愛いと思いませんか？」

「えっ、ぼ、僕に聞くの？ええつと、そうだな……」

そんな会話をしているうちに馬車がいきなり止まった。何かあったのかと馬車から降りると、そこにはエスデス將軍の配下である三獣士の二人・ダイダラとニヤウが道先に立っていた。

「おー、まじでワイルドハントもいやがった」

「好きにしていって言われてたし、いいよね？」

「いいのかよ、お気に入りの坊主もいるのに」

「僕らに殺されるぐらいの弱い奴なんか、エスデス様に気に入られる価値もないよ」

「チヨウリ様が雇った他の護衛たちも武器を構え、外で馬に乗っていたイゾウさんも江雪を構えている。」

まさか、エスデス將軍の部下が・・・同じ帝国の人間なのにどうしてだ!?

「セシルちゃん、どうやら喧嘩を売られたようですね。」

「チヨウリ様、スピア様は僕と姉さんが守ります。タツミ君は前線でイゾウさんと・・・」
「いやっ、待つてください！あれってエスデス將軍の・・・」

俺が慌ててセシルさんたちに事情を聞こうとすると、笛の音が聞こえてきた。少し力が抜けるような感覚を覚えてすぐに視線を三獣士の二人に向ける。

ニヤウと呼ばれていた小さな青年が笛を吹いている。

「ふ、笛?!」

「軍楽夢想スクリーム・・・っ！あれで護衛の皆さんの力を削いでるんです!」

セシルさんに説明され、すぐに剣を構えた。

「どうやらイゾウさんは帝具の影響をあまり受けてないらしい。それどころか、目の前の二人に対して、笑っていた。」

「江雪、そろそろ食事の時間だ。」

「おっと、そっちのアンタはかなりの手練れだな。いい経験値になるぜ」
どうやらダイダラのほうはイズウさんが相手をしてくれるらしい。

と、なると俺はあっちのニヤウのほうか。同じ帝国の人間なのに、なんでこんな真似をするのか聞かないとな。

ふと、後ろから聞きなれた楽器の音がした。

「音で相殺しました。眠ってしまった護衛の皆さんは仕方ありませんが、これでもう後方支援なんかさせません」

「そっちのダツサイ楽器の少年、よくやるじゃん・・・あーあ、腹が立つなあ」
どうやらセシルさんが帝具で相殺してくれたらしい。

チヨウリ様とスピア様はセシル君が庇っているが、スピアさんが武器を構えているのをチヨウリ様が止めている。

早くしないと無理にでも戦いかねない。

強さを疑っているわけでもないが、あくまでも護衛対象だ。戦わせるわけにはいかない。
い。

「僕は残りの雑魚を倒すからそっちはよろしくね、ダイダラ」

「おうー！」

ダイダラがイズウさんに向かっていく間に、俺はニヤウに斬りかかる。しかし帝具

【軍楽夢想スクリーム】で防がれてしまった。

楽器とはいえ、帝具だ。耐久性は並大抵のものではないらしい。

「未熟なくせに帝具持ちなんて笑わせないでよ、それ、保管庫にあつたなまくらじやん」

「んな話はどうでもいい！なんで同じ帝国の軍人がこんなこと・・・！」

「さあね！」

「このっ・・・」

競り合いをしているうちに、コスミナさんが背後に見えた。コスミナさんの帝具【大地鳴動へヴィプレッシャー】で攻撃するのだろう。

距離を離して避けたが、向こうもすぐに気がついたらしい。ニャウは軽々と避けてしまった。

「そっちの女の子共々、楽しみが増えたよ。顔の皮を2つも剥げるなんて今日はラッキーだね」

顔の、皮・・・?!

「さて、使いたくなかったけどやるしかないか」

そう言いながらニャウが笛を吹き始める。みるみるうちに小さな体が逞しい体つきになっていく。

「なっ、なんなんですかー?! イイ男だと思ったら変身しちゃいましたよ?!」

「じ、自分の強化までできんのかよ．．．!」

本当に帝具つてのはデタラメ過ぎる。ただの後方支援かと思つたら、あんな奥の手があるなんて!

「ふう．．．あんまりこの姿にはなりたくないんだけどなあ」

そんなため息を吐きながらも．．．こちらに向かつてきた。

「くそがつ!」

なんとか攻撃を帝具で凌ぐが、先程とは攻撃力があまりにも違う。

「エスデス様に気に入られるなんてっ、お前みたいな田舎臭いガキが．．．!」

「んなこと知るかつ．．．!」

「ここでついでにお前を殺せば、エスデス様だつて目が覚めるはずだ!」

とんだ言い掛かりだ。向こうが勝手に気に入っただけで、俺は何もしていない。

というか、そんな私怨で殺されるなんてたまつたもんじやない

「タツミちゃん!」

「!」

コスミナさんの声にすぐに攻撃を弾いてよける。今度こそニヤウにコスミナさんの攻撃が当たるかと思つたが奴は高く飛び上がつて避けてみせた。

すぐさま奴は．．．コスミナさんへと距離を縮める。

「さつきからうざいんだよ。先に殺しておくか」

「っ！」

ニヤウの攻撃がコスミナさんへと繰り出される。少しは避けていたがコスミナさんの首をニヤウが掴んだ。

「コスミナさん！」

「っあ、．．．！」

「生きたまま剥ぎたかったけど、首折ってさつきと済ませるか」

無慈悲な言葉に俺はすぐに飛び掛かろうとしたが、すぐ音が聞こえた。

音楽、というにもあまりに攻撃的な「音の塊」だ。

「ちっ、なんだ?！」

「セシルさん、何を．．．」

異変はすぐに起きた。眠らされた護衛たちの体が一ヶ所に集まっていく。一ヶ所に集まるだけではなく、混ざるようにまとまっていった。

骨の折れる音から体液が混ざる音、途中で目が覚めたであろう護衛の悲鳴がその場に響いた。

肉の塊、といえはいいのか。

あまりにも醜悪なそれを見て、吐き気を覚えた。

「なんだそれは!？」

「っ、せし、る、ちゃん、それは……」

「うっ……」

「やれ」

初めて聞いたセシルさんの冷たい声に肉の塊は反応した。真っ直ぐにニヤウのところへと向かっていく。

「こんな雑魚の塊に僕が倒せると思ってるのか!」

帝具の奥の手を使ったニヤウはコスミナさんを離し、自信ありげに粉碎しようとした。

その拳は肉の塊を粉碎することなく、塊にのめり込んだ。

「なっ、離せ!」

「呑み込め」

容赦なく肉の塊がニヤウを呑み込んでいく。叫び声も聞こえたとと思うが、あまりの光景に感覚が追い付いてこない。

あの穏やかなセシルさんは、味方であるはずの護衛を全て惨たらしい殺しかたをして、ニヤウまで手にかけてただなんて。

「姉さん、大丈夫?」

いつもより明るく、セシルさんはコスミナさんに話しかける。

「セシル、ちゃん・・・？」

「原作でも使えない雑魚だったし、姉さんを助けるために消費するぐらい役立てて良かったよ」

「何を言って・・・」

「姉さんは僕が守るから、安心して。姉さんを傷付けるものは、僕が殺すし、もしも姉さんが死んだら僕も死ぬから。ずーっと一緒にいるからね」

先程から、セシルさんにはこやかに話しているはずだ。だが、なぜこんなにも理解できない言葉を発しているのだろうか。

「最期まで姉さんと生きるためには邪魔だったからさ。ここは姉さんが死ぬべき時じゃないもん。リンネさんに原作を崩すなって文句言わないとなあ」

「セシルちゃん、何をさつきから・・・」

混乱する俺たちをよそに、雰囲気の変わったセシルさんは独り言のように呟いていた。

「姉さん、安心してね。姉さんを守れるぐらいには僕は強いからさ」

リンネによる面談記録、事後処理

【セシルへの尋問】

護衛任務達成したのに、なぜ僕だけ面談なんですか。

・・・タツミ君と姉さんが心配してたんですね。あとはチョウリ様とスピア様からのクレームですか。

・・・確かに眠らされた護衛を奥の手で使いました。

それが、なにか？

だつてあの時はああするしかありませんでしたよ。

三獣士といえばエスデス將軍の懐刀ともいうべき帝具使い。それが二人ですよ？原作よりも油断も隙もあつたとはいえ強敵でしたから。

だから、「使つてあげた」んですよ。

・・・ええ、そうです。三獣士に一瞬で殺されるようなモブキャラの彼らを使つてあげたんです。彼らだつて元々死ぬ予定だったからいいじゃないですか。

どうせ死ぬなら、「最期ぐらいまともなものに」しただけです。

なんですかその顔。

・・・そうそう、リンネさん。話は変わるんですが、もう少し原作通りにしましょうよ。

そうじゃないと、「最期まで姉さんと一緒に生きる」ことができませんから。

確かに僕はワイルドハントの方々と仲良くできるならしたほうがいいとは思いますが？

和睦もしたいですし、コスミナ姉さんには幸せになつてほしい。

でもそれは、「彼らが死ぬまで」という話です。

・・・だつてそうじゃないですか。優しいところもまともなところもあるんですから、せめて原作通り死ぬところまでは優しくしてあげないと酷いです。

僕だつて、覚悟してるんですよ。リンネさん。

だからコスミナ姉さんの最期を看取つてから一緒に死にます。

一緒に生きると決めましたから。

コスミナ姉さんがナイトレイドに殺されるまで、一緒に生きると。

【エスデスへの報告】

リンネか。話は分かつている。ニヤウとダイダラのことだろうか？

別に私は逃げも隠れもしないぞ。お前もある程度は分かつていて差し向けたんだらうが。

ふふつ、お前もよほど悪辣な趣味を持っているな。

・・・奴らが負けたのは、弱かったからだ。

それだけのこと。

それにこれぐらいの情報で大臣の権力は揺らがんぞ？ どうせ情報も揉み消されるだらう。

・・・詫び？

・・・ああ、ダイダラはあの刀使いにやられたが、ニヤウの遺体は原型を留めてなかったからか。確かにほとんどが肉の塊になっていたせいかな、判別するのも大変だったらしいな。

そんなことを気にしているのか？

・・・珍しく殊勝な顔をしていると思ったが。

いつものふてぶてしい態度じゃないから、病気か何かかと思ったぞ

貴様はそういったことは気にしないと申したんだがな。私や奴等も嫌っていたらう？それこそ殺すような勢いでな。

……貴様、中途半端だな。

正義感か何か知らないが、悪事を働く人間を徹底的に潰そうとするくせに倫理だの常識だのくだらんことを抜かして。

狂う素振りをするだけの凡人のくせに生意気だ。

……ふふ、いつもの表情に戻ったようだな。

それじゃあ話はそれまでだ。次にお前の部下と私の部下が戦えば、どちらが勝つかな？

【タツミとの雑談】

リンネさん！お疲れ様です！

あのつ、その……セシルさんはどんな様子でしたか？

俺たちが話したときはいつも通りで……いつも通り過ぎてて、怖かったんです。

コスミナさんも戸惑ってて。

普通だったんですか?!

あんな、護衛の人たちを巻き込んだのに・・・ですか。

・・・俺、セシルさんがあんなことを普通の気持ちでやるなんて思えなくて。

コスミナさんが殺されそうになったから、パニックになったんじゃないかって・・・そう思っただんです。

・・・あの、リンネさん? どうしたんですか?

・・・コスミナさんの様子?

今は落ち着いて、ウマトラ劇場のほうに遊びに行ってますね。最近友達が増えたらしくて、結構明るく・・・

え、リンネさん知らないんですか?

確かシユラさんが教えて、コスミナさんが時々歌を歌ったり遊びに行ってるんですよ。

あつ、これまだセシルさんには秘密にしておいてください!

コスミナさんがサプライズで喜ばせる予定だって言ってる・・・友達がいっぱいできたら、セシルさんも安心するだろうからって。

シユラさんもそういうことをやってるんですよ。

ちよつと悪ぶつてるところありますけど、優しいと思いませんか?

・・・リンネさん？なんでそんな顔するんですか。

騙してるとかそういうのじゃないですよ。劇場の人たちも脅されてる感じもなかったし、むしろコスミナさんを劇場に引き入れたいぐらいに気に入ってるんですよ。

あの、リンネさん

もうちよつとシユラさんのことを信じたほうがいいんじゃないですか？

だって悪いことなんてしてないんでしょう？

・・・あだだだ、なんで頬を引つ張るんですか!?

“そうやって油断させているかもしれない”って・・・

・・・確かにその、オネスト大臣がそういうことをしているのかもしれないですけど、だからといってシユラさんもそうするとは限らないじゃないですか。

一生懸命頑張ってますよ。

・・・って、もうこんな時間!?

俺、これからイズウさんとまた剣術の練習があるんですよ。またリンネさんも暇があれば、俺と組手や剣術の練習をしてくださいいね。

それじゃあ、俺はこれで失礼します！

「僕の姉さんに近寄るな」

護衛の任務があつてから、事後処理や面談などで少し慌ただしかった。コスミナとタツミ君は先に休みをもらつていて、今日から数日間は僕の休みになる。

帝具であるスカイハイを背中に背負つて街中を歩くことにした。

休みとはいえ、やることもないし、特筆した趣味はない。

転生する前、ひきこもつていた頃はずっとパソコンでネットサーフィンをするか漫画を読むかぐらいだったし、正直それも情性みたいなものだ。

帝都にも娯楽は溢れているが、あまり興味を持たないのは・・・別に娯楽作品が好きだったわけではないからだろう。

「あら、セシル君。おはよう」

「おはようございます。いい天気で良かったですね。お仕事、頑張つて下さい」

「おや、今日は休みかい？それならほら、うちのリングゴでもおやつにしな」

「ありがとうございます。また何かありましたら、気軽にどうぞ」

帝都の人間には愛想よく振る舞い、彼等の困り事は積極的に解決するように務めていく。

「セシルさん、非番なのに見廻り？仕事が好きなんだねえ」

「いえいえ、困ってる皆さんのために何かしたいだけですよ」

彼等には優しくしておくべきだ。いつナイトレイドに依頼するか分かったものではない。イエーガーズに頼る可能性もあるし、帝都警備隊だって危険かもしれない。

コスミナはいつか絶対に殺されるだろう。

だってどうあがいても魔女と呼ばれて迫害されたんだ。運命なんて覆らないし、やるだけ無駄だ。

どうせ他人なんて信用ならない。

誰だって自分が大事で、平気で裏切るんだから

他人なんて、何を考えてるか分からなくて怖い生き物だ

・・・自分だって、コスミナを殺そうと考えていたんだ。

自分にあんなに優しくしてくれたコスミナのことを・・・。だから、コスミナだけに負い目がある。

彼女だけは自分が信用してもいいと思えるだけの人間だ。

だからこそ、一緒に・・・せめて、彼女が殺されるまでは生きようと決意した。そうすべき、なんだから。

「ん？」

ふと、ウマトラ劇場から聞きなれた歌声が聞こえた。

コスミナの歌声だ。

何故姉さんがウマトラ劇場に？

あそこに査察に入る話は先だし、そもそも歌声が聞こえるなんてそんな・・・

だが、この歌声はコスミナのものだ。

劇場方面に堂々といかず、隠れるようにして様子を伺った。今日は練習日なのか、お客はいないようだ。

こっそりと覗いてみると、コスミナがウマトラ劇場の劇団員たちと歌いあつたり、何か話して賑やかそうにしていた。

・・・家族や数少ない人間にしかみせない、笑った顔で、楽しそうにしている。

胸の奥が焼けつくように痛む。

なんでコスミナはこんなモブ共と仲良くしてるんだ。そいつらはそのうち好き勝手殺して犯すくせに。

なんで僕の知らないところで、そんな幸せそうにしてるんだ。

まるで壊れてない、以前のコスミナみたいに・・・

コスミナがウマトラ劇場を離れたのを確認して、それから日が落ちるまで待った。練習日だから夜には帰るだろうが、誰かが来ると困る。

夕暮れ時に劇場へと入っていった。

「おや、君は確か……秘密警察の」

団長とおぼしき男が近付いてきた。

「ああ、街でよく見かける……コスミナさんの弟か」

「いつも街の人が感謝してるって聞いたけど」

「そうそう、うちも近所の人が手伝ってもらったって……」

団員たちの声がやたらと耳障りだ。

「すみません、僕の姉が来ていたようですが……」

「むっ……バレてしまったか。コスミナさんからは黙っていてほしいと言われたんだがなあ」

僕に秘密を作るなんて、何を考えているんだろう。

コスミナには僕しかないのに

「……すみませんが、僕に知られると困ることでしょうか？もしかして姉さんがご迷惑をお掛けしていますか？それなら……」

「いやいや、とんでもない！君の姉は逸材だよ。是非とも我が劇場に転職してほしいところさ。最も、そういうことは先々になりそうだが」

「転職・・・？」

「ああ。君の姉君は本当に素晴らしい歌声の持ち主だ。劇団員とも仲良くしてくれている。大臣のご子息から聞かされたが・・・大変な経験をされたようだね」

大臣の息子・・・シユラがそんなことするはずもない。こんな余計なことはリンネさんしかりないだろう。

悪人が嫌いだからと言いながら原作を変えてるし・・・何を考えているんだろう。

本当にあの人は・・・怖い

「コスミナさんは君のことも気にかけていてね。だから・・・」

「もういいです」

「えっ？」

「もう、かまいませんから」

劇場のどうせ死ぬモブたちと仲良く？

劇場に転職？

まったく、そんなことできるはずないじゃないか。

どうせコスミナの歌声で、みんな魔女扱いして迫害するくせに

それに、姉さんには僕だけいれればいい

他の人間なんて、姉さんをすぐ裏切ったりするんだよ、掌を返すんだから
コスミナにはもう、僕だけしかいないんだ。

僕だけで満足なはずなんだ。

それなのに、なんでコスミナを真つ当な人間に戻そうとしてるんだ。

こんな僕よりも酷い存在として堕ちてくれたのに。

あの理解できなくて怖い、色欲にまみれた魔女になったのに。

・・・そうなくても、家族（ぼく）のことだけ大事にしてくれる存在になったのに。
コスミナには、僕だけいれればいいのに

「セシルちゃん、無事でいてください・・・」

ここ数日、帝都ではとあるニュースが人々に不安を齎していた。

ウマトラ劇場で勤務していた人間のほとんどが1日の間に行方不明になったのだ。行方不明になっていないのは、その日に仕事が入っていなかった人間のみ・・・

この異常事態に帝都警備隊も動いたが何も証拠が見当たらない。

突然、煙のように消えたかのようにいなくなったのだ。

この事件に帝都の人間は不安を覚え、情報が錯綜した。噂が噂を呼び、次は自分じゃないかと怯える人間までいる始末である。

帝都宮殿、謁見の間にて

「余の耳にも届いた。至急、この事態を解決してくれ」

「はこ」

謁見の間にてエスデスが部下を引き連れて皇帝に頭を下げていた。特殊警察イエー

ガーズの中には新入隊員が二人ほど追加されており、その挨拶として謁見していたようだ。

謁見の間から出たあと、新たに追加された二人にエスデスが「最初の任務としては、荷が重いか？」と尋ねる。

「いいえ、そんなことありません！・・・私もできることをします」

「まあ、折角の栄転だ。さくつと解決させてもらいますよ」

チヨウリ前大臣の娘スピア、監獄の職員であり帝具スペクテッドに適応した処刑人のザンク

彼らはエスデスにそう返事をする。エスデスも満足したのか、「ワイルドハントに負けないようにな」とだけ伝えた。

一方、ワイルドハントの詰所にて

ワイルドハントの詰所ではタツミを筆頭にメンバーたちは暗い顔をしていた。

そう、ウマトラ劇場の一件があった日からセシルの姿が見当たらないのである。

コスミナはすぐにタツミと共に秘密にしていたこと・・・ウマトラ劇場の人々と交友関係があり、セシルに秘密にしていたことを他のメンバーにも伝えた。

「それを知ったセシルさんが劇場にいた時に事件に巻き込まれた可能性もありますね」
「・・・それはまあ、そうじゃな」

タツミの推測にドロテアは少し言葉を濁しながら返答した。
オリヴァーも何か顔色が悪い。

「セシルちゃん・・・もし巻き込まれていたら」

「安心しろ、きつとあいつも無事だ。帝具使いだし、チャンスをうかがっているかもしれない」

「そ、そうだつて！帝具使いは強いし。セシルはほら、ちよつと臆病つていうか慎重じゃん？きつと生き残れるように気を付けてるつて！」

不安がるコスミナをアオイとコハルが元気づけていた。

「・・・エンシンとイゾウは何も言わない。」

というより、ドロテアやオリヴァーと視線を交わしていた。

「アオイ殿、コハル殿。コスミナ殿を部屋に・・・今は不安だろうから休むと良い」

「それもそうよね。ほらコスミナ。とりあえず情報が入るまで待つてましよう」

「そうだな。イゾウ、気を遣ってくれてありがとう」

「・・・」

コスミナたちを部屋に下がらせてすぐに、エンシンは「セシルの奴じゃねえのか?」と発言した。

「あいつの帝具ならできるだろ」

「な、なに言ってるんですか!?!セシルさんがそんなことするわけないじゃないですか!」
「タツミよお、あいつの帝具の能力は覚えてるだろ?」

「それはそうですけど・・・」

エンシンの言葉にタツミは反論できなかつた。しかし、彼はセシルがそういったことをする人間じゃないと信じている。

今までも帝都の住民に率先して触れ合っていたし、コスミナにも優しくかつた。

「セシルさんがやる動機がないですよ」

「それならば、脅された可能性もある。セシル殿は好戦的ではないだろう?相手に脅迫されるような何かがあれば従ったかもしれない」

イズウの推理を聞くと、タツミも少し考えた。

「それは・・・そうかもしれません。もしかしてコスミナさんの命が狙われたとか、目の前で人質をとられたとかなら・・・」

「とにかく、そういった可能性があるのは情報共有しておきましょう」

「オリヴァーの言うとおりじゃな。コスミナには後でコハルかアオイから話してもらお

—— 帝都、とある店にて

「・・・リンネ、帝都で多くの人々が消えた事件があるだろう。ナイトレイドでも少し探ることにした」

「勝手にしろ。イエーガーズに殺されても知らないからな」

アカメの言葉に冷たく突き返すようにリンネは言うと、帰り支度を始めた。

「・・・革命軍には話を付けている。いつでも受け入れるぞ」

「悪人を全員殺したら考えておく」

それだけ言って、リンネは店から出て行った。

・・・メフィストがアカメにウイソクを返しながら、だが。

「お前さあ、兄貴が気が付くわけないだろ。いい加減、資金提供の話はやめろよ」
会話が終わると隠れていたシユラがアカメに話しかけてきた。

無論、シユラの近くにはロッドバルトが控えている。

「そうですよ？リンネさんからしたら、まさかシユラさんが資金提供して革命軍を支

援してゐるなんて発想になりませんよ」

「・・・兄貴が分かるわけねーっての。いい加減遠回しに気が付かせようとしなくていいだろ」

「・・・直接言ったところでリンネは聞き入れない。自分で気が付かないとだめだろう」
目を伏せがちに沈むアカメを見て、小さくため息を吐きながらシユラが隣に座った。

「つたく、それよか依頼だ」

「・・・ナイトレイドにか？」

「ああ。ウマトラ劇場の事件があつただろ。多分あれはうちの・・・兄貴と同じ、転生者がやつた」

「！」

シユラの言葉にアカメがすぐに彼のほうへと顔を上げる。

「兄貴が面談したが、あいつも面倒な奴だったみたいだな。・・・つたく、せつかく足抜けさせようってコスミナに劇場を勧めたのが裏目に出た」

「・・・話に聞いていた、西の魔女か。だが証拠は？」

「帝具の効果が届かない場所で目撃した奴がいるんだよ。そいつに詰所に行つて事情を話してもらうつもりだ」

「・・・だがいいのか？仲間だろうか？」

アカメの言葉に、シユラは答えない。

代わりにロッドバルトが愉快そうに返答した。

「だって、契約内容から外れてますもんね？」

「……」

「………本当に意地が悪いな」

アカメの言葉にロッドバルトは「選んだのはシユラさんですよ？」とにやにやと返した。

「助けようと思えば助けられますよ。彼のことを肯定してあげればいいんです」

肯定すればいい、と簡単に言つてのける。

しかし肯定してしまえばそれは……

「やったところで、兄貴が殺すだろ」

「……お前が見せた未来と、何も変わらなくなる」

「そうですね、でもほら……本来ならお互いに殺しあう側でしょう？それにいいじゃないですか……姉への愛に溢れたための嫉妬心なんてかわいいものですよ。それがたえ歪んでいたとしても、愛には違いありませんし」

彼の軽口にシユラとアカメは侮蔑のまなざしを向けるが、ロッドバルトは気にしないままにこやかに二人に話しかける。

「さて、そろそろお二人ともお仕事でしょう？アカメさんはお仲間を待たせてますし、シユラさんも詰所に戻らなくては」

「・・・つたく、これだから悪魔ってやつは面倒だな」

「それには同感だ」

「好きなんだよ、好きで好きで、愛してるんだ」

シユラは失踪事件の目撃者である人間を連れていた。

彼はコスミナに恋慕の感情を抱いている青年だ。仕事の折に目撃し、それからすぐにシユラへと報告したのである。

「コスミナさんの弟さんがなぜあんなことをしたのか・・・自分には分かりません」

「さあな。会ってから聞けばいいだろ。それよりもさっさと詰所に行くぞ」

「・・・そうですね。コスミナさんも心配でしょうし」

「だろうな。さっさと行くぜ」

それだけ会話して、しばらくは黙ったまま彼らは歩いていった。

緊張しているであろう青年はシユラへと話しかける。

「あつ、あの」

「んだよ」

「コスミナさんの弟さんは、どうなるんですか・・・？」

「そりゃまあ、良くても重い刑かもしれないし、それこそ死ぬかもな」

「・・・理由はまだ分からないです、けど・・・どうやったら助けられるんですかね」

「ああん？なんだよそれ」

彼の言葉にシユラが振り向いた。大臣の息子であるシユラに尋ねられて、彼はしどろもどろになりながらもこう伝えた。

「だって、コスミナさんのたつた一人の大事な弟さんじゃないですか！もし何かあったら……俺も、妹がいるんでわかるですよ」

「……」

家族を愛する気持ち、というものに対してシユラは実際はまだよく理解できていない。

父親を尊敬している気持ちはある。実兄であるリンネに対しては……複雑だが、少なくともそれなりに慕っている。

でもそれが愛かどうか、本人もよくわかっていない。

「……ふーん、そっか」

……そのため、こうして答えることしかできない。

正直、他のワイルドハントのメンバーたちの兄弟愛だの恋愛だの、そういうものもあまり理解していないのだ。

そうこうしているうちに詰所に到着したのだが……

「シユラさん!!コスミナさんが誰かに攫われました!!」

タツミの焦るような叫びによつて事態は急変する。

帝都内、とある場所にて

かさり、かざりと物音によつてコスミナは覚醒した。

気怠さを覚えながらも、彼女が見回すと・・・なぜだか薄暗い場所に自分がいることに気が付いた。

「(ん)は・・・」

ここで彼女は自分が意識を失う前に何をしていたのかを思い出す。

自室に戻っていたのだが、窓からセシルが現れた。もちろん彼女は喜んで彼に飛びつこうとしたのだが・・・そこでセシルが、帝具を使って意識が無くなった。

「起きたの、姉さん」

「つ、セシル、ちゃん！」

セシルの声で薄暗い中を見渡した。

暗闇に慣れた目と汚水の臭いでここが帝都の下水道らしき場所ということは彼女には理解できた。

開けた空間、その数メートル先にセシルがいたことに彼女は安心した……だが。その背後にいるモノに気が付いて、息が止まるように詰まってしまった。

「それっ……それ……」

「姉さん。どうしたの？何か怖い夢でも見たのかな」

「それは……セシルちゃんっ、そのひとたちは！」

「え？ああ、これ？姉さんに近づく悪い害虫を有効活用してるんだ」

それは三獣士との戦いでも披露した“人間の塊”である。

……ウマトラ劇場の人間を使った、“生きた人間の塊”だ。

悲鳴や呻き、絶望の嘆きが聞こえるそれに、コスミナは座ったまま腰を抜かして立てずにいた。

しかしセシルはそれに気が付くこともなく、いつものようにこやかな微笑みを浮かべている。

「姉さん、こんな他人を切り捨てるようなモブはいらないんだよ。僕が一番大事ならモブと付き合っちゃだめだよ」

「なっ、何を言ってる……や、やめてください！」

「やめ、る……？何言ってるの？姉さんはこんなの平気じゃないか。姉さんにとっての唯一は僕だし、姉さんは他人への愛情がない魔女なんだし」

「!」

魔女という単語を使った弟に、さすがにコスミナも表情を曇らせた。

「姉さんが死ぬまで、僕がずっといればいいんだよ。モブなんていらぬ、必要が無いんだ」

「セシルちゃん……こ、こんなことは……」

「姉さんは僕だけいればいいし、僕には姉さんだけでいい。僕は姉さんのことが好きだし、姉さんも僕が好きなんでしょう?」

腰の抜けたコスミナのところにセシルはすぐに近寄っていく。

「好きだよ姉さん。好きだよ、好き、大好き、好きなんだ、愛してる。姉さんのことを僕は愛してるんだ」

コスミナの右腕を掴み、その手の甲に彼は口付けた。

「つ……セシルちゃん、姉弟同士でそんなこと……できるわけ……」

その言葉に、セシルの視線がコスミナへと移る。

「え?なんで?」

まるで、「問題なんて何も無い」と言わんばかりの表情と目線にコスミナは……初めて、自分の弟に恐ろしさを感じた。

「皆さんは……私の、セシルちゃんとお友達に、なれるように……」

なんとか弁明するが、コスミナの弁明も聞かずにセシルは「そんなものいらない」と答えた。

今までよりもとても幸せそうに、濁った眼で彼は答える。

「姉さんがいれば僕は何もいらぬ。姉さんがいてくれたらいいから……邪魔なものは、全部消すね？」

「私には、選べません」

どうして、こうなったんだろう。

私はただ、家族を大事にしたかっただけなのに。

・・・思い出せば、小さな頃からセシルちゃんは変わっていました。

変わっていたというより、年齢のわりに大人びて・・・自分よりもずっと年上のよう
な気がしていたんです。

そんなの、弟に感じるなんておかしい話ですよ。

だから誰にも言ったことはありません。

「セシルちゃん、どうしたんです？」

「・・・考え事をしてたんだ。ぼーっとしててごめんさい。」

いつもどこか上の空で、ふとした時に寂しそうな・・・ううん、辛そうな表情を微笑
みに滲ませていました。

だから自分は、得意な歌でセシルちゃんに元気になって欲しかったんです。

楽しそうに歌えば、少しは笑ってくれたから。

魔女だと人々から言われたときも、家を放火されたときも、セシルちゃん以外の家族がみんな焼け死んだときも。

自分の傍には、大事な弟（セシルちゃん）がいたから、こうしてここまでこれた。なにもなくなつたわけじゃない。

弟が傍にいてくれる。

その気になれば、いつだって離れることはできたはずだ。

セシルちゃんはしつかりしていて、独り立ちできるはずなのに・・・

それでも、「姉さんといたいから」って微笑んで、傍にすることを選んでくれました。そのときから、セシルちゃんに少しだけ負い目ができたのかもしれない。

その少しあとに、シユラつちと出会いました。

シユラつちはワイルドハントに誘ってくれたとき、セシルちゃんはとても悔しそうな顔をしてました。

・・・でも、故郷ではもう普通に生活できなかつたから。

私だけじゃなくて、セシルちゃんまで魔女の手先だと差別されるのは避けたかった。

私はシユラつちの誘いを受けて、ワイルドハントに入隊しました。

そのうち、シユラつちは劇場を紹介してくれたんです。

「帝具は回収すつけど、帝都で暮らしていけるならいねーだろ？」

「でも、いいんですか？ コスミナちゃんもセシルちゃんも帝具の適応者なのに・・・」

「エスデスのねーちゃんのデモンズエキスでもあるまいし、後任なんざいくらでも見つ
けられるだろ」

「・・・いいんですか、ワイルドハントをやめて・・・この国の住民になつても」

「いいだろ別に。お前の歌声ならすぐにスターになれるし、【大臣の息子のお墨付き】つ
てんなら箔はつくしな」

「シユラっち、親の七光りを存分に利用してますね！」

「そりゃあ、利用できるもんは利用しない手はないだろ。」

「そういうところ、冷めてますよね〜」

「うっせ。ま、辞めるタイミングは考えておけよ。セシルの奴なら反対しそうにないが、
あいつ遠慮しそっだしなあ」

「ふふっ、セシルちゃんの心配までしてくれて、ありがとうございます」

「・・・おう」

・・・あのとき、ほんの少しだけシユラっちの表情が曇ったような気がしました。

もしかしたら、シユラっちはセシルちゃんの抱えていたことに気が付いていたのかも
しれません。

・・・それでも、シユラっちのおかげで新しく平穩に暮らせるはずでした。

例え、この先にセシルちゃんが離れる未来になつたとしても良かった。

それでセシルちゃんが自分自身の幸せを掴めるならそれで良かった。

この帝都で、普通に暮らしていけば・・・

「姉さん、食事も準備したんだよ。簡単なものでごめんね？」

にこやかに笑いながら、簡素なテーブルにパンや飲み物が置かれていた。

だが、少しだけ離れた場所にはあの肉の塊がある。

「その、セシルちゃん・・・」

「あ、ごめんね。食欲がなかった？下水道とはいえ、臭いがない浄水場の近くにしたんだけど・・・」

「違いますっ、あの、いまならみんな許してくれますからっ・・・こんなこと、やめてください」

「なんで？」

とても不思議そうに、セシルちゃんは返答してきた。

「だって、姉さんはもつと悲惨で救われなかったはずだったのに。なんで普通の人間み

たいなことをしようとするの?」

「え・・・」

「姉さんは今のまま、ううん、原作みたいにもっと理解できないものにならなくちゃ困るよ」

セシルちゃんの言葉はよくわからない。

まるで魔女だと迫害されることを知っていたような・・・

ううん、それ以上にこれからどうなるか、わかったような口振りだ。

「姉さんは優しいけど、優しくしてくれるのは僕だけでいいのにさ。・・・やっぱり、シユラがきたときにあいつを殺しとけば良かったな」

「っ、なんてこと言うんですか! シユラっちのおかげで・・・」

「だって、姉さんがまともになると思ってた!!」

突然、机を叩いてセシルちゃんが叫んだ。

「いつかは殺さないといけなかった、でも好きだから一緒に死のうと覚悟してたの! なんでそんな、普通のこと言うんだよ!」

「な、なにを・・・」

「あら、お邪魔だったかしら?」

「わかんないけど、いいんじゃないの」

聞いたことのある声に、声が聞こえた方向をみた。

イエーガーズのスタイリッシュとクロメの二人だ。あと、何人か引き連れている。

「ふふ、アタシたちが一番乗りね」

「新しく仕入れた子も使えるし・・・」

「・・・姉さん、待っててね。今すぐあいつらを殺すから」